

283-64



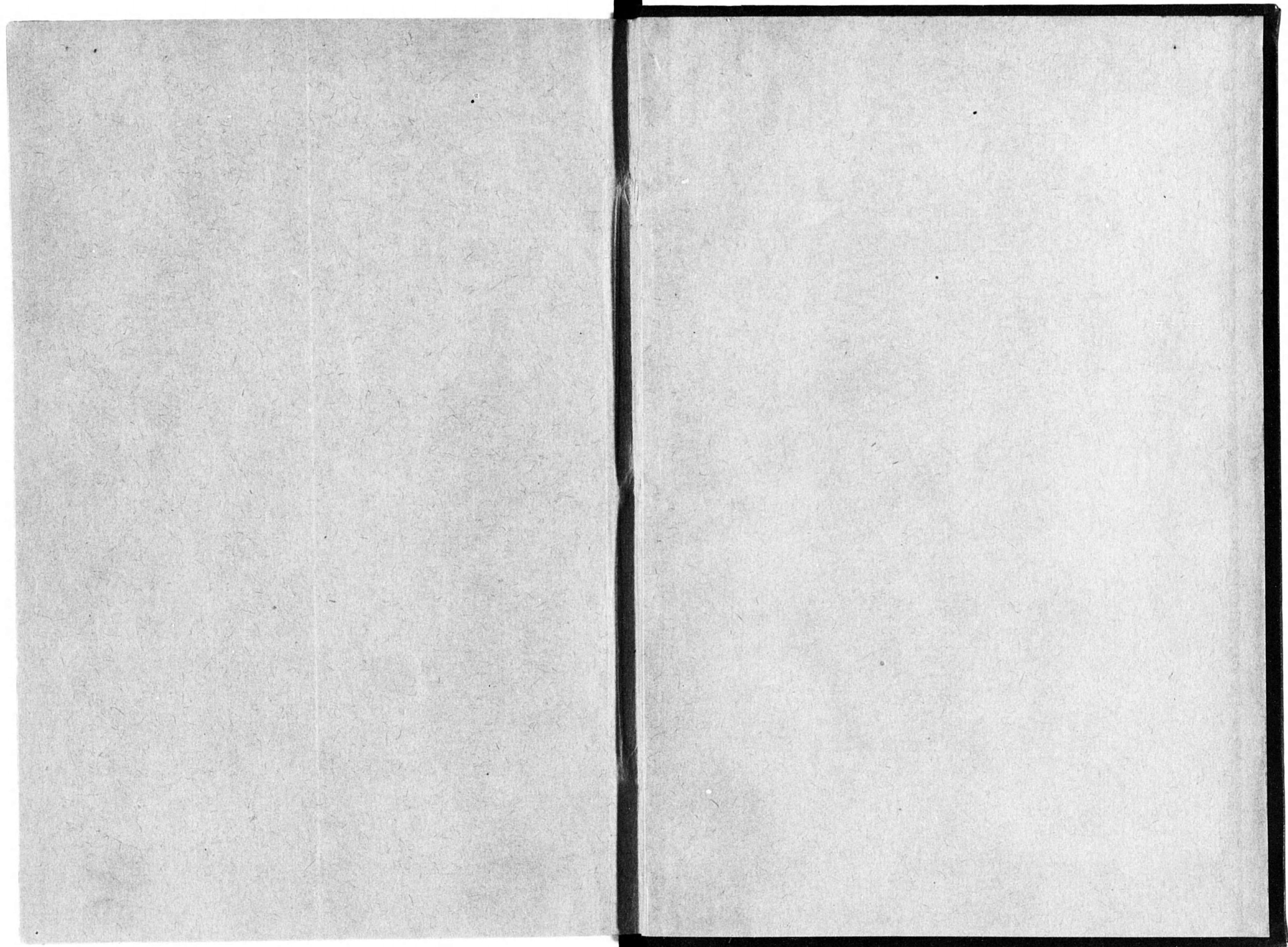
1200501362741

283
64



始

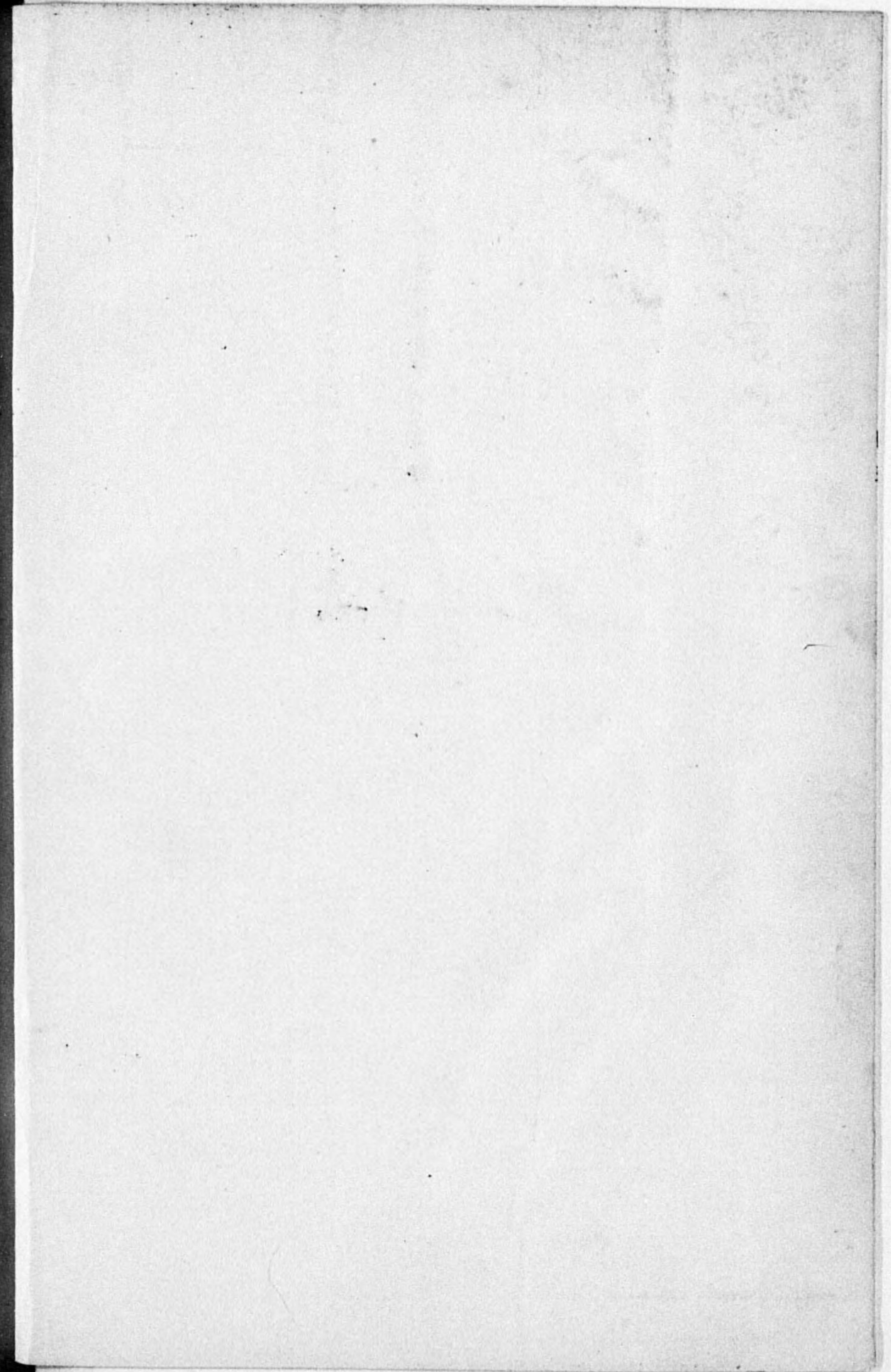
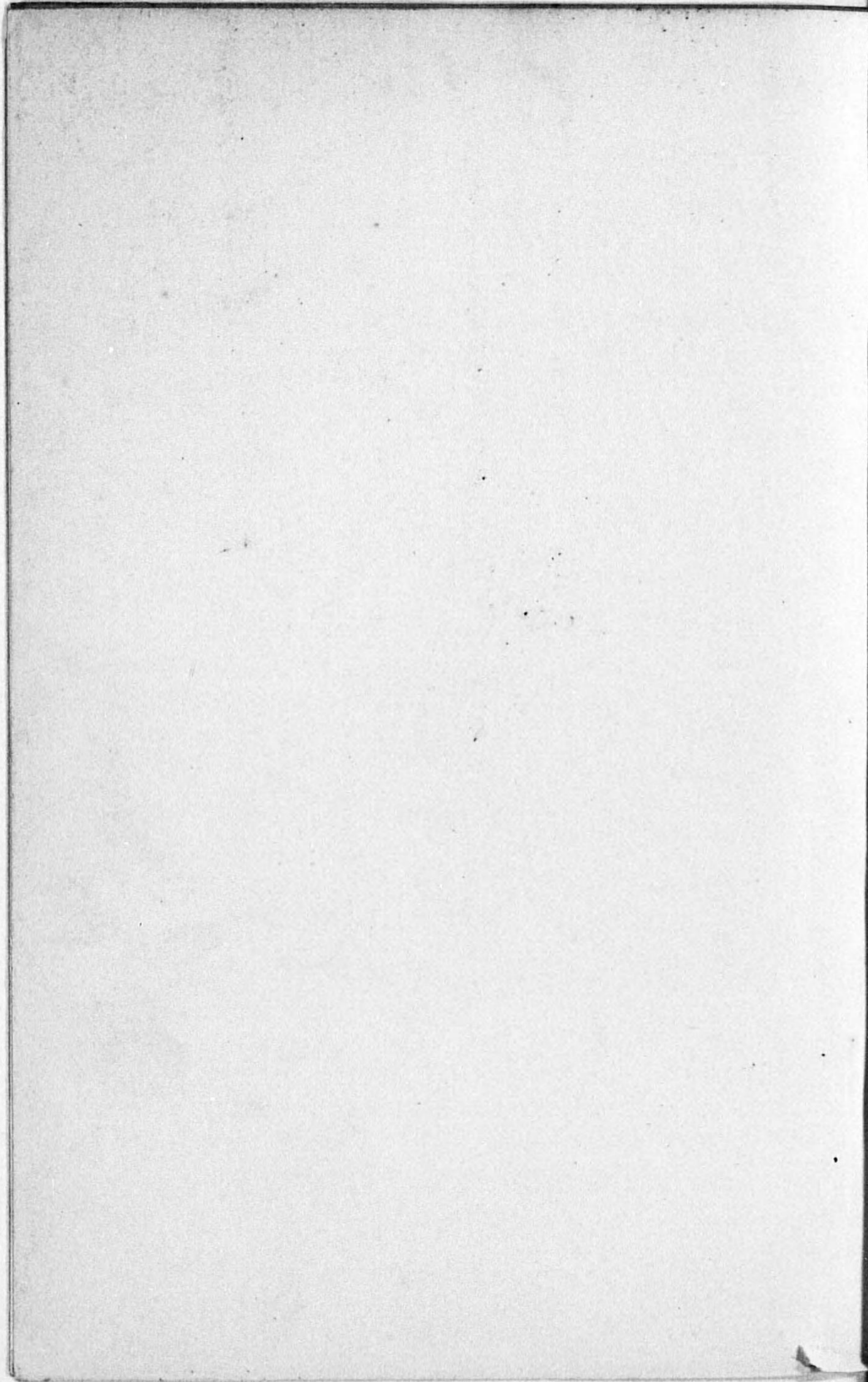




283

64

第三高等學校辯論部部史





昭和十年十二月

高等學校辯論部部史

三高辯論部



283-64

序

明治、大正、昭和の三時代を通じて前後四十三年に亙る歴史的記録である吾が三高辯論部々史が遂に完成され、其刊行記念講演會が昭和十年十二月七日を卜して京大樂友會館に於て開催されることになりました。

吾が辯論部が夙く大正期の後半に於て、三高嶽水會各部の部史編纂の必要を率先提唱して部史編纂の準備に着手した事實が、嶽水會同窓會をして、今上御大典記念事業の一たる神陵史編纂の計劃を示唆する動機となつた次第は、前辯論部々史の序文に敘述した通りであります。茲に前辯論部々史と申したのは、本書を部史第二版と稱すべくば部史第一版とも稱すべき昭和六年十一月下旬發行された部史を指すものであつて、實に本書即部史第二版の底本となれるものであります。而して其部史第一版の編纂完結の披露祝賀の宴が京阪神の諸先輩に依りて四條橋畔の菊水樓上に於て開かれたのは、其年の十一月廿九日であつたから、本部史の完成刊行までの間に、丁度丸四年の星霜が流れ去つた譯であります。

前部史は綾村勝次氏の手に成り、本部史は徳田多賀雄君が編輯の任に當られました。今兩書の差異を要約すれば、前者は第三高等學校演説討論部が創設された明治三十二年紀元節に始まり昭和四年度の行事に擱筆した記録であり、後者は更に明治二十年頃に溯りて稿を起し近く昭和九年度に至る期間の部の事業を載録してゐる。曩には謄寫版假綴の冊子本であつたが、今次は寫真版四十七葉を挿入した堂々たる印刷本の體裁を完備せる書籍とな

つて刊行された。而して今次出版の部史は、其體裁の改善と相俟つて、其内容に於ても部行事の羅列的記録であつた前書の遺漏缺陷を補修訂正して、大に充實した様相を具現するに至り、略々完全な部史たる面目を具備する完本となつた事は、洵に同慶に堪へぬ所であります。其記事は悉く信憑すべき記録文獻の援用に依り、或は先輩諸氏の追憶懷舊の談話に典據して、豊富な資料に極めて妥當なる剪採取捨が施され、同時に全篇を通じて適切に綜合統一された結果、各時代の行事の一般的情況の描寫より各行事の細部の敘述に及ぶまで、往年部員諸氏が神陵の壇場に於て或は東西の學生辯論界に於て夫れ々活躍せる状態を如實に眼前に髣髴せしめる觀があります。

本部史の一特徴として光彩を放つものは、各期の劈頭に置かれたる透徹せる論評的『概觀』でありませう。之に依りて各時代の特殊の様相とも謂ふべきものが、或程度まで可成り明確に指摘闡明されてゐますが、是は編者の最も苦心された點であつたと考察されます。各期の特殊相を當年の社會的思潮國家的意識乃至文藝的運動の趨勢と云ふ背景と裏面に依つて檢覈せんとするは、寔に至難な計劃でもありまた隨分大膽な意圖でもありますが、編者の冷靜な學究的觀照は遂に斯の至難な意圖を克く實現されて、本部史をして、單純なる辯論部の行事の一記録たるに止ることなく、同時に神陵生活を透つた若き當年の學徒の思想史とも看做しうる者を書き上げた事は、讚歎に値すると思ひます。此意味に於ても、本部史は後の他の部史を編述する人々にも若くは神陵史の編述其者にも、必ずや貢獻すべきものありと信じます。

資料蒐集のため編者たる徳田君が、文字通り東西に奔走して如何に努力せるかは、『編纂日誌』に見える通であります。其の間博搜洽索の末、遂に京都日出新聞社の書庫に迄出入して其の塵埃堆裡に古新聞を涉獵するに至つた一事、能く之を語つて餘りあると考へます。また徳田君を輔けて此事業完成のため獎勵指導便宜を與へられた先輩達は、其數寔に多く、文書に由る以外、直接徳田君が面接して示教を受けた人達丈でも五十名を超えてゐると承知してゐます。今此等の先輩諸兄の芳名を茲に悉く列擧することは遺憾ながら出来ませぬので、詳しくは編纂日誌に譲つて、姑く各地に於ける代表的諸氏の芳名を掲ぐることを許されるなれば、東京に於ては田邊勝邪、森川智徳、伊藤清、津島純平、山本勝市の諸氏、大阪に於ては岸田幸雄、阿部藤造兩氏の名を逸することは出来ぬと思ひます。また特に京都の汐見三郎氏に就ては、本部史の完成が氏に負ふ所奈何に多大なるかは第一版部史の緒言に既に縷説した所であるので、反覆を省略しますが、氏の終始瀲らざる眞摯熱烈な支持指導なくしては、本部史は世に現はれる機會がなかつたであらうと評しても、決して溢美な讚詞ではないと信じます。

最後に、本部史が前部史に繼いで今日早くも日の光を見るに到れるは、本書の印刷出版費を進んで寄捐せられたる阿部藤造及び岸田幸雄兩氏の特別なる援助の資である事を明記して、深厚な謝意を表します。

昭和十年十二月三日

安藤勝一郎 識

懷 舊 談 片 片

山 内 晋 卿

いよ／＼今度三高の辯論部史が完成出版せらるとの事である。その輪廓とも稱すべき昭和六年の謄寫稿本を見て一見感心したことは、兎にも角にも三十餘年の長日月に互り各回の日時、演題、演者の氏名の遺漏なく順次記述せられて居ることである。老生の在職中に終始挈はつて居た三高佛青の方は、記録が散逸して收拾すべきやうのないのに比較してます／＼その感を深くする。

さて巻を披いて見て行く内にその當時の理事、演者の風采舉止は髣髴として心眼に映じ来る。いづれを見ても元氣颯爽有爲有望の青年諸氏ならざるなし。演説内容は記憶し居らざるも、その上手下手、進歩の度合、乃至各個性の現はれ、例えば某君は口が廻りすぎた、某君は生得吃りなれど演説は落附拂つて美かつた、某君はジェスチュアを行りすぎた、誰は聲色を使ひすぎた、乃至誰々の如きは波瀾老成、もはや斯道の堂に升つて居ると、臚氣ながらその一々の光景が眼前に展開さるゝ。實にかやうの事共はその場に立合つたものだけ味ひ得る特權でがなあらう。

當時理事會に於ける各部豫算の争奪戦もまた目醒しきものゝ一つである。部長は票決に預かれず、只夜深まで

居残りて傍觀する。さて理事相互の間にはちと大袈裟の形容なれども合従連衡を策するものあり、反間苦肉の計を弄するものあり。凡そ辯論部は最小額の豫算しか割當てられず。されども一部である以上は他部並みに理事三人控えて居り、キャスティングヴォートを握るべき機会を狙ひながら掛引をさく／＼怠らず。之は何もその部の理事に限つたことにはあらねど、若し他日這種の經驗を要する人士に取りては随分有功であつたかも知れない。

辯論部の豫算の最小額なる理由は、その事業の性質が一文なしでも行つてゆけるからである。しかしその事業を効果的に運ぶと云ふことは談なんぞ容易ならんや。何となれば演説の開會は土曜或は祝日前日の午後には非ずんばその夜である。之は學生に取りて大事の書入れ日である。或る方面に繰出すべく待機の姿勢に在る。その飛出す出足を引留めて午後には居残らせ、或は夜分に釣り寄せねばならぬからである。その對策には名士來演の顔觸れも一策である。然らずんば菓子包の配分である。そこで理事の苦心はなるべく名士を頻繁に招聘し且つその接待費を節約して、招聘する能はざる場合に配分すべき菓子包の内容を豊富にし、即ちかゝる場合にも聴衆の多數を贏ち得て甚だ落寞たらず一方理事の面目を立て他方梅擔堂の阿爺を悦ばすに在り。それ然かり時あつてか菓子配分の時分を見済まし、寄宿舎から俄然大舉して會場に殺到すると云ふ番狂はせあり。また反對に宛が違つて來聴者少く最後まで踏留れる勇士の面々には更に半人前の割増を行つて、菓子包の餘剰を處分する場合もないではない。要するに罪のない話である。一體學生各自が會費を前納しながら設ひ一小部分にせよ最も公平に最も廣範圍にその割戻を受け得らる仕組になつて居るのは、我親愛なる辯論部のそれではあるまいか。

尤も辯論部とても長年月の間に盛衰消長常ならず。最盛時にはクラスによつてクラス別に小會を拵え、小會に分かれ、大會に合す。或は目先きを替えて外國語演説を特開した。殊に擬國會に至つては大評判を博した。多數が一時に登場して各自の役割を扮演する所に甚大の興味あり。また從來討論の方は不振を極はめた、それがこの中に入りこみ所屬黨派の色別より甲論乙駁、大に活氣を呈するやうになつた。而して演説の腹稿を練るのと違ひ、多分に臨機應變の機智を要する。なほ何時でも最後は政府不信任案の上程、解散詔勅の降下と云ふ段取を以て終幕、タオルを腰からぶら下げた大臣閣下の退場等々。これまた人によつては他日の爲に貴重なる經驗を與えたことであつたらう。

さて先きに云つたやうに名士の招聘にはあまり費用を使はないことにした。その名士なるものは固り學生の會からお禮を欲しがらうな人は恐らく一人もない。またこの方からも少々の物をさしあげて却つて失禮になるやうのことは敢て差し控えることにした。人によりては部長が會を代表して頼みに出掛けたり、又跡から出掛けて口頭を以て叮嚀に口上を並べ引き退がるだけのことである。しかし名士の中に何時でも頼めば文句を云はず氣輕に來て貰へる人も甚だ必要である。その人は自ら進んで學生中に飛込み、自分の昔の學生時代に若返つて、瞬間の學生氣分に浸つて見たいと云ふやうな人であつて欲しい。それには吾三高の辯論部は偏強の場所であらう。學生の仲間同士に對してはその演説に向ひ野次を浴せ掛ける。これは演説に精進する爲の猛練習であるからである。しかし苟も來賓に對しては相當の禮儀を失はない。但し可笑しいときは笑もすべし、面白いときは拍手もせん、

或は一二の警句も飛ばし兼ねまじ、決して堅く鱧子張らない。これが諸先生の地方の講演または講習にお出掛けなされた場合と趣を異にする點であらう。これらの點が吾部をして一部の名士を喜ばした所以であつたらう。こゝに老生は故人の新渡戸稻造氏を想起せずには居られない。

或る時他の運動關係の部に於てメダルを造ることが流行つた。吾部の理事も豈に獨り人後に落ちて已まんやと慷慨一番して、いかに工面したりけん猪口型の小銀杯數個を拵えた。丁度その折柄、菊池大麓氏を招聘し一夕の演説を乞ふた。折田會長もわざ／＼老體を枉げられ接待に勤められた。そこで早速その場に於て來賓と會長とに銀杯を贈呈し、部長理事もその餘澤に浴することを得た。銀杯にはその年度と會名、部名と紀念の字が彫刻されてある。之を貰つたのは演説の出來不出來に由つた次第ではない。之が他のメダルと違ふ所である。何にしても老生部長在任中、空前絶後の出來事である。この一事を以てしても吾部がいかに忠實なる梅擔の顧客であつたかは想像に難くない。

辯論部の部長は有り體を云へば他部のそれよりも樂の方であらう。大抵の事は理事が行つて呉れるから。しかし此所にも禍機が孕まれて居ぬでもない。それは他に非ず當時一高の部長が某氏を演説に招いたことから物議を惹起し遂に主務省から部長は譴責に處せられた。また三高内にも雜誌部長が一往原稿を檢閲した跡に、雜誌の冠頭に裸體美人の名畫を複製して一々貼附した。その事について府廳側の平日風教維持に専念せらるゝ役人からお尻をつゝかれて遂にその部長は校長から交迭させられた。彼れを見また此れを思へば、部長たるもの甚だ以て油

斷のならぬ次第である。

殊にその當時に各學校聯合演説大會なるものが流行り出した。今日の如く上級學校の當該部が主催するのではない、お互ひ同士で廻り持ちに開催する。さて設ひ主催側の部長が出場各員の演説要領を徴して檢閲して見ても實際は駄目である。出演者の油が乗りて來ると大向ひの場受けを當て込み一個半個の警句を發するのを豫防すべき手段はない。しかし不幸にしてそれが萬一その場に居合せた新聞記者の筆先きに面白可笑しく書き綴られ明日の紙上に再現されると案外廉が立つて見える。元來御當人の方では新聞の時事短評を口眞似した程度の物なれどもその影響は意外の所に及ぶ。殷鑑遠からず近く一高部長に在り。さてこの掛念さへなければ部長は樂なものであり、面白いものである。否なそれが面白く思はれないやうでは永年無報酬で勤まる譯のものではあるま

す。

甲子春去京口占

栖 栖 舊 作

去京就國自傷心

始覺鬢邊霜雪侵

啼鳥送人春色暮

飛花黏水夕陽沈

鷄鳴已出三千容

馬骨誰求五百金

教育英才非我任

優游只合老山林

欠

欠

一郎先生、舊部長山内晉卿先生に本書を謹呈する事の出来るのは部員の最も喜びとする處である。

第三高等學校辯論部の記録を作ると云ふ事だけが本書編纂の最初の目的であつた。然し出来上つた本書を眺めると、學窓を通じて見たる社會の變遷がまさしくとうつし出されてゐる。我國學生の思想の變遷、更に大きく我國社會の思想の變遷が本書を通じて之を理解する事の出来たのは豫期せざる大なる副産物であつた。

本書の編纂は十年以前に濱口重國君が着手せられしに始まり、綾村勝次君によつて形態を具へることとなり、遂に徳田多賀雄君の献身的努力に依り完成せられる事となつた。此等諸君の手になる原稿を出版し同時に安藤先生山内先生に記念品を贈呈する爲めに部員百五十人より寄附金を仰いだのである。頁数が豫定を超過したる爲め豫算が甚だしく狂つたのであるが、岸田幸雄君、阿部藤造君の援助により之を切り抜ける事が出来た。努力と云ひ費用と云ひ凡て第三高等學校辯論部員のみの手により辯論部史が編纂せられ、新舊部長先生に敬意を表する事が出来たのは、全く我が辯論部の精神の發露せられた結果に外ならない。本書の刊行を機として第三高等學校辯論部が更に一段の飛躍をなす事を信するのであるが、此等將來の記録は將來の部員の手によつて立派に編纂せられたいものである。

昭和十年十二月一日

汐 見 三 郎



史部論辯校學等高三第版年六和昭 —

○ 我が三高辯論部に於て部史編纂のことが議せられて之に着手せられたのは大正十四年のことであつた。爾來歴代理事、部員の努力が此の事業に捧げられたのであるが、主として綾村勝次氏の御貢獻により昭和六年十一月一先づ編纂を完了して出版せられたのが表掲せる所のものであつて、本部史編纂の底本をなせるものである。

凡 例

- 一、本部史はさきに綾村勝次氏によつて編纂された第三高等學校辯論部史を底本としてそれに壬辰會雜誌、嶽水會雜誌所載の關係記事及び先輩諸氏の懷舊談其の他を參考として解説を附し、以て一の體裁を具へしめたものである。
- 一、本部史の時代區劃は便宜に基いてなした所もあるが大體それ々々相當の根據を持つものである。それは讀むに従つて了解されるであらう。
- 一、本部史中『』は標題、當時に於て用ゐられた語、又それがそのまま他から引用せられたものであることを示し、『』は直接人の語られた言辭を指すものと見られて大體差つかへない。
- 一、本部史敘述中殊に演說會・擬國會等の記事については之に關する充分なる資料を有して而もその敘述をなさざりし所が尠くない。要するに限られた紙面を成可く活用するの意に出でたことを諒とせられたい。
- 一、寫眞は全部で四十七葉を挿入した。之は各方面から蒐めたものであるが、殊に明治時代のものには殆ど入手得ず、全體として統一に缺くる所あるも、各時代を偲ぶ葉として多數を收載した。

目次

前史 嶽水會演說討論部設立以前……………一

第一 壬辰會以前……………一

第二 壬辰會時代 (明治二十五年より明治二十七年に至る)……………三

壬辰會の組織と演說討論部の創立……………三

演說討論部規約……………四

明治二十五年度……………七

明治二十六年度……………九

明治二十七年度……………一四

壬辰會の解散……………一八

第三 嶽水會演說討論部設立以前……………一九

第二期 (明治三十二年より明治四十三年に至る)……………三二

序……………三二

嶽水會演說討論部の設立……………三二

第一期概観……………三

第一前期（明治三十二年より明治三十五年に至る）……………三

概観……………四

明治三十二年度……………六

明治三十三年度……………三

明治三十四年度……………四

明治三十五年度……………五

第二中期（明治三十五年より明治三十九年に至る）……………三

概観……………三

明治三十六年度……………三

明治三十七年度……………六

明治三十八年度……………六

明治三十九年度……………七

第三後期（明治三十九年より明治四十三年に至る）……………三

概観……………三

第二期

（明治四十三年より大正十一年に至る）……………九

序……………九

第二期概観……………九

第一前期（明治四十三年より大正三年に至る）……………九

概観……………九

明治四十四年度……………九

明治四十五年度……………一〇

大正二年度……………一〇

大正三年度……………一四

第二中期（大正三年より大正七年に至る）……………一四

概観……………一四

大正四年度……………一三六

大正五年度……………一三五

大正六年度……………一四〇

大正七年度……………一四四

第三後期 (大正七年より大正十一年に至る)……………一五〇

概観……………一五〇

大正八年度……………一五三

大正九年度……………一五六

大正十年度 (一)……………一六三

大正十年度 (二)……………一六五

第三期 (大正十一年より昭和六年に至る)……………一六六

序……………一六六

第三期概観……………一六六

第一前期 (大正十一年より大正十四年に至る)……………一七二

概観……………一七三

大正十一年度……………一七三

大正十二年度……………一七四

大正十三年度……………一七六

第二中期 (大正十四年より昭和三年に至る)……………一八〇

概観……………一八〇

大正十四年度……………一八一

大正十五年度……………一八八

昭和二年度……………一九三

第三後期 (昭和三年より昭和六年に至る)……………一九七

概観……………一九七

昭和三年度……………一九九

昭和四年度……………二〇三

昭和五年度……………二〇六

現誌 (昭和六年より昭和十年に至る)……………二〇九

結語……………二一〇

目次……………二一〇

附録

第三高等學校辯論部關係者名簿

編纂日誌

部史刊行記念講演會及び謝恩會について

寫真目次

一	昭和六年版第三高等學校辯論部史之小影	一
二	水曜會記念寫真	三
三	大正二年五月 送別寫真	四
四	縱橫會幹部記念寫真	五
五	學堂會開催に關する尾崎學堂氏の書翰	五
六	双松會記念寫真	五
七	大正三年二月 演說討論部大會記念寫真	六
八	大正三年五月 送別寫真	六

九	大正四年十一月 御大典記念全國學生演說大會記念寫真	七
一〇	大正五年四月 三高一高聯合演說會記念寫真	七
一一	大正五年五月 送別寫真	八
一二	大正六年四月 三高一高聯合演說會記念寫真	九
一三	大正六年六月 送別寫真	九
一四	大正七年二月 擬國會の狀況	一〇
一五	大正七年四月 三高一高聯合演說會記念寫真	二
一六	大正七年五月 送別寫真	二
一七	大正八年二月 擬國會の狀況	三
一八	大正八年二月 擬國會の前況「校内新聞を見る三高生」	三
一九	大正八年六月 送別寫真	三
二〇	大正十年一月 三高一高聯合演說會記念寫真	四
二一	大正十年二月 送別寫真	四
二二	大正十二年二月 送別寫真	五
二三	大正十三年二月 送別寫真	六

二四 大正十四年八月 三高一高聯合演説會記念寫眞……………一七

二五 大正十五年一月 送別寫眞……………一八

二六 大正十五年八月 三高一高聯合演説會記念寫眞……………一九

二七 大正十五年八月 三高一高聯合演説會の狀況……………一九

二八 昭和二年一月 送別寫眞……………二〇

二九 昭和三年一月 送別寫眞……………二二

三〇 昭和四年三月 送別寫眞……………二三

三一 昭和五年一月 三高京都府立醫大豫科聯合演説會記念寫眞……………三三

三二 昭和五年一月 送別寫眞……………三三

三三 昭和五年六月 三高和高商聯合演説會記念寫眞……………三四

三四 昭和六年一月 送別寫眞……………三四

三五 昭和六年十一月 部史編纂記念會 (一) ビクニツク參加の人たち……………三五

三六 昭和六年十一月 部史編纂記念會 (二) 晚餐會記念寫眞……………三五

三七 昭和七年二月 送別寫眞……………三六

三八 昭和七年十一月 麻生久先輩歡迎座談會後麻生久先輩と共に撮れる寫眞……………三七

三九 昭和七年十一月 第一回三高關西學院聯合演説會記念寫眞……………三七

四〇 昭和七年十二月 東北北海道凶作地窮民救濟會 (一) 本部幹部連……………三六

四一 昭和七年十二月 東北北海道凶作地窮民救濟會 (二) 義金勘定の狀況……………三六

四二 昭和七年十二月 東北北海道凶作地窮民救濟會 (三) 凶作地よりの禮狀……………三六

四三 昭和八年九月 第一回三高大阪外語聯合演説會記念寫眞……………三九

四四 昭和八年六月 日出新聞社見學記念寫眞……………三九

四五 昭和九年九月 風害による部室の倒壊の寫眞……………三〇

四六 昭和十年一月 送別寫眞……………三〇

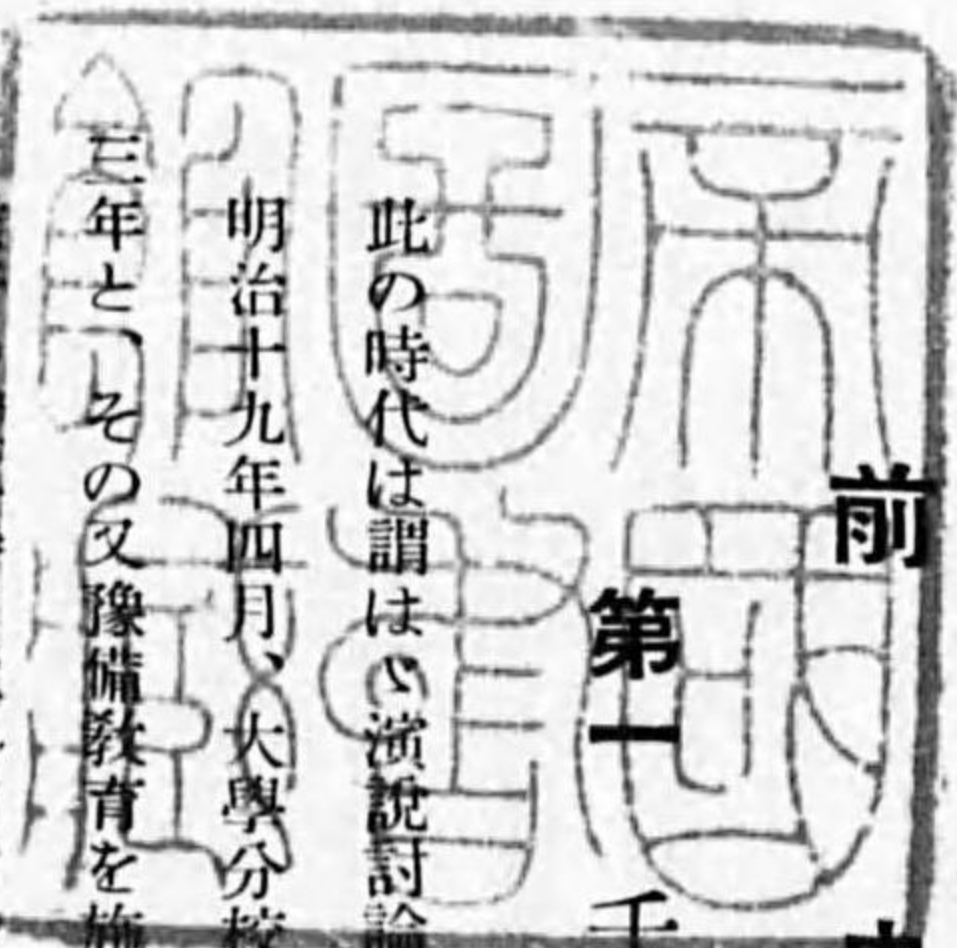
四七 昭和八年、昭和九年刊行辯論部々誌小影……………三一

第三高等學校辯論部部史

前史

嶽水會演說討論部設立以前

第一 壬辰會以前 (明治二十五年以前)



此の時代は謂はゞ演說討論部の濫觴時代である。

明治十九年四月、大學分校は『中學校令』によつて第三高等中學校となつた。そして大學教育の豫備門たる本科三年と『その又豫備教育を施す豫科四年とが設けられた。

維新の變革時に生れて、發展途上の日本を背負つて立つべく運命づけられた當時青年等の野望は熱烈燃ゆるが如くであつた。或は法律を以て、或は『舍密』を以て身を立てんとするもの笈を負ひ故郷を後に遊學するもの茲『第三』の庭にも數百を以て算せられた。

時恰も憲政への將來が約せられて一般國民の政治への關心の昂まると共に雄辯こそは出世の緒口であり、討論に一日の長あることは人に擢んでる所以とも考へられた。當時『第三』の生徒等が或は修養に、或は體育に有志相

談らつて立身出世の道にいそしむ時、其一半を演説討論の習練に費した事は想像に難くない所である。が唯惜むらくは文献の傳はらずして、その實相を詳しく知り得ない事は極めて遺憾ではあるが、僅かに我等の先輩の尙ほ現社會に活動せられる方々によりて當時の事共の幾分でも覗ひ得るといふ事は、尙且つ極めて幸福とせねばならない。

即ち、それに従へば大阪時代既に後年演説討論部の設立さるべき萌芽の存した事が認められるのである。或は校風の振作を目標とし、或は修養練磨の機關として有志を集め、級友を語らつて生徒自身の俱樂部があちこちに組織せられたのである、濟々會といひ、三丁會といふも皆そうしたものであつたやうである。それらの詳しい事は前述の如く之を明にする事は難いのであるが、濟々會は主として演説の練磨を目的として組織せられたる有志の會合であり、三丁會は級を基準とするものであつて、いづれも大阪城畔の森に、又は附近小學校の講堂に會合したが、其多數會員の中にも岡部正、落合謙太郎、平井深造、阿部守太郎、有吉忠一、笹川潔、添田敬一郎、吉田豊彦、佐野啓次郎、品川才次郎、高橋啓太郎等の諸氏演説討論の花を咲かしたと云ふ。當時は既に歐化主義の反動時代であつて、一般に國粹保存忠君愛國の風潮旺にして彼の日本新聞（後日本及び日本人と改題三宅雄二郎氏主筆）など尤も校友の好みて購讀する所、時に『國民の友』など多少進歩主義的のものも讀まれたといふが尙ほ大勢とは係りなきもの、如く或は體操教師の英語號令に對する不満が演説の對象となつたこともあるといふ、かくして此の傾向は京都移轉（明治廿二年八月）と共に尙ほ旺んであつたやうである。

扱、明治廿二年九月移轉開校と共に法學部が設置された。此の事は法學部の學科對象が演説討論と深い關係をもつだけに、部史上注目さるべき事實に屬する。今はその詳細を省いて直ちに壬辰會の設立について觀察を進めやう。

第二 壬辰會時代（明治二十五年より明治二十七年に至る）

壬辰會の組織と演説討論部の創立 明治廿二年九月京都移轉の成つて後は校制未だ整はず、校友又自らの修養を圖る餘裕を見出し得ずして獨り歲月は流れたが、やがて勃々たる向上的氣運は從來諸會の復興を促し、一方第一高等中學校校友會の發展に刺戟せられて茲に第三高等中學校全校友を打つて一丸とする壬辰會の組織は成り、明治廿五年二月十一日の佳晨を以て發會せられた、之實に今日の第三高等學校嶽水會の前身である。

今折田會長のなせる壬辰會發會式演説を見るに「抑々當會設立の趣旨は課業の餘暇を以て同學の生徒及職員更に一致團結し、尙ほ一層親睦して文武諸般の技藝を攻究練磨し、我校の氣風を養成するにあり……我々の氣風とは如何なる氣風なりや……。予は斷言す我校の氣風とは他にあらず畏くも本日捧讀したる勅諭中に所謂一旦緩急あらば義勇公に奉ずと云ふの氣風即忠君愛國の氣風是なり」と云つてある。茲に演説討論部は從來諸會に於ける演説同好の士をあつめ、壬辰會の一部として相互の智識を交換し且つ辯舌を練習するを以て目的とし、（演説討論部規約第一條）兼ねて『第三』の校風振作の一斑を受持つ事となつた。之實に現在する我が嶽水會辯論部

の發端である。

演説討論部規約 部の創立と共に演説討論部規約なるものが制定せられた。今煩を厭はずその全文を記すに

○演説討論部規約

- 第一條 本部ハ相互ノ知識ヲ交換シ且ツ辯舌ヲ練習スルヲ以テ目的トス
- 第二條 本部ハ演説討論部ト稱ス
- 第三條 本部々員タラント欲スル者ハ其旨理事ニ申出ツヘシ
- 第四條 本部ハ毎月一回本校ニ於テ之ヲ開ク
但シ時宜ニ依リ變更スル事アルヘシ
- 第五條 本部經費ハ時々必要ニ應シテ部員ヨリ之ヲ徵集ス
但シ多クトモ一ヶ月壹錢ヲ出ツル事ナシ
- 第六條 本部ニ理事二名ヲ置ク
- 第七條 理事ハ本部一般ノ事務ヲ處理シ壬辰會ニ對シ本部ヲ代表スルモノトス
- 第八條 理事ハ討論ノ際其一名議長ト成リ議場ヲ整理ス
- 第九條 理事ハ出席部員投票ノ過半数ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十條 理事ノ任期ハ一學年トシ毎年六月之ヲ改選ス

- 第十一條 本部員ハ理事ノ承諾ヲ得テ隨意ニ演述討論スル事ヲ得
- 第十二條 本部員演述セント欲スル時ハ開會前五日迄ニ其ノ旨演題ト共ニ理事ニ告知ス可シ理事ハ之ヲ學校長ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ

第十三條 理事ハ演説討論題並ヒニ其姓名ヲ開會三日前ニ之ヲ本校生徒控所ニ公告スヘシ

第十四條 討論題ハ一回前ニ於テ部員ノ多数ニヨリ之ヲ撰定ス

第十五條 正反論者ハ部員ノ申出ニヨリ議長之ヲ指名ス

第十六條 本部規約ヲ變更スルニハ部員十名以上ノ賛成ヲ得テ出席部員過半数ノ承諾ヲ經ルヲ要ス

副 則

第十七條 本部ハ時々名士大家ニ演説ヲ乞フ事アルヘシ

以 上

更に壬辰會規則中より本部に關係ある條を抜くに

第五條 部會 本會ヲ左ノ部會ニ分子會員ハ適意ニ之レニ加入スルヲ得

但シ各部特殊ノ規約ニ從フ可シ

演説討論部、雜誌部、擊劍柔道部、陸上運動部、ベースボール部、水上運動部

第七條 會費消費ノ方法 雜誌部及ヒ陸上運動部ノ費用ハ會費ヨリ之レヲ支辨シ、其ノ他各部ノ費用ハ會費ヨ

リ之レヲ補助スルモノトス

(但書略)

第八條 役員

(前略)

理事 若干名各部ニ之ヲ置ク

(後略)

第九條 職務

(前略)

理事ハ各部ノ事務ヲ分掌ス

(後略)

以上

今此の規約を前提として其の後の變動を辿り見るに、どうしたことか創立の翌月三月十三日の相談會に於いて早くも本部規約改正及び本部細則規定の事が議せられ、その案文起草委員として朝山益雄、鈴木兼太郎、笹川潔の三氏が選任せられてゐる。又此の相談會に於ては、一、本部會費は當分毎月一錢づゝを徵集する事、一、演說會及討論會を毎月各一回づゝ開く事、が決議せられてゐる。此の前者については、當時は壬辰會の會費が一月十

錢、十ヶ月で年一圓であつた。扱て、規約改正の事は、その案文が五月九日の總會に於て議せられ、九月年度替りに到つて發表せられてゐるが此の改正は實質的には毎年九月に總會を開くことが定められた他、何ら取上ぐべきことを見出されない。

所が十月三十一日壬辰會委員會は『本會規則第七條陸上運動部の下に演說討論部の五字を加ふる』ことを可決し翌年二月には、部規約の改正を以て、茲に演說討論部は壬辰會々員の全體より組織せられる事となり、其の他、副理事の設置及び細則の制定を見たが、之については別に記す必要を認めない。以下各年度の實績について見てゆかう。

明治二十五年度 二十五年二月十一日—八月

理事 薩 埴 正 邦

岡 部 正

○演說討論部 壬辰會の一部として創立さる

委員選舉 朝山益雄、鈴木兼太郎、笹川潔の三氏

明治廿五年二月十一日

當選

○演說討論部規約成る

同

○演說會 三月十八日午後零時半 於化學教室

○相談會

廿五年三月十三日

習 慣 論 部長 薩 埴 正 邦

折田會長演說

人物の評論 江村喜一

青年の活氣	木下梅藏	本會に對しての注意	朝山益雄
是乎非乎	堤官兵衛	所感を述ぶ	濱口雄幸
社會變遷論附愛國心の偏重	岡部正	代議政體に就きて	下岡忠治
自由を論ず	林増之丞	人種綜合的觀念	笹川潔
鮮血淋漓	立入春太郎	A Bathmelism on Nature	渡邊熊藏
政府と學術	姉崎正治	○田村初太郎氏演說	五月九日

午後四時散會

演題「米國の青年」

○演說會 四月卅日午後零時半 於化學教室

○總會 五月九日

德義論 有吉忠一

規約改正案を議す

初代理事を承る人、薩埵正邦教授は、日本法學教育界の錚々、その議論の暢達明快、誠に此部好個の指導者。之に配する岡部正氏は當時法科(法學部に非ず)三年、大阪時代以來『第三』切つての達辯の士。その第一回演說會は三月十八日午後零時三十分より化學教室に開かれた。爾後、月各一回の定めなる演說會及び討論會の開催は、四月卅日演說會、五月九日田村初太郎氏の演說及び總會のみにて未だ抱負を實現するの盛況を見るに及ばずして此の年度は閑し去つた。蓋し、當時尙ほ本部は組織制度的にも安定を見ず、頻りに規約改正に努めて、その守成の基礎を堅めんとしてゐたやうである。

唯壇上の去來を説けば、三月十三日我部相談會に於ける折田會長の演說は、専ら演說討論の實用的なるを論じて徒らに空理空論阿諛呈媚の態に流れざらん事を、此部初會の機に申し述べんとて、部員に訓された。一般に、辯技の習練を旨とし各人各様の題を把へて一の傾向を示さざるは、當時のみならず、後明治末期に到るまでの特色とせらるべきであつて、爲にその對象も校内の事に限らず、社會百般の事件を論ずるあり、又修養を語るあり、學術に及ぶあり、今その論が如何なる内容を有せしかにについては、不幸尋ねるに由ないのであるが、唯演題によつて見るに岡部正氏『愛國心の偏重』姉崎正治氏『政府と學術』共に五月十八日演說會は當時國粹主義乃至國家主義その大勢をなし、政府又國家主義を以て、教育學問の分野をも統一せんとした社會情勢に關聯をもつものやうである。

明治廿六年度 二十五年九月—二十六年八月

理事 有吉忠一

阿部守太郎

○規約改正成る

吾人の一大急務 篠田要次郎

○例會 十月九日

如意山の一大文字 立入春太郎

天地之大道

融道玄

○討論會 十月廿四日午後二時 於第廿九教室

青年團

堀口註爾

○ウエスト嬢の演說 十一月十八日 於雨天體操場

演題 「禁酒・禁煙」(英語)

○三宅雄二郎氏の講演 十二月二日

演題 『迷惑』

○例 會 三月六日 於第廿九教室

Time is money

横田米吉

布哇革命に就て國際法上の原則を論ず

岩谷教授

日本民族

濱田恒之助

○宮川經輝氏演説

○肝付兼行氏演説 六月十三日

○海老名彈正氏演説

任)

○大討論會 四月廿二日
『土地は私有とすべきや公有とすべきや』
『道徳は宗教に依るを要するや』

劈頭規約改正の事あり、以て部の體裁漸く成るに及んで第一回例會は十月九日新任理事によつて開かれた。出演者四名。當時壬辰會雜誌の雜報欄に報ずる所を見るに『最後に控えし立入君は兼ねて御上手と承り居りしかば固唾を飲みて拜聴しぬ、文に書かば面白そうなる形容長して、聲の調子如何にも演説遣ひらしく氣取られたれど論旨聞くに堪ゆるものなく更に聽衆の感をひかざりしは尤至極にて、是れを篠田君の衷心より吐き出せしに比しては余は寧ろ後者を採らむとす、是も大舞臺ならぬ故なりとの辯護もあるべけれど兎に角、それほどなきものは富士の山のみかは、嘯くものあり曰く來りて見れば名ほどにもなき大文字』とは筆者の酷評もさりながら當年の一風潮をうかがはしむるものであり、又事實此の年に見るべきは、例會における部員諸氏の演説にあらす例會

の如きは開催されること此の年度を通じて僅に二回、共に演者少く、之又壬辰會雜誌上雜報子をして『演説討論部々員諸君亦蟄伏するのときにあらず』と『神樂丘上に寒風膚を劈く間の演説練習』をデモステネス・キケロの故事を以て懲慙せられたる記事の見えるなど、壇上の寂寥の反面を語るものであらう。

が、注目すべきは演説部の外廓をなすものとも云ふべき各科各級中心の修養、校風振作團體が演説討論に尤も活況を呈した事であつて、その雄なるものは實に法學部諸氏の組織した法學會であつて、夙に討論場裡法理を論じて、専門的な見地よりの精進は聞くべきの論争多く又法一會、台麗俱樂部など、活潑なる活動をなし、文科生徒諸氏の組織する以文會は得意の文學論に、演壇を賑はした事である。之等諸會は個人的に演説討論部と關係したものであらうが、兩者中心人物を同じくし、それら會員にあらざる演説討論部員の演説を招き聽するなど兩者の緊密なる關係を語るものであらう。

扱て部自體については所謂名士の招待講演と、討論會の旺に行はれた事は蓋し注目に値する所である。即ち『本部は名士大家ニ演説ヲ乞フ事アル可シ』といふ部規約の一條は、十一月十八日『禁酒禁煙』と題するウエスト嬢の英語演説を以て、その具體化を見るに到り、次いで十二月二日當世の奇丈夫として知られたる文學士三宅雄二郎氏を聘するあり、又宮川經輝、海老名彈正等基督教界の名士夫々來演するありて、當時基督教と、國家主義教育との衝突漸く一の調和を見出さんとせし世態の一流を示すもの、此處神陵の演壇にも窺ひ得るのである。知識の交換には討論を以て最上となす。討論の事は法學會諸氏が、その専門的主題の下に旺に行ふ所であつた

が、我が演説討論部においても漸く年度の更まると共に、此の事の議せられるあり、十月九日例會後を以て、その題を選定し、同月廿四日『辯論は文章に勝る』との議題の下に、その第一回が催された。先づ正論者高橋氏の意見の陳述あり、次いで反論者水野氏の前辯士に對する攻撃、更に二派論者の論難攻撃の後、最後の決をとるに及びて過半数を以て、反論者の勝利に歸したといふ。當日出席の五十餘名、皆少くとも演説討論に關心ある者、而も尙ほ辯の力は文章の下位にありとせられたる、蓋し深く考察に値すべき事である。嗚呼！されど演説討論部は侮蔑迫害の當時を経潜りて、後年の興隆發展を致したのである、興起發展を前提とする侮蔑迫害時代先人の熱意は夫丈けに旺であつた。吾人は、その翌廿六年四月廿二日實に空前絶後の大討論會の開かれたるに、その盛況を眺め得るのである。『雨天體操場裡午後一時、號鐘響き渡る時會員既に場に滿ち、後れて至るもの踵を接す。時に有吉理事先づ壇に上りて、辯士一回の發言時限は卅分と定むる由を述べ、先づ土地問題即ち土地は公有とすべきや將た私有とすべきやとの論題より始むる旨宣言し終つて議長席に就きて、公有主論者篠田要二郎氏に登壇を命ず、喝采沸くが如き中を徐ろに歩みて壇に顯れし篠田氏は……』と、之れ雜誌部水野編輯委員の記述する所であるが、篠田氏は先づ問題の説明をなし「唯公有を以て共有と混する勿れの一語を以て足れりとなす」と結び公有主論者巖谷孫藏教授は土地モノボリの弊害を論じ、萬國勞働會議の起源にまで言及して「予は此の無學なる者をして過に陥らしめず穩和なる方法によりて此の社會の大患を除かんために土地私有の不可を論じ、公有制度の正理なるを論じて已まざる者なり」と、之に對して私有主論者阿部守太郎氏、之又問題の解釋論より説き起し

て、一々公有論者の所論を駁し、時に「ドグマ」「ドグマ」の彌次を浴び乍らも、或は「社會はしか單純にあらず」と、或は「土地はしか重要にあらず」と論を進めて「財産普及の方法を論じて貧民未來の希望を示さん」とて、その社會政策を論議するに及んで定時既に過ぎ去り遂に議長の命を以て降壇させらる。『此の時議長と呼ぶ者あり、觀れば法科二年濱田恒之助氏なり、蓋し主論者悉く辯じ終りて後始めて他に移るは討論會の通則なりき、而して議長は意外にも今やその發言を許しぬ。四番席員佐野啓次郎氏一言之れを議長に責め重岡氏(教授)亦之に贊す、氏と反對の主論者たる巖谷氏(教授)はノ、ノと叫ぶ、滿場騒然たり。議長は大喝「已に許したり今更仕方なし」と宣言して濱田氏を登壇せしむ。議長剛腹の聲所々に聞ゆ……』時しも場中愈々色めき來りて、長たらしき批評所々に起る、議長嫻然として制して曰く「批評は可成短かく……」と滿場哄然たり。濱田氏はその靜まるを待て説き出して曰く……』と之れ大討論會の景況の一斑にして、此の問題は結局、『議長、是に於て討論終結を宣告し、公有私有兩論の可否を起立に問ひ、特に起立の數に加はると否とは各員の隨意とす、私有を可とする者六十七人、公有を可とする者三十九人、報告の聲は喝采に反響して遂に私有論者の勝に歸す、時正に午下三點を過ぐる卅分、議長は第二の討論題に移る可きや否やを衆議に問ふ、皆移る可しと云ふ、乃ち道德問題(道德は宗教に依るに非ずんば完全に行ふ能はざる乎)の論に移るに決し、有吉氏は議長席を下りて巖谷理事之に代り……』と、結局宗教に依るを要すと云ふ者三十八、宗教に依るを要せずといふ者二十一、『議長巖谷理事が閉會を告ぐるの語は更に控所をも壞さん計りの大喝采に依りて受取られぬ。須臾の間に衆は潮の引くが如くに去り五分の後に

は滿堂寂として聲なく、數分の前曉々たる音聲の響き渡りて、正反論者が互に鎬を削りたる面影は、僅かに累々たる空机の存するに依りて知るのみ」と。

六月十三日、學校當局の主催にかゝる海軍大佐肝付兼行氏の講演あり、海軍思想の普及を叫ばれ、校友に多少の反響を及ぼせし如くである。

明治二十七年 度 二十六年九月—二十七年八月

理事 巖谷孫藏

笹川潔

副理事 篠田要次郎

林増之丞

高橋慶太郎

獨立進取 融道玄

スパルタの教育 高橋慶太郎

逸題 佐野啓次郎

” ” 大谷吟右衛門

” ” 小田徳五郎

○例 會 十月十八日

山本某

谷井某

篠田要次郎

○例 會 十一月廿一日

○演説討論部大會 十二月十一日午後二時 大講堂

我 末久喜十郎

人種の軋轢 吉武源五郎

國體と政體 小田徳五郎

道義學に就て 教授 服部宇之吉

自由論 林増之丞

何をか進歩といふ 篠田要次郎

宇宙の衰壞 教授 村岡範爲馳

討論

『鐵道は官業にすべきや民業にすべきや』

○例 會 二月八日 於雨天體操場

帝王無責任論 岡本虎太郎

制度組織の態容既に成り、又部長に『雄辯滔々嶄新なる法理』を以て鳴る巖谷教授を戴きて、此の年漸く我が演説部は平坦の軌道に乗り得たが如くである。だが外的態容の完成は、既に内に沈滞の氣を孕めるにあらずや。第一回例會は十月十八日を以て開かれたが、辯士聴衆ともに少く、壬辰會雜誌編輯子をして「吾人轉た秋暮の感あ

名譽論 堀堪次郎

ラブレール著戰爭を根絶する法を批評す

笹川潔

輿論 大谷吟右衛門

國家の基礎 飛石久次郎

校風の源 水野幸吉

○谷干城氏演説 四月十六日

『養氣の説』

○勝島仙之助氏演説

『農學の必要を述べて農科大學に及ぶ』

○志賀泰山氏演説

りき、蓋し從來壬辰會諸部中尤も振はざるは同部に於て、吾人の尤も怪訝に堪へざる所なり、淺近凡庸の議論聞くに足らざるがためか、平淡無味何の興味もなきがためか、空理虚談何の益する所なきがためか、抑も亦他に理由ありてか、吾人は得て知らずと雖も、我校生徒が此の尤も必要にしてしかも甚だ興味ある技に冷淡なるを怪しまずんばならず、されど同部理事たる者豈また責なしとせんや、殊に今例會に於て其隻影だも認むる能はざりしは吾人の尤も解する態はざる所なり」と嘆ぜしむる、其の因つて來る所は一ならずとも又當時の一風潮を傳へるものであらう。

だが、當時一般の部勢については姑く措き、今は各會、各演説のあとを見てゆく事が蓋し順序でもあらう。

第二回例會、融道玄氏は『重厚の辯を以て諄々説き出だし當時社會の事物總て獨立進取の氣象に乏しきを慨す、所論敢て奇とするに足らずと雖も其辯の虚ならざる頗る多とするに足るものあり』。佐野啓次郎氏『議論堂々章あり節あり一統亂れず整々序あり、音吐稍清朗を缺くと雖も而も明快、高遠の理を説きて猶ほ解し易からしむ辯、演説的ならずして而も力あり、論を行るの間聴衆をして常に前段述ぶる所を忘れざらしむ、蓋し當日の白眉とも稱すべきか』、其の他高橋慶太郎、大谷吟右衛門、小田徳五郎氏等の登壇を見る。

『壬辰會は最近一ヶ月間に於て空前の三事業をなせり……、而して最後のものは曰く演説討論部大會、時は本月十一日……、號鐘午下二點を報じて會場に入れば傍聽席は既に充滿せり五百有餘の會員及び尋中（尋常中學校）商業・醫學・同志社其他各學校の生徒三百餘名、聴衆は無慮九百名に上れり……』と、即ち演説討論部大會

は十二月十一日を期して開かれたのであるが、その注目すべきは、末久・吉武・小田・篠田の諸氏皆物質文明排除の國粹論を以てその結論とせるは、翌廿七年二月の例會においても同種傾向の多きを見しと共に、當時思潮の主流を語るものである。當夜の討論鐵道は官業にすべきや果又民業にすべきやは、實に三時間に亙りて、甲論乙駁、登壇する者實に十有餘名、且つ壇上壇下相論じ、亂闘騒ぎ宛らの情景をまで演出して、日頃の沈滞を此の一時に返さんするの勢であつたが、結局三十七對三十二を以て官業論者の勝利と歸した、時に九時三十五分、『顧みて會堂を眺むれば爛々たる燈獨り會場を照らし、霜凍る天には暖爐の煙徒らに鳶色の龍を畫けり』といふ。

二月八日の例會は、記録において壬辰會時代最後の例會であるが、傍聽席又寂寥にして、雜報子の記述、不振を啣つこと茲に再三再四に到る。而しながら壇上の去來徒に寂寥ならず岡本氏は眞面目なる法學者の所論と云ふべく、堀氏「人世の最上目的は名譽を得るにあり」と斷じてその論旨は兎も角肺肝について出る辯は達辯ならずとも他を壓するの風あり。笹川潔氏がラブレの著作を批評して、東洋人種は大いに戦はざるべからずと疾呼したるは、時偶ま日清の風雲既に急なるに際して、唯一の戦争物と云ふべく、大谷氏は満身是膽の風采を裝て突飛の辯をなす所、自ら喝采を呼び、飛名久次郎氏は禮を以て國家の基礎とし、近來禮儀の紊れたるを嘆かる。最後の水野氏『校風の源』は、當時漸く行はれし『第三』校風論の壇上にあらはれしもの、協同和力以て校風の興るべきを論ぜらる。

其の後、『第三』の演壇を飾るもの、谷干城・勝島仙之助・志賀泰山の三氏夫々來演せられたるを傳ふるのみ。

壬辰會の解散 明治十九年四月中學校令成つてより、茲に八年の歲月を閲し、森有禮文部大臣の教育刷新は我が第三高等中學校においても着實なる歩みを続けしめて來たが、明治廿六年井上毅氏の文部大臣就任によつて又學制改革を見るに到り、廿七年六月を以て高等學校令が發布せられた。その結果從來の高等中學校は高等學校と改稱され大學豫科と専門の學科を授ける専門學部としてその存在を續ける事になつたのであるが、我が第三高等學校には法學部・醫學部・工學部の設置を見て大學豫科の設けなきものとなりたる結果、從來の本科・豫科の生徒は僅かに豫科の一部を除きてすべて他高等學校へ轉校せしめられる事となり、茲に壬辰會はその會員の大半を失ひて名實ともに立ち行かざる事となり、從而我が演說討論部も少時その姿を沒する事となつたのである。

過去八年を振かへつて次期への展望を試みるに、創部以來一貫して流れる潮流は飽まで國家主義的教育の結果よりせられしものであり、演說討論はたゞ實用を目標としてなされ來つたと見らるべく、當時議會の亂闘状態の反映又蔽ふに由なく而もそれだけに一般よりは屑々たる口舌の徒視され、所謂侮蔑時代に當るものをなしてゐたのである。だが此時代は我が學校に於て、たとへ一部としての存在を缺くとも、演說討論そのものを全然没却することは到底出來難いまでになつてゐたのであり、茲にこそ吾が演說討論部——辯論部は確固たる根柢を下ろしてゐたのである。成程學校は解散せられ、校友散じ人更まるとも吾演說討論部の礎石は既に据えられてゐたのである。やがては興隆發展すべきその外廓をなすの人を待つてゐたのである。

第三 嶽水會演說討論部設立以前

(明治二十七年より明治三十二年に至る)

明治廿七年九月、第三高等學校と改稱されると間もなく、十月には舊來の壬辰會に代る結合として、嶽水會が壬辰會と略々同一の組織で同一の目的の下に成立した。だがそれは、唯々僅かに運動部を維持したのみであつて、壬辰會の盛時と比べては極めて寥々たるものであつたやうである。その間の事情を述べて、折田校長は他日嶽水會に演說討論部・雜誌部の成立した時の祝辭に於いて、次の如く述べてゐられる、即ち「……明治廿七年校制一變ノ結果、法工専門學部生ノ他多數ノ生徒ハ散ジテ四方ニ轉學シ雜誌ハ廢刊ニ歸シ、社名モ亦嶽水會ト改マリ、爾來運動部ハ依然存続シタルモ、雜誌ノ發行ハ屢ニ計畫セラレテ屢蹉跎シ其ノ間法科ハ特ニ法學會、工科ハ特ニ工學會ト名ヅクル社中ニ於テ、各自専門學科ノ講究ニ資スル演說討論ヲ行フニ止マリタリ……」と。之によつても知られる通り、明治卅二年二月嶽水會の擴張を見るまで、演說討論のことは夫々法學會・工學會等における専門學科の講究に資するにとどまつたのである。特に法學會においては高等中學校の時代より存続して、巖谷孫藏教授を會長に戴きその熱心なる誘掖指導と相俟つて政治法律に對して、きはめて熾烈なる關心を抱き、或は法學會雜誌を發行して、(明治廿八年十月發刊以來毎學期一回)その研究に資すると共に、又或は擬國會などを開催して、實際辯技の習練に廻めた。事は既に我嶽水會演說討論部創立の後に屬するが、明治卅二年三月四日、

法學會有志より成る政治俱樂部が大講堂に於て擬國會を開催した事が、始めて我々の記録に見えてゐる。今その模様を見るに當日の議案は鐵道國有法案といふのであつて之は第十三議會(明治卅二年)において鐵道國有に關する建議案が可決せられた當時の時事問題に關するものであり、その極めて具體的現實的なる時事をとらへて、政府黨・反對黨必死と議論を上下し辯難反駁殺氣議場に充滿し、一時は喧囂を極め議事殆んど中止す、遂に結果は反對黨の勝利に歸す。即時議會は解散を命ぜられ散會す」と記してある如く、此の日林好郎氏議長を勤め、又總理大臣永田秀次郎氏は既に老成の大臣振りをして、聽衆の感嘆を買つたといふ。

當期に於て法學會・工學會の他に演說討論に關して關心をもつてゐたものに、佛教青年會と基督教青年會との二宗教團體がある。共に高等中學校時代より結合せられた團體であつて、信者乃至宗教に關心をもつ者等を以て組織せられ、時に教界知名の士の講話を聞き又自ら究理體驗の宗教を語りあつた。就中基督教青年會は『宏大なる會館と若干の基本金をも有し、加之莫大の圖書は公衆をして隨意供覽せしめ、毎週祈禱會と聖書講義を開き、時々名士を聘して講話を聞く等、頗る活氣あり……』といふことであり、佛教青年會も亦た各宗高僧の講筵を開きて洛都の大雲に聳ゆる堂塔の間に一風景を點綴せられたといふことである。

此の間、明治三十年大學豫科の開設と共に、漸次現校舎に移り、漸く會員生徒の増加すると共に、専門『學部』とは自ら異なる活氣の醸成せられて、從來の諸會又頗る活況を呈し、茲に嶽水會の擴張即ち演說討論雜誌の二部設立の氣運を見るに到つた。即ち次に項を改めて嶽水會、演說討論部の設立より記述しよう。

第一期 (明治三十二年より明治四十三年に至る)

序

嶽水會演說討論部の設立 嶽水會演說討論部は、明治卅二年二月十一日を以て開設せられた。そのときの二年の總代逸見嘉一郎氏の祝辭に云ふ、「……往年壬辰會の此校に設立せらるゝや、文に武に隆盛其巔に達し、(中略)、然るに不幸にして一朝天折し、爾來神樂岡麓寂又漠、嶽水會僅に其後を襲ふと雖も、議論を上下するの演說討論部なく、智識を暢發し文章を練磨するの雜誌部なく、唯運動部其痕跡を留むと雖も、微々として振はず。(中略)。嗚呼堂々たる高等學校の嶽水會にして、而も爾かく慘憺たる光景を呈せり、海内の諸校に對し豈夫れ愧ぢざらんや。是に於て同窓三百名、深く之を慨し、乃ち運動部一段の隆盛を圖ると共に、演說雜誌の二部を新置し、文武兩道協同匡濟し、以て優に嶽水會の隆盛を期せんとし、今茲に紀元之佳節を以て演說討論部の發會式をあげ、將に口角泡を飛ばし、討論場裡雷吠ゆるの時近きに來らんとし……」と。即ち演說討論部の開設は、壬辰會のそれを復活し、嶽水會をして文武兩道に發展せしめるためであつた事、その開設の尤も大きな一因子であつたと云はねばならぬ。而もかゝる嶽水會復興發展の氣運は實に大學豫科の開設に負へるものと云ふべきである。蓋し從來の法學部、工學部等は直ちに實社會に接続せられるの課程なるに對して、大學豫科たるや、未だ其の間

に大學を挾んで餘裕を存し、其處に自ら學部とは異なる元氣の醸成せられて、獨り運動競技のみならず言論發表に一般的機關の要望せられるに至りしは當然のことであつた。茲にして生れしもの即ち演説討論部であり、壬辰會演説討論部規約そのまゝの申合を以て、廣く法工學會、佛基兩教青年會など、當時校内諸會の内、演説討論に關心をもてるもの多數の期待と協賛裡に組織せられたのである。かくして嶽水會演説討論部は成り、所謂『第三』の演説討論部は、茲に『三高』演説討論部と復活し、後年現在の『辯論部』と改稱せられたのである。

第一期概観 明治卅二年二月十一日、嶽水會の擴張を見『三高』演説討論部の設立を見しより、明治四十二年に至る十有餘年の歲月を劃して、此處に第一期とする。その第二期(以後大正十年に至る)と異なる所は謂はゞ明治と大正のそれであらうし、或は一般的に第一期活動、第二期活動と云はれる區別の立て方が茲にも正しく見られる程の異りであらう。然り、明治から大正への變遷は之をいかなる觀點より眺むるも兩者の間には相當の距離が認められるであらう如くに、我が演説討論部々史の上に於ても區別さるべきものを持つ。之を此部に流れた一般風潮の上に見るも又之を演説其物に對する考へ方の上に見るも而して又外的には部の事業活動の上に見るもその相異は認められるのである。即ち當期に於ては概して演説なるものを考へるに極めて素樸なりしが如く、未だ演説なるものに大した價值を認めるといふのでなく、寧ろ實利的に唯役に立つもの時に必要なるものといつた程度を出でざりし如くであり、従つて全體としての演説の習練ではなく唯だ技術としての演説により重點を置きその思想内容は之を輕視せられたことが少くない。従つて一般からは唯なる口舌の徒の集りとさへ考へられたことがな

いでもなかつた。次に部の事業活動の上に於いてはどうであつたか。此のことに對しては或ひは非近代的・近代的といふことが第一期・第二期を區別するものであらう。大體に於て第一期の事業活動は形式的であり、又非反省的な所がある。又今一つの見方に於ては少くとも孤立的であり、廣く他校乃至校外とも關係を持つといふことが少かつた。然しながら注目すべきは、校内に於ては他の部及び諸會との關係に於て、前者の方がより協動的乃至同一色彩的ではなかつたかといふことである。扨最後に、此部に流れた一般思潮について考察が加えられねばならない。それは時には或る傾向或る思潮が幾分は認められないことはない。いや確かに此期全體を通じて見ても、無傾向乃至無思潮といつた一つの風潮が見られるであらう。だがそれは飽まで風潮であつて思潮と云はるべきでない。少くとも此期に於ては、後述するが如き或は憲政への關心又た或は社會への關心が凝つて一の思潮をなした時の如き明瞭なものを見出さないのである。蓋し既に演説の思想内容の、それほど重視されなかつた當時としては、又止むを得ない所であらう。詳しくは又各其の時代々々に於て述べることにする。

此の第一期は更に三つに分ちて眺められる。即ち其の第一は演説討論部の設立より三十五年度までの四年間(前期)、第二は爾後三十九年度に至る四年間(中期)、而して第三は其の後四十三年度に至る四年間(後期)である。最初の四年間は謂はば中興の餘勢を驅つて發展を遂げた時であり、中の四年は或は最初の隆運の反動とも云ふべく、餘り振はなかつた時である。次いで最後の四年は次の第二期初頭の隆盛を致す準備の時であり、又一部分、既に第二期への形態を整ふるに到つた過渡の時である。以下各期について細説する。

第一前期 (明治三十二年より明治三十五年に至る)

概観 嶽水會の擴張(演説討論と雑誌との二部の設立)は、既に實質的に存在せしものを形式的に綜合統一して、以て嶽水會の文武兩道に於ける圓滿なる發達を期したるより出でたること疑を容れない。されば演説討論部の茲に開設せられたるも、全くの新機構にあらず、既に壬辰會の復活を意味するものであることは勿論、尙、當時に於いて演説討論部を構成した人的要素について見るも、或は法學會や政治俱樂部の錚々であり又或は佛基兩教青年會の中堅であるなど、既に凡そ演説討論のことに大なる關心をもてる者であつて、謂はばかゝる潜在的實在を表面上にまで形式的に整へ上げたるものに過ぎざる事は以下部史の發展を見る上に極めて有意義なるものとして記憶に留め置かるべきである。即ち當時我が演説討論部を構成した人々を眺むれば大體次の三種に分れるのである。一は政治的關心を持てるものであり、一は宗教的關心を持てるものであり、今一つは其の他と總稱せられるものであつて、此の中には或は文學人あり又時に理科人あり運動人あり凡そ雑多な種類の人があつたのである。

扱て、此の前期に於ては之等三種の人が相協力して嶽水會擴張の精神を堅持して、部の發展を致せしことに其の一大特色が見出される。故に演説の對象となる所、政治を談じ宗教を語り又運動を慫慂し校風を論じ修養を叫ぶなど、歴史あり文學あり哲學あり、凡そ一切の事象に互つたのである。而してそこに何等纏まれる傾向纏まれる思潮を見出さざりし所に當時の學生生活の自由さがあり、而して又そこに當時漸く複雑多岐となりし我國思潮の反映が認められるのである。唯、當時は、日清戦後、露國の東方侵略を控えて支那問題の喧しかりし時であり、又哲學方面に於いては實際理想主義に基づく人生觀的傾向の現はれし時であつて、實際的な倫理的乃至宗教的問題が討議せられた時であり、これら問題に關するものは、かなり、演説會に於ても見られた。又部の事業とする所は、部會を開きて演説討論を行ひ時に世の名士を招聘して、その高風に接するなど、悉く壬辰會當時の行事そのまゝにして而も従來諸會(法學會・佛基兩教青年會)の行ふ所であり、演説討論部申合せは之等事業の行ふべきを定め、實際も亦そのまゝに行はれゆきたるか或は定型的ともなつてやがて一般の關心を失ひ、遂に中期に於ける沈滞不振を見るに至つた一因ともなつたのである。

此の期に於ける演説に對する考へ方を見るに演説會の席上に於て、三十二年度には演説の要用が叫ばれ、三十三年度に至つては演説について反省が加えられて内容不備なる演説を排斥することが可なりに叫ばれてゐる。だが當時一般の風潮としては矢張り技巧に重點がおかれて居た如くであり、ほんの一時の例外を除いては内容一方の演説は概して聴衆にうけず時に彌次り倒されもしたといふ程であり、僅かに三十四年度に於て眞摯なる内容を有する演説の漸く行はれたるほか、大體に於て殊に其の後に於ては内容空疎なる壯士の演説が徒に跳梁して、茲にも我が演説討論部が一般の關心を失つて所謂『演説屋』の手に墮したとも見るべき時勢に赴く一因が認められるのである。

○第一回演說討論部會 二月十一日紀元節式後

於大講堂

發會之辭 熊本部長
祝詞 折田校長
Public Speaking ゼーンス
右草稿代讀 朽木十吉
學校衛生に就て 矢部直彦
生存競争と教育 高橋健三
專問以外の趣味 塚本義胤

人類とスピーチ

今日の急務

宗教の必要

閉會午後一時半

○服部宇之吉氏演說會

○嘉納治五郎氏演說會 二月五日午後八時

於生徒控所

演題「講道館柔道の過去現在未來」

○第二回演說討論部會 三月十二日午後六時

部長 熊本謙二郎
理事 山口牧太郎

新田義敏

水口俊馬

稻葉常太郎

元山宏規

高橋聿郎

古屋野橋衛

於大講堂

開會の辭 水口理事
人生と其の事業 山本全
歐人の東方侵略 桑原教授
才と氣 小山誠次
人生意氣に感ず 田邊勝邪
討論「諸種發明は勞働者の福利を來すや否や」

論題説明 水口理事

議 長 稻葉理事

積極論者 逸見嘉一郎

奧野芳藏

消極論者 塚本義胤

古屋野橋衛

閉會の辭

時に午後十時半

第一期

○横井時雄氏演說會 三月廿日

演題「社會の進歩と道德の思想と」

○第三回演說討論部會 四月廿二日(土)午後七時

於大講堂

開會の辭

厭世主義

青年と機會

支那近世史を読む

大日本論

天才

挨拶

閉會之辭

理事 矢部直彦

高橋健三

塚本義胤

高橋聿郎

元山宏規

部長代理 巖谷教授

理事

事

時に午後十一時

○外山文學博士演說會 四月廿六日 於講堂

○第四回演說討論部會 六月三日午後七時 於講堂

開會の辭	熊本部長	時勢	小豆澤英男
支那論	岩本新太郎	支那救済の一方	塚本義胤
偏屈論	古屋野橋衛	閉會の辭	熊本部長
The Characteristic of the 19th Century		時に十時半	

伊藤正彦

此の年度は二月に始つて六月にはもう實際の部の活動は見られ得ないのであるから實質上僅か四ヶ月にすぎない。が其の間壬辰會當時の規模に従つてよく諸般の事業が行はれて、生れ出でたるものの喜びの中に、部の基礎を打固める努力が続けられた。我々は此の年度既に四度の部會一度の名士招待が我々の先輩の手によつてなされたのを見るのである。以下項を別ちて各會合について見るであらう。

演説討論部會

その第一回は明治三十二年二月十一日紀元節の式後講堂に於いて行はれた、校長始め職員學生集るもの無慮二百、午前十時開會、熊本部長發會の辭を述べられ、辯論習練の要用に及ばれて之を論ぜられること極めて詳。次いで『折田會長は起つて「吾等の幼時は實行を尙び言論を卑み寧ろ辯舌は士人の學べきものにあらすとするの教育法なりしも、今や時世の變遷に伴ひ口舌の修養は一日も缺くべからざるに到れり」と説き、往年外國大學にての經驗談を以て演説未熟者は勇を鼓して實行を勉むべしと論じ、終りに恰かも往年の昔此の佳節を以て壬辰會發會

式を舉行し、今日又此日を以て本部の第一會に遇ふも多少の感なしとせず」と。

第二回の部會は三月十二日午後六時より開かれた。桑原教授『歐人の東方侵略』と題して露英佛列強の支那侵略の歴史を述べて慷慨淋漓快辯縱横彼等を論難し、遂に殘忍狂暴取るに足らざるの奴輩なりと斷じ、終に「歐人の長は取て以て我短を補ふべきも余は切に諸君が彼等の精神をも學ぶに至らざらむことを望む、昔昔亟相も和魂漢才といへる語われは移して以て和魂洋才と云はんと欲す」と壇を下られた。當時或は青年の意氣の衰退を慨くもの文に辯に之を散見する。神陵壇上第一回部會に於ける古屋野橋衛氏『宗教の必要』、第二回部會に於ける小山誠次氏『才と氣』、田邊勝邪氏『人生意氣に感ず』、第三回に於ける矢部直彦氏『厭世主義』等、或は精神教育の必要を論じ或は和魂の尊ぶべきを述べられたものである。又既に當時は日清戦勝の結果なる國民的自覺に基ける日本主義の勃興に、その現世主義生々發展主義と相容れぬ厭世主義の斥けられしも又當然の風潮であつた。更に桑原教授の此の講演は支那問題研究の緒口を興へしものとも見らるべく、第三回において『支那近世史を讀む』塚本義胤氏、第四回において『支那論』岩本新太郎氏、『支那救済の一方』塚本義胤氏の名を見る。

第二回の部會において『諸種の發明は勞働者の福利を來すや否や』との題下に討論の行はれし事は特記せらるべきである。蓋し當時は日清戦後漸くに我國にも近代的形態に於ける經濟の發達が見られしときであり、就中紡績會社鐵道會社の勃興はその尤なるものにして、又それと相關聯して漸く社會問題のあらはれしと共に、此の討論題を我が部史上に見ることは社會と學校生徒就中演説部員との或る關聯を語るものと云ひ得やう。毋然れども討

論の事就中少しく専門的なる討論には最早既に興趣の薄らぎたるか、漸くに専門部の生徒募集廢されて學校の大豫備門化して生徒に専門的智識の薄らぎたるによるのであらうが、又一般に第二回演説討論部會において聴衆の減退せるを見るは先人の創めた部を守成する事の容易にあらざりしを思はしむるものである。

四月廿二日、土曜を期して、第三回の部會が夕七時より講堂に開かれた。富田正幹氏『校風論』と題して、大聲叱呼して方今學生の活氣に乏しきを慨し死道徳を排し稜々氣骨あるべしとて、今日の急務は完全なる校風を造るにありと結ぶ。その所論未だ質的に必ずしも校風の中核を衝かざるも、神壇上校風を論ずるの嚆矢となす。高橋聿郎氏『大日本論』と題せるは、世界主義的立場にあつて日清戦後の社會の一般的趨勢たりし國家主義的日本主義に對せしもの如く、軍備擴張の無益を説き増税の失當を論じた。惟ふに當時は日清戦捷の結果よりせる國民的自覺が、國家的活動の上に現はれて國家主義的傾向の極めて顯著なる時流にあつたのである。次に元山宏規氏の演説は、此の道の先進者たるの餘裕を示し、是迄の辯士につき一々其の長短を批評し、後徐るに自らの論旨を進めたといふ。最後に巖谷教授が部長代理として演壇に上り一言の注意を與へて曰く「嶽水會にて演説討論部を設けし所以のものは各自演説の練習をなさんがためにして決して滑稽を學ぶにあらず」と痛論し、更に語を進めて「演者に對して濫りに批評を加ふるは慎まざるべからず、今日の演説を聞くに、多くは批評の爲に演者をして十分に其の思想を吐露せしめざりし述歴々として存す、これまた大に戒むべきことなり」と論ぜられて、それより教授が滯獨中ピスマーク公を訪問せし當時の状況を縷々談話的に演述せられた。此處に掲ぐる巖谷教授の注意

中「批評」と云へるは惟ふに俗に云ふ「彌次」のことにして、以て當時の演説會の狀況の一端を察し得よう。

名士招待講演

創部以來、演説討論部の行事とする所は、既に述べたる演説討論部會を開いて各自演説討論を試みて、積極的に辯技を磨き思想を練ると共に、以下茲に述ぶるが如く知名の士を招待してその聲咳風格に接して、消極的に各自の修練に資するの事がある、此の事は既に壬辰會の昔より行はれて演説討論部規約に明文を以て規定せられること、既に述べし如くであり又嶽水會演説討論部申合せにも記す所である。

元來名士を招待して一場の講演を乞ふことは既に學校當局においても行ふ所にして、その嶽水會演説討論部の主催する所と異なる所は、時によつて差ありとも、殊に近年に於ては概してその講演の形式内容に於て窺はれる自由性の程度に於て認められ、而して後者において、當時生徒多數の思想傾向がより多分に反映せられる點にあると信ずる。然るに初期以來の招待講演は、たとへ純粹に部の催に係るものと雖も、積極的に學校より援助をなせしもの亦少からず、かゝる自由性の有無に於ける差異はさして認むるを得ざるものが少からざるは注目せらるべき所である。

先づ最初に記録に見ゆるは服部宇之吉氏演説會である。嘗て本校にて教鞭を取られた服部文學士が東京高師教授として京都へ出張されたのを機として、本校にて一場の演説を試みられた。其の要旨は戦勝後の社會の風潮が一般に惰氣の瀰漫せることを指摘し、その濁流が教育界にまで浸潤してゐるが故に我等はよく自ら守る所あるべ

く、自重自信の念を以て此の難局を突破すべく堅忍不拔の精神を涵養すべきであると説かれた。

次に二月五日午後八時より、生徒控所に於て、嘉納治五郎氏が三百の聴衆を前にして『講道館柔道の過去現在未來』について二時間に亙り講演せられてをる。

以上二つの催は、未だ岳水會演説討論部設立以前のことにして、演説部の行事に非るは勿論、そのいづれの催に係るやも知らないが既に何等かの關係あるものとして茲に記し置く次第である。

演説討論部設立後、明にその催しにかゝる第一回の招待講演は、三月廿日時の同志社々長横井時雄氏を招聘して行はれてゐる。氏は『社會の進歩と道德の思想と』と題し、今日我國社會の混亂は今や我國が封建時代より商工時代への過渡時代に遭遇して、社會の進歩と道德思想の進歩との相伴はざるによる、宜しく新時代に處するには新時代の道德思想を以てせざるべからずと個人の自覺を促され、忠君愛國の道義も個人的自覺に發せざるべからずと説き、新倫理の基調として個人的觀念を力説せられた。

此の他に本年度名士の神陵壇上に来れるもの、四月下旬外山文學博士が本校教室巡覽の後、生徒一同を講堂に集めて一場の演説を試みられたるあるのみにして、我が演説討論部の行ふ名士招待講演は僅かに横井氏招聘一回の實現ありしのみ。されど此の一回は神陵思潮史上充分の意義を有するものであつて、當時我校我部に同志社出身の諸氏の多數ありしこと、及び基督教と國家主義の衝突調和の世相と關聯して折衷的乃至止揚的に新しき時代を歩み進んだ當時の動きが想像せられるのである。

此の年度の稿を終ふるにあたつて特記し置くべきは、本校に三度教鞭をとられて三十二年六月任滿ちて歸國せられし英語教師ゼーンス氏のことである、嶽水會は六月十八日氏のために送別會を講堂に催してゐる。

氏は彼の新島襄氏を助けて、よく同志社の今日あるを致し、又日本基督教界の幾多俊才を養ひたるの人、我中には大阪英語學校時代に一年、次いで高等中學校時代に三年、更に我が第三高等學校に大學豫科の設置せられてより二年、英語教授の任にあたられ『その教場にありて生徒を教ゆるや、或は古今の歴史を敍し來りて、東西英雄の心事を論じ、或は宗教道德を論じて頑迷固陋の説を排し、腐儒空疎の徒を罵倒し、侃々諤々熱誠以て之れに當られしかば、聽く者皆時の移るを知らざりき』『嶽水會雜誌第三號所載田邊勝邪氏記』とて、其の生徒に及ぼせし感化は非常なものであり、神陵演説界の發展にも資する所あつたと云ふ。敢て特記した次第である。

明治三十三年度 明治三十二年九月—三十三年八月

部長 阪 口 昂

理事 大 喜 太 治 吉

水 口 俊 馬

小 林 源 松

十 倉 郁 太 郎

○演説討論部大會 十一月廿二日午後五時半 於講堂

自我論併て新人生諸子に望む 塚本義胤

挨拶 阪口部長

拜金主義 太田爲治

演説に付き一言 酒井副會長

雜感 武藤長平

理想 永留小太郎

東洋學界の過去及現在 厨川辰夫

體育論 人見二郎

司馬遷の因果應報につきて 山内教授

偶感 長一雄

閉會午後十時半

演説とは何ぞや 森川智徳

○演説討論部例會 一月廿日午後五時半 於講堂

當今の一大問題 田邊勝邪

開會の辭 阪口部長

獨逸學生の有様 來賓 千賀大學教授

國家と忠君 山本清丸

閉會午後十時

福澤諭吉翁に就て 武藤長平

○演説討論部例會 十二月九日午後五時 於講堂

東洋史紀年法 柴謙太郎

開會の辭 阪口部長

文明の進歩と日本風俗習慣 中村宏規

氣育論 野添愛善

主 義 佐野勇

對外ベイスボール競技につきて 高橋聿郎

現時の社會 井上義男

活道徳 岡部五郎

社會問題の未來 前川教授

閉會午後十時

○徳富猪一郎氏演説會 一月廿四日午後二時 於講堂

○巽軒井上哲次郎氏演説會 四月廿四日 於倫理講堂

○演説討論部大會 二月十一日午前十時半於倫理講堂

演題 「宗教について」

開會の辭 阪口部長

○演説討論部大會 四月廿七日午後六時半

制裁論 有馬忠三郎

開會の辭 阪口部長

精神修養に於ける唯心論の效力

演説討論部を如何せんとするか 岡部五郎

來賓 姉崎東大助教授

級會に就て 朽木十吉

校風論 遠藤鶴鷄

支那の事情 岡本徳三郎

靜思の要 日野健四郎

支那歴史研究の必要 柏木秀茂

法律の系統 來賓 岡松京大教授

我國鑛業の進歩 來賓 齋藤工學士

閉會午後十一時

閉會午後一時

○演説討論部例會 三月某日

○嘉納治五郎氏演説會 五月七日午後一時

閉會の辭 阪口部長

演題 「國力増進に就て」

熊本謙二郎先生高師教授に轉ぜられて部長更迭の事あり、即ち阪口昂教授その後を襲はる。此の部長更迭に加ふるに獄水會豫算會議の遷延は、我演説討論部の活動澁滞を來しその第一回の催をなせしは實に十一月廿二日



あつた。が然し乍ら曩の演説討論部會は例會と大會とに區別せられ、此年會を開くこと六回、内十一月二月四月には大會を開催して、此の大會に來賓名士を招待して講演を乞ひ、又此の他單獨に名士を招待してその講演を聞くことも三度に互つて行はれ、部の事業は少くとも外的には整備充實の途をたどつた。而し乍ら演説會の盛衰は聽衆の如何によつて左右せらる。毎月の例會はその都度聽衆減少の度を増し、三月の例會の如きは僅々二三十名なりしと云ふ。以下演説討論部會について細述する所により或はその原因を窺ふを得るであらう。

演説討論部會

既に述ぶることく部の活動滯滞して漸く批難の聲を聞かんとする時、第一回大會は開かれた。時に十一月廿二日午後五時半。來賓千賀大學教授、酒井副會長を始め滿堂三百の會衆を以て迎へられた。

先づ阪口部長は就任の辭を述べ、進んで『演説は自己が道徳上の修養知識上の研究より得たる實力其物を明瞭に適當に發表するに在り。彼の聽衆に感動を與ふるは可なれども、徒に末を逐ふて夢想空論に互り放言壯語以て得たりとするは大なる誤謬なり。……演説の要は腹案を第一となし口舌を第二となすを記憶せよ云々』と。次いで酒井副會長起つて「余は演説其物を賛す、されど數點の警告すべきあり。」とて「演説に於いて、罵詈譎諍すること勿れ。大言壯語すること勿れ。法螺を吹き立つること勿れ。氣取ること止めよ。」と箇條を擧げて戒め、更に「演説は叙事と議論との二種に大別せん。而も俱に思想を以て尙ぶべく辯舌の如き之に亞ぐ。思想古くして饒舌す、猶蓄音機の如し。要は知識の開發思想の展捗に在り。辯舌の如き從て熱せん。故に諸氏演説せんとせば寧ろ叙事體を擇べ。達人の傳可なり、經驗の實話可なり。諸子幸に我意を體し忘る勿れ云々。」と。更に此の日森川智徳氏は『演説とは何ぞや』と題して、先づ文章と演説との關係より説き起して、演説の定義を試み、演説の巧拙は一に平易と組織的知識と發音機關の美的發達との三要素に係るとなし、我部の缺點は先づ思想の秩序を缺くを多しとするを以て、殊に此の方面の匡正の急務なるを叫ぶ。前年度始めに於いて演説の要用が説かれたると對比して、茲に演説そのものに對する反省の加へられたることは、注目すべき所である。永留小太郎氏は『理想』と題して、「國家の理想は法律の統一による世界的國家なり」と説き、「此の統一國家となるべきは英にあらす、露にあらす、實に天祐ある我が日東帝國の天職なり」と結ぶ。人見二郎氏は『體育論』を叫んで、當時三高内に於ける運動體育を論じ、教授諸氏にまで學生と相携へて體育に眼め、又一面德育に資すべきを強調せらる『言に肉あり確に當夜の聞ものなりき』と。十二月例會に於ける高橋隼郎氏『ベースボール競技につき』と題して、十二月二日文學寮との野球試合の敗戦について説かれたる所と、校内運動部の問題に關するものとして同一系統に屬すべきものである。『當今の一大問題』の題下に、田邊勝邪氏現下過渡時代の社會の風潮を論じて、新しき道德革新の宗教に俟つて拜金主義の弊を論ぜらる。蓋し當時一般の風潮が新舊兩思想の相剋にその歸趨すべき方向を知らざる混亂の世相を問題とせしものであつて、尙ほ後に十二月例會における岡部五郎氏の『活道德』、太田爲治氏の『拜金主義』、一月例會に於ける井上義男氏の『現時の社會』など同種のものを見る。唯太田爲治氏の『拜金主義』は士魂商才の要を叫んで自ら新時運に對處せんとし、岡部氏の『活道德』は道德の根本として愛を叫ぶ。以て當時學

期

生の一般社會に對する關心状態を知り得やう。

當夜、會員の演説終つて來賓千賀大學教授の『獨逸學生の有様』と題する講話あり。了つて『坂口部長先づ一同に代りて謝辭を述べ、次いで散會を告ぐ。時針轉じ移りて正に十時に近く下弦の月光凄く玻璃窓を射來る。』

『十二月九日演説討論部例會を本校講堂に於て開く。此日寒風漸く威を加へ、木葉已でに地に委して、光榮轉た寂たり。我校の論壇亦此憾なきか。午後五時開會。坂口部長起て開會の辭を述べられ、時間を正確に守らざるべからざることを痛論せらる。當日の聽衆凡そ百十餘名と見受けたり。』此の日塚本義胤氏『自我論併せて新入生諸子に望む』と題して、巧なる論理の排列得意の快辯を以て學問上の自修、社會上に於ける自重を説き、セルフヘルプは千古の格言にして、我を信ずるは信仰の第一歩なり』と説かる。一月例會に於て、佐野勇氏が『主義』と題して個人に於ける主義の必要を論ぜられたるとは尙ほ趣を異にすと雖も、既に自我に對する或る程度の反省、個人の自覺の萌芽となし得やう。唯茲に注意すべきは、後に起りし内的自我への反省、自己人格への反省としての自覺とは尙遠く、單なる倫理上における自我の強調にすぎざりしことである。厨川辰夫氏『東洋學界の過去及現在』と題して、現今東洋學の進歩、泰西學界のそれに比して甚しく不振なるを嘆き、その原因として研究法の不完全なりしこと、學術に自由探究を許さざりしことの二をあげて、大に舊弊を打破して、東洋人の面目を發揚せざるべからざるを論じ滔々として腐儒の徒を罵倒せらる。最後に山内教授は『司馬遷の因果應報につきて』と題して時餘に涉れる演説を試みられた。此の後の二者は、前年度既にあらはれし支那乃至東洋研究の機運の今年度

に於ける最初のあらはれであつて、後に一月例會に於ける柴謙太郎氏の『東洋史紀年法』、四月大會に於ける岡本徳三郎氏の『支那の事情』、柏木秀茂氏の『支那歴史研究の必要』など此の種のものを見る。

一月の例會は、一月廿日午後五時半講堂にて開かれた。坂口部長始め前川、野々村兩教授の臨席あり、會するもの六十名。坂口部長は先づ開會を宣して再び時刻を確守すべきを説き向後を勸勵せらる。嶽水會雜誌雜報子が「先生をして此の言を再びせしめしは果して何の故ぞ吾人は會員諸兄と共に一段の注意すべきなり」といつてゐるに徴するも、當時諸會の開會、定刻に遅るゝことの常なるを知る。此の日『武藤長平氏圓顛楮面の快男兒悠々として壇に上り風呂敷包みより書籍の數々を取り出し、徐々として『福澤諭吉翁に就て』に入る。一種頓才を帯びたる流辯を遣り、翁の經略主義著書に就きて詳説し批評し紹介す。演題着實にして確に多少の勞力を働せし材料なり、彼の一時法螺を去る遠し云々』と。中村宏規氏『文明の進歩と日本風俗習慣』と題して日本服の不便不都合を擧げて西洋風を以て邦人の常服とせよと快辯を遣らる。此の日最後に前川教授『社會問題の未來』と題して登壇せらる「要するに資本家勞働者の衝突は經濟上の大問題にして多くの學者は問題の前途を最も悲慘なる破裂に終るべしとなせども、余は經濟界の自然趨勢により平穩に解釋し得べしと信ず」と。

『二月十一日紀元の大節はまた我演説討論部創立の記念日なり。此日倫理講堂に於て大會を開く。午前十時開會。來賓には岡松京都大學教授、姉崎東京大學助教授の兩氏あり。會衆無慮三百講堂ために狭し』と。即ち演説討論部大會は、例會不振の聲を破つて、盛況裡に開催された。先づ坂口部長は例によつて開會の辭を陳べ、さて

人類は其の所屬團體を愛するものなりとて「諸君よ學校を愛せば嶽水會を愛せよ嶽水會を愛せば其の最有力の機關の一たる本部を愛せよ、本部の務は辯舌を練るに止まらず道徳上の實力を養ふものなり云々」と。此の日有馬忠三郎氏『制裁論』、姉崎東大助教『精神修養に於ける唯心論の效力』、遠藤鶴鶴氏『校風論』、日野健四郎氏『靜思の要』、岡松京大教授『法律の系統』、塚本義胤氏『現今我國の家庭に就て』の演説あり。就中遠藤鶴鶴氏の『校風論』は『從來校風に關する諸演説を聴きしも、何れも隔靴搔痒の感ありとて、校風振作の策として所謂理想と實行との兩方面に各五箇條を列擧し、最後に本會の成績のあがらざる原因なりとて三箇條を數へて』論の秩序は整然たりしも尙ほ演説としての味は乏しかりき」と。校風の問題は、當時に於ける重要な論題にして、而も尙ほ確乎たるもの存せざりし有様は、之に依ても知らるべく、後の『自由』の校風は未だ現はれ得なかつたのである。序に一言すべきは、當時『演説としての味は乏しかり』しも尙ほ聞くべきの論をなす人の間々ありしことであつて、而も嶽水會雜誌雜報子の報する所、業にその辯技の如何に極めて重點をおけるも注目すべきである。

三月、例會が開かれて『聽衆僅かに二三十名なりき』とは、後の四月の大會の記事中に見える所であるが、他にその記録を得ず。唯々二月の大會に優に三百の聽衆を集めしが、翌三月には僅かに二三十名、以て四月大會に於て岡部五郎氏をして『演説討論部を如何せんとするか』と叫ばせた。

その四月の大會は、二十七日午後六時半より開かれた。阪口部長起つて開會の辭を述べらるゝこと例の如く、而して近時演説討論部不振の狀を嘆じ、部員諸氏の奮勵を望まれた。次で岡部氏又た我部不振の狀を憤慨せら

る。第二席朽木十吉氏『級會について』と題して今日所謂コンパの弊害を述べらる。尙ほ『支那の事情』岡本徳太郎氏、『支那歴史研究の必要』柏木秀茂氏の演説あつて、最後に來賓齋藤工學士の『我國鑛業の進歩』と題する二時間に互る演説があり、阪口部長の謝辭に閉會を告げた、時に午後十一時。

名士招待講演

此の年招待講演は、徳富猪一郎氏、井上哲次郎博士、嘉納治五郎氏の三氏を夫々單獨に招待した他、既述の如く例會や大會に來賓として學者などを招待して、その講演を乞ふてゐる。蓋し事業遂行の上の一進歩と云ふべきである。扱て後者については既に述べたから再言することを省略して前者三氏の演説を概観しやう。

先づ徳富猪一郎氏の演説會は一月二十四日午後二時より講堂に開かれた。此日學校當局亦午後臨時休業して生徒の氏の講演を聞くに充つ。聽衆三百有餘。氏は胸中に燃えつゝある一片愛國憂天下の熱情を吐露して、現下帝國主義の必然なるを論じ、富國強兵をして其の實をあげしめんがため、國民教育の必要を叫び、佛國に例を徴して國民の品性なるものが如何に國家存続の上に重要な關係を有するかを示し、轉じて我國社會の現勢を慨し最後に「諸君願くは徒らに蠶魚となり果つること勿れ、國家と蒼生とを双肩に荷ひ天下を掃除するの大丈夫たれ、富貴不能淫貧賤不能屈、底の大確信を把持せよ。(略)庶幾くは以て邦家を泰山の安きに置くを得む」と結び、拍手聲裡壇を降らる。

次いで四月廿四日、文科大學長にして自ら東洋のハルトマンを以て任じ、日本主義の鼓吹者たる巽軒井上哲次

郎博士の演説會が、倫理講堂に開かれた。博士は「今日は宗教の話をします」とて、釋尊を説きて禮讚し、印度佛教の東洋傳播を論じて、進んで日本佛教の變遷を一瞥して空海最澄より法然親鸞日蓮に及び、轉じて今日佛教の狀態如何と語り、現時僧侶の墮落を痛罵し、今日また佛教なしと結論せらる。博士は更に博士の宗教に對する態度及び宗教と道德との關係を述べんとて「吾人は宗教の力に依頼するを好まざる者也。吾人は吾人の知的能力を十全に發達せしめ、これに並行せしむるに道德思想の進捗及其實現を以てし、智徳合一の實を擧げむとする者也」「吾人は此の道德進捗の助力者たる點に於てのみ宗教の必要を認むる者也」と論斷し、更に道德の最重要なる旨を説きて降壇せられた。

嘉納治五郎氏、五月七日午後一時より我が嶽水會の請を容れて演説せらる。その要旨は、國力増進につきて國民の日常心得べき生活態度について語られたのであつた。

明治三十四年度 明治三十三年九月—三十四年八月

部長 山内晋卿
理事 武藤長平

大野徳風
照井辰次郎

○演説討論部大會 九月二十日午後六時 於講堂

開會の辭

武藤理事

不平家

横川彌太郎

討論會の組織

山内部長

挨拶

山内部長

議長 山内部長

學問乎將人物乎

小林照朗

副議長 中村教授

感ぜし所を一言

折田會長

書記官 武藤理事

嶽水會より本部は冷遇されてあり

湯川又夫

大野理事

青年と慷慨家

山本清丸

學生に對する飲酒の反應

近藤和作

家庭の成立

野添愛善

人は如何なる要素を具ふれば圓滿なりや

法科大學教授 井上密博士

論題說明

山内部長

閉會の辭

山内部長

少數論者(即消極論者)

閉會午後十時過

山内部長

濱田・綾野・本庄・高橋・堀田等及び中村教授

○討論會 十一月二日 於控所

山内部長

多數論者(即積極論者)

開會の辭

山内部長

武藤・小林・種田・三倉等

狂人につきて(演説)

武藤長平

○演説會 十一月二十九日午後六時 於講堂

閉會夜九時過

開會の辭 山内部長
 富者の責任 柏木秀茂
 個人及び一校の精神 佐野勇
 醫者につきて 内田藤太郎
 所感 武藤長平
 社會は有機體なり 山内部長
 青年が如何にして品性を作るか 中村教授

午後九時十五分閉會

○演説討論部新年大會 一月十二日午後六時 於講堂

開會の辭 武藤理事
 君が代合唱 洋琴伴奏 鳩義梯
 吾人の覺悟 横川彌太郎
 岳水會に就て 堀田眞猿
 王乘鷹先生作「紀念軍歌」
 洋琴演奏 鳩義梯

琉球に就て 伊波普猷
 西樂彈奏と詩吟 鳩義梯
 蠻骨黨の議 岡部五郎
 支那帝國の將來に就て 武藤長平
 二十世紀 佐野勇
 閉會の辭 山内部長

○演説部例會 二月二日午後六時半 於講堂

開會の辭 武藤理事
 所感 金田正四郎
 死 篠邊時次郎
 内部と生命 麻生榮三
 革命の宗教 岡部五郎
 西郷南洲論 文學士 菊池謙二郎
 宗教的偉人と心靈修養 森川智徳
 東亞の大勢を論じて現今の日本に及ぶ

午後十時半散會

○演説部例會 三月二日午後六時半

武藤長平
 開會の辭 武藤理事
 事業政治教育美文に就て 上村耕作
 我邦の漢詩界に於けるエポックメーカー 廣田道太郎
 青年 永留小太郎
 國家健全策 篠邊時次郎
 傳記の讀者に與ふる利害 濱田耕作
 丈夫の膽 岡部五郎
 春秋戰國時代に於ける諸子學說のスケッチ 山内部長

閉會午後十時半

○演説討論部大會 四月二十日午後七時 於講堂

開會の辭

生存の光榮

所感

社會と文學的趣味

權兵衛が種蒔きや烏がほぜくる

漢詩の創作を排す

所感

織田得能氏の妙法蓮華經講義を讀む

閉會午後十一時半

○三上參次氏演説會 四月二十四日

演題 『日記につきて』

○海老名彈正氏演説會 五月六日

演題 『青年修養について』

○尾崎行雄氏講演會 五月九日

演題 『生存競争の時代に於ける吾人の覺悟』

任重道遠

加藤正美

○演説部例会 五月十八日午後一時 講堂に於て

果して腐敗か

野添愛善

分 徳 山敷一成

道徳と宗教の關係

岡部五郎

生存競争の意義 濱田耕作

三田翁の瘠我慢説及丁丑公論を讀む

武藤長平

所 感 永留小太郎

武藤長平

外形的には其の事業兎も角も整備充實の途を踏み進んだ前年度をうけて、今卅四年度の廻り來る時、我部の理事先輩達が中興三年守成の難きを知らしめられた中心問題は、會毎に減少し行く演説會の聴衆をいかにして講堂に向はしむるべきか、及び漸くに『一部』法、文科のものゝ占有物となつたかの如き此の部に、いかにして二部(理工科)三部(醫科)の人士の關心を持たしめるべきかの二つであつた。

即ち此の年我が演説討論部は、富妻那の雄辯を以て夙に聞えたる山内教授を新に其の部長に戴き、『狂辯』を以て有名なる武藤氏等を其の理事に得て、我部守成の諸問題に對して熱心なる努力がなされたのであつた。その具體的なあらはれとして、或は演説會後の菓子分配、或は二部三部の人士への積極的な出演勸説、又演説會に從來既に行はれたる名士來賓の演説を請ふの他、新に音楽演奏を試みるなど、諸方面より聴衆を牽きつけるの手段がとられたのであつた。其の結果、毎演説會は兎も角も聴衆堂に溢れ盛なる景況を呈して此の年を終始し、又一方二部三部の人も漸く演壇に見られるに到つた。

從來二部三部の人士は、演説討論に關心を持つもの少くその部との關係も極めて稀薄と云ふべく、毎年二部三部よりも夫々各一人の理事を出し居ると云へども、それ等は殆んど規則的にたゞ選出し居るに過ぎず、従つて其の理事自身も殆ど無關心で、一切を一部の理事に委任し置くと云つた傾向が決して少くはなかつたのである。而るに此年一度びは理科に席に有した武藤長平理事しきりと勸説を試み、積極的に二部三部よりも辯士を送られんことを慫慂し、茲に九月大會に於いて二部近藤和作氏の登壇を見、十一月の演説會には、内田藤太郎氏が三部に於ける神壇増上の先登を誇られたのである。が此等の努力も量的には何等大した關係を二部・三部との間に致し得なかつたこと其の後今日に到るまでの大體の状態であり、之も兩者夫々の性質上、又現實上致し方なき所と云はるべきであらう。

扱て更に注目すべきは、前年度に於て何故か全然行はれざりし討論會が再び此年に復活せられてゐる事である。尤もそれは不充分なる結果をしか見なかつた唯一回の開催に過ぎなかつたが、又それだけに演説とならび稱せられる此の討論の事が斯くも寂寞を來した次第には大に考へさせられるものがある。斯かる討論不振の原因として、何と云つても第一に擧げらるべきは、會員一般の關心の對象となるべき好討論題の無かりしことであらう。既に議題の選定困難があり、而も之に對する準備又よく行はれず、唯斷片的なる知識概念の下に、徒に一時の議論を上下せしに過ぎざるため、會員一般の關心を失ふに至つたものと考へられるのである。爾後討論のことは、四十二年度に『靈魂の永在』なる題下に行はれたるあるのみにして、僅かに其の後行はれたる擬國會に討論的

なものゝ名残を留めたるを見るのみである。

以下此の年度の行事について眺めて行くであらう。

演説討論部會

新學年早くも九月廿日夕、その最初の催たる演説討論部大會が開かれてゐる。『集るもの來賓井上大學教授折田會長中村阪口兩教授を始めとし、無慮百五十名、蓋し近來の盛會なりき』と。此日登壇出演するもの六名、他に山内新部長の就任の挨拶あり。又折田會長は『演説半ばにかゝる事云ふはいかなれども部長の許可を得て一言せんとて、本會は茶話會に非ず、其の間の禮儀をよく心得、ヒヤカシ半分の評言は宜しからずと思ふ云々』と眞摯なる忠言を興へられたるは、濱田青陵氏をして嶽水會雜誌上に『近き日に開かれたる演説部の大會に嘲笑的評語を連發して、校長の眞樸なる忠言の一槍を頂戴したる聽衆は、最後の菓子分配に際して陋劣極る舞臺を演出したるぞ涙こぼるゝ、花瓶を破壊せざりしこそまだしもの事なりけれ』と云はしめたと併せ考へて、當時の狀態を髣髴せしむるものである。扱て最後に、法科大學教授井上密氏は『徐に壇に上り、余は今迄の演説をきゝ贊否相半せり、されど其利益を得し點に於て謝すと序言し、凡そ人は如何なる要素を具ふれば圓滿なりやと云ふ事につき一言せん』とて智識、堪能、徳義、勇氣、權力の五要素をあげて各要素につき細説せられた。尙此日會員の演説中二部近藤和作氏が『從來二部の者が演説等を試みざりしはいみじき缺點なり、僕は演説てふものを學ばばやと思ひ、はじめて演説を試みるなり』と前提して、學生に對する飲酒の反應を語られしは、十一月演説會に

於ける三部内田藤太郎氏の出演と共に、二部三部の士の漸くに演説に關心を有するものゝ出で來りし證左として注目せらるべきである。

十一月二日、此の一年間ほど開かれなかつた討論會が久し振りに開かれてゐる。今少しくその當時の景況を嶽水會雜誌所載の記事によつて窺はう。會場は其日が丁度天長節の翌日に當りしを以て講堂を使ひ得ず、控所に於て開かれた。折からの寒天で演説も何も口の中で凍つて出來さうもない位であつたが、百名ばかりも集つた。やがて六時十分會は始つて、部長の開會の辭あり、次いで武藤長平氏の『狂人につきて』と題する氏一流の滑稽演説あつていよいよ討論會に入つた。

『山内部長が討論會を組織せられた。即ち議長は山内先生、副議長は中村先生、武藤・大野の兩氏が書記官である。次に議長は本會を公開にするや否やを議員に問はれたが其の結果公開にする事となつた。』『それから番外山内先生は出題者として本日の討論題なる、現在の學生が其の専門の學科を撰ぶにあたりて競争者の多きものと少きものと何れが成功に便なるかにつきて説明を興へ、且つ其の範圍を限られた。つまり此の討論題に於ける唯一の制約は、競争者の多少といふことである。其の次に中村先生が討論題を廣義に解したいといふ注文があつたが其の議は消滅してしまつた。』

『先づ第一に當日の戰士として現はれたのは、例の武藤君で、少數論者(即消極論者)の意氣地のないのを譏られたが、次に濱田君は自然法を以て是を駁された。これからだんだん亂軍となつて、積極論者には、小林君、種

田君、三倉君等、消極論者では綾野君、本庄君、高橋君に堀田君が代る代るに出で、甲論乙駁凄じい光景を呈出した。つまる所、積極論者は競争心の起るといふ事と男らしいといふ二點を矛として消極論者の自然法や何かの楯を破らうとしたのである。最後に一同は兩大關山内先生(十)中村先生(一)の取組を見やうと待設けて居つたが、唯々中村先生の獨相撲があつた丈けでいたく失望した。それから遂に多數決をやつたが、消極論者が僅かの差で勝つたといふ次第である」と。次いで山内部長の批評あつて會を終つたのは丁度九時すぎであつた。

十一月二十九日午後六時より、此の年最終の演説會は例の如く講堂に開かれた。山内部長の開會の辭について登壇出演せしもの四名。柏木秀茂氏『富者の責任』と題して當時漸く起れる社會主義の勃興に對して、協調主義的なる主張をせらる。又三部の先登を誇つて内田藤太郎氏の登壇ありしこと既述の如く、概して會員の演説に見えるべき點少く、最後に山内部長、中村教授の演説あつて『九時十五分閉會茶菓の饗ありて各自談笑のうちに散じ去る』。『雜報子は最後に再び其の演説の内容の豊富と秩序的ならむことを切望せざるべからず』とは遺憾の極み乍ら、それが又やむを得ない當時の状態でもあつたのである。

演説討論部新年大會は一月十二日夜大講堂に於て開かれた。『定刻をすぐること三十分、部長は未だ來り給はず武藤理事は代つて開會の辭を述べ。君は例の雄辯を以て本部の昨年より益々活動し來るを欣び、猶會員諸氏の熱心に隆盛の域に進められんを願ふと述べ、今回より樂器を入れし理由を説きては、支那人が古來樂器を以て治國の器となせし實例をひき意氣揚々として席に歸る。次いで鳩義梯氏は拍手の間に洋琴の前に立ち「君が代」の譜

に指を下せり琅々たる音と共に聴衆は一同これに和せり云々」と。之新年大會開會の光景にして、演説會に音樂演奏をはさみし最初のことである。その理由は、或は之によつて聴者の靜肅を期せしもの、如くである。時に西紀一九〇一年の初頭に於て新なる世紀に新なる精神を以て處せんとするの意氣又演説の上にはあらはる。横川彌太郎氏『吾人の覺悟』と題して『我々が史上に名譽と希望を残すべき二十世紀は來れり、此世紀に置しき歴史を作る我々が責任の中心には死あることを覺悟せざるべからず』と説かれ。佐野勇氏は『二十世紀』と題して『十九世紀の個人主義は漸く變じて國家主義となり、二十世紀に於ては世界主義に變ずるや明かなり』と論じ、『今や東洋の風雲暗鬱たる間に我が邦人は人道を絶叫して支那人を救助し、東洋永遠の平和を保たんとしつゝあるにあらずや』と説き、二十世紀の新舞臺に立ちて活動せんとする我等青年の如何に愉快なるかを「論局」して壇を下られた。此の他伊波普猷氏の『琉球について』と題する演説は、氏が生地なる琉球の思想歴史言語を論じて、精密明截よく一般の好評を博した。

二月の例會は、同月二日夕、例により講堂に開かれた。『部長の熱心と、理事の周旋とは其の功空しからず、我演説部頗る隆運に向ふて全校人士の思想も大に辯論の方面に傾注せられつゝある如し、加ふるに毎會菓子附景氣あり、叱咤の聲拍手の音は月毎に廓如たる講堂に響きて集る者少くも百五十に下らず』と。茲に於て壇上又稀有の充實を示してその説く所極めて眞摯、殊に麻生榮三氏『内部の生命』、岡部五郎氏『革命の宗教』、森川智徳氏『宗教的偉人と心靈修養』等はいづれも眞摯なる思索研究の結果なりし如く、頗る好評を博し、武藤長平氏又外

交演説に得意の快辯を操りて『三寸の鋭鋒巧に眠氣欠伸の續出を受流し衆をして拜聴するを止むを得ざらしめし』と云ふ。尙此の日、世人より今東湖を以て呼ばれし水戸の人、文學士菊池謙二郎氏の西郷南洲論と題する講演あり。聴衆に多大の感銘を與へられたと云ふ。

三月の例会、何か仔細があつたらしいが、今回に限り僅々四十名の聴衆で、實に本學年未曾有の寂寥たる光景を呈した。併し乍ら壇上の演説は會毎に充實を來せし如く、多方面に互つて論ぜられ、廣田道太郎氏は『我邦の漢詩界に於けるエポックメーカー』と題して新體漢詩を提唱し、濱田耕作氏は『傳記の讀者に與ふる利害』と題してその内容流石に會衆をして随分傾聴せしめたと云ふ。最後に山内部長は『春秋戰國時代に於ける諸子學説のスケッチ』と題して一時間に互つて快辯を振られた。

四月の大會復滿堂の聴衆を以て迎へられ、壇上の去來亦漸くに壯士の演説の影を潜めて、眞面目なる質的演説の行はれるあり。就中文學乃至宗教に關するもの、起りしは、茲二三回の演説會に於て特に注目せらるべき所であつて、此の大會に於ては厨川辰夫氏『漢詩の創作を排す』、山本清丸氏『社會と文學的趣味』、森川智徳氏『織田得能氏の法華經講義を讀む』などあり。尙是等三氏は、いづれも當時神陵文壇の錚々にして常に嶽水會雜誌に異彩を放たれし人であつたといふことも、又肯かれる所であつた。尙武藤長平氏は『權兵衛が種蒔きや烏がほぜく』と題して、權兵衛を摯直誠實の士に名け、烏は惡漢に喩ふと巧なる比喻を以て當今社會の腐敗を慨し、是を救ふの道唯各自の内省あるのみとて技巧派の巨頭として滿堂の聴衆を酔はしめるの快辯ありしと云ふ。

五月十八日最終の例会が午後一時より開かれた。時しも學年試験の近づきしもその一因ならんも僅々二三十名の聴衆をしか見ざりしことは、學年最終の會として寂しき極みであつた。此の日登壇出演せしもの七人、中に『所感』と題して永留小太郎氏嶽水會に對する希望を述べらる。本年度嶽水會を問題にし校風を論ぜしものを茲に摘記すれば、九月大會に湯川又夫氏『嶽水會より本部は冷遇されてあり』、新年大會に堀田眞猿氏『嶽水會に就て』、岡部五郎氏『蠻骨黨の議』などを見る。此の中湯川堀田兩氏の演説は夫々一部の立場をのみ固執する我田引水の論なりし如く、永留氏のそれは比較的公正なる見地より、單に競技技術にのみ熟練したる運動部選手の存在を警められたるものであり岡部氏の議論は、校風の奢侈に流れ輕佻ならんとするを警められしものであるが、その中に『其の運動を盛にして外敵と技を闘すが如きは策の得たるものならず』と論ぜられたるは、後年野球部が岡山地方に遠征せんとして囂々の批難を浴びしと思ひ併せて、當時の注目せらるべき議論の一つである。要するに大體に於て此等校風乃至嶽水會に關する議論は、當時に於ても何等まとまつたものでなかつたことは、後年『三高の自由』と稱せられるに到つたものが、折田校長よく放任主義をとられて積極的なる干渉を避けられ、その間に無意識の内に育成せられたものである、といふと對比して却つて妙あるところであり、我が『三高の自由』は、諸説紛々として、而も各人自由に自説を主張し得た此の當時において、既に胚胎せられてゐたものと考へられるのである。尙このことは、當時我が三高内にあつて第一高等學校の籠城主義を批評するもの、ありし事よりも亦肯かれる所である。

名士招待講演

此の年、既に記する所の演説部會に名士の來場を乞ひ、その講演に接することの他、單獨なる名士招待講演も四月に到つて俄かに賑々はしく、三上文學博士の寶物取調べのために來都せられ居りしを、乞ひて一場の高教に接せしを始めとして、五月六日には教界の一偉人海老名彈正氏を、同じく九日には尾崎行雄氏を聘し、部の事業遂行の上に相當の成績を示してゐる。

三上博士は『日記につきて』の題下に、余は諸君に日記の實行を希望すとて、先づ歴史資料としての日記の價値を實證しつゝ、ついでその各種の利益をあげて細説せられた。海老名彈正氏の『青年の修養について』の講演は、先づ今日の時勢の重大なる所以を述べて青年修養の必要をととき、古今東西の偉人をあげてその學ぶべき點を力説せられた。尾崎行雄氏は『生存競争に於ける吾人の覺悟』と題して、その得意の雄辯に生存競争場裡に勇者たるべきがため道德の修養、身體の鍛鍊の肝要なるを説かれた。尙氏の演説は餘りに現實的にして理想を重んずる我等校友に多大の反響を呼起し、嶽水會雜誌上にその所論を迷妄なりと斷ぜしめしなどは嘗て見ざりし所である。

明治三十五年度 明治三十四年九月—三十五年八月

部長 山内晋卿
理事 岡部五郎
近藤和作

内田藤太郎

○演説討論部大會 十月十六日午後六時 於講堂

開會の辭 山内部長
立憲治下に於ける國民の覺悟 小西眞雄
朝鮮の話 永留小太郎
ニツチエと個人主義 麻生榮三
慈善事業と社會 野添愛善
徳川時代と文教 武藤長平
我國現時の佛教につきて 山本清丸
所感 京大圖書館長 島文次郎

閉會午後十時過

○演説部例會 十一月廿二日午後六時 於講堂

續朝鮮談 永留小太郎
現今青年に最上の徳教 山田定三
支那に就て 矢田部良造

第一期

五五

吾人と語學

釋迦

家族論

自然と人類

紳士道

○演説部例會 十二月七日午後六時

揆揆

三高と其の勃興策

續々朝鮮談

體育論

宗教的生活の必要

性

自由

能辯

田房友三郎

三倉滋

前田前之助

岡部五郎

岡本徳三郎

山内部長

玉木二五三九

永留小太郎

堀田眞猿

濱田耕作

廣田道太郎

粟屋謙

若山三郎

散會午後九時過

○演説討論部大會 一月二十五日午後二時

序言	山内部長
偶感	來賓 赤松連城
我國民の氣質	平野好男
理想の日本	柏木秀茂
擊劍	加藤正美
古事記と創世紀	鳩義梯
忠君愛國	岡本徳太郎
旅は道づれ世はなさけ	武藤長平
武士道	堀田眞猿
○演説討論部例會 二月八日午後六時	
自任の人	朝倉曉瑞
社會問題と演劇	田房友三郎
何をか新宗教と云ふ	野添愛善

狹義の法律に對しての他の法律 桑山鏡男
 イブセン著『社會の敵』を讀む 永留小太郎
 劍を解きてトイフェルに見えむ 岡部五郎

散會午後九時

○演説討論部例會 三月八日午後六時 於講堂

黃色人種の活動	田中邦造
東洋の英國	岡本徳三郎
日英同盟觀	三倉滋
星亨とは如何なる人なりしや	武藤長平
倫理に於ける經驗派と直覺派の調和につき	山内部長
閉會午後九時過ぎ	
○演説討論部例會 四月某日	
人と馬	野々口政太郎
英國的人格養成主義の必要	三浦碌郎

論語を讀む	野添愛善
コンプロミス	岡本徳太郎
支那滅亡論	武藤長平
演説につき	帝大講師 湯淺吉郎
○矢野龍溪氏演説會 四月廿八日	
○演説討論部例會 五月十七日午後一時	
挨拶	山内部長
峯と谷	廣田道太郎

青年の修養と品性の陶冶	柏木秀茂
第三期海軍擴張につき國民の覺悟	堀田眞猿
所感	山本清丸
東亞に於ける英露	麻生榮三
人物經濟論	後藤幸三
佛教と佛法	藤井義尙
散會午後五時	

中興三年、蓋し大體に於て順調なる發展を遂げしあとを承け、殊に前年度の素晴らしき盛況によつて、部の基礎漸く固りてその事業の半ば固定化したるも又致し方なき所とは云へ、本年度の部の状態は決して活氣あるものとは云ひ得ざりし如くである。されば、何等新しき試みの行はれし事もなく、唯前年度と大差なく其の事業が進められたにすぎない。尤も其の一因として、前年度に於ては部の豫算額六十二圓を認められしものが、當年度に於いて四十餘圓に激減せられたことも、少くとも精神的に何分の影響を齎せしもの、如くであつた。

演説討論部會

當年度最初の演説會は、演説討論部大會として、十月十六日に到つて開かれた。

永留小太郎氏『朝鮮の話』を演ぜられ、その朝鮮旅行の收穫を語られて好評を博し尙、後の例會にまでその續談をせられしは又注目すべき所であり、麻生榮三氏『ニイチエと個人主義』と題して當時漸く我が國へ傳へられたニイチエに就いて語り、その思想といひ、辯舌といひ先づ當夜第一のものとせられた。他に新顔として小西眞雄氏常連としては野添愛善氏、武藤長平氏、山本清丸氏の登壇あり、又最後に京都大學圖書館長島文次郎氏の講演があつた。

十一月例會は、同月二十二日午後六時より我講堂に於て開かれた。『此の日蘇秦張儀の辯をふるひ、富婁那デモステネスの舌を逞せし人』八名。新しき辯士として山田定三氏『現今青年に最上の徳教』、矢田部良造氏『支那に就て』、田房友三郎氏『吾人と語學』、三倉滋氏『釋迦』、前田前之助氏『家族論』などの名を見る。

演説部第三の例會は十二月七日を以て講堂に開かれた。先づ二部二年の玉木二五三九氏『三高と其の勃興策』と題して、當時所謂自稱模範クラスのリーダーの言として大ひに團結と制裁の要を叫ばれた。或ひは當時校風の反面を想像せしめるものと云ふべきである。濱田耕作氏は、『吾人の價値ある生活とは永久の世界記憶に印象するにありとし、之には高山氏の所謂美的生活最も貢獻あるを述べ、而かも美の最も高尚なる悲壯の生活は宗教的生活に求むべし』と『宗教的生活』を慫慂せられた。茲に到つては高山樗牛の美的生活論も、或意味に於て好箇の知音を得たりと謂ふべきである。而るに次いで廣田道太郎氏が『性』について述べられ男女交際の肝要を説かれたのは、之と對比して一抹の感興を喚び起すものがある。

明けて一月二十五日午後二時、新年大會は開かれた。部長山内先生の序言に始まり、先づ來賓赤松連城師の登壇を見る。師は夙に我が校佛教青年會に關係せられて既に校友の知悉する人、諸講比喩の辯舌面白く、要するに倫理の基礎として中庸を説かれ聽衆に多大の感銘を與へられた。鳩義悌氏『古事記と創生紀』と題して眞摯なる研究の結果を展開せられたが、徒に内容空疎なる壯士の演説を好める聽衆に妨げられたるは、當時に於ても甚だ遺憾とせられた所である。武藤長平氏は流石に斯界の古參として『旅は道づれ世はなさけ』と題して協同一致の精神を説きよく共鳴を買つた。此の日概してよき演説に乏しく、徒に蕪雜なる又粗樸なる又壯士のなるもの、現はれしは、聽衆の粗暴と併せて此後數年漸くに演説部が遊戯的となりて、いたづらに技巧のみ磨きし時代の來りしと關聯せしめらるべきである。

二月例會に於ては聽衆又少く僅かに五十。朝倉曉瑞氏『自任の人』と題して、自任の人たるべく靈的修養に勉むべきことを叫ばれ、珍客ながらその雄辯を稱せられ、野添愛善氏『何をか新宗教といふ』と題して、新しき宗教は感情と科學と融合したものでなければならぬと論じて、漸く我部の古顔としてその辯舌の進歩を認められた。又永留小太郎氏はイブセンの『社會の敵』を紹介し、之を我が曠毒問題に比較して正義眞理の味方乏しきを慨嘆せられた。最後に岡部五郎氏は『劍をときてトイフェルに見えむ』とて、嘗てトイフェルが我が獄水會雜誌上にもしたる『基督は其の觀念に於いて神にあらざることを論證す』との論文に反對して、自説たる基督神子論を展開せられ熱心なる基督教徒としてその熱誠を傾けられたのは又當日の秀逸であつた。

此の年三月一日日英同盟成る。則ち三月八日に開かれたる例會には岡本徳三郎氏『東洋の英國』、三倉滋氏『日英同盟觀』なる演説を見る。又此の日武藤氏によつて論ぜられた星亨氏の暗殺せられたるは前年六月の事件なのであつた。

『人まれにして二本松にかゝれる月のみいたづらにさえ渡れり、相かはらずの聴衆に相かわらずの辯士五分間の鈴の音すら何となくさみしげなり、少し遅れてやがて會は開かる』と。是れ嶽水會雜誌上四月例會の演説を記する序文である。又當時の第五高等學校の雜誌の其の演説會の記事の内に『諸先生惟らく途遠くして夜寒し、無益の車代を費さじ行いて硬疊に坐するの苦は談茶一喫止まりて暖爐を擁するの快と孰れぞや而り行かざるに若かず行かざるに若かずと、生徒は謂へらく行くと雖も徒に催眠歌を聞くが如きのみ如かず火鉢に股火して俗歌を唸らん哉止むなくんば即ち走りて階上に登り蒲團の中にもぐり込んで桓齋の快を取らん哉』而して時の可なるを窺ふて會場に走り先づ竊かに二三握の菓子を懐中に隠して後口の續かん限り腹の許さん限りセンベイを鶴呑にせん哉而して再び走り歸りて蒲團に投じ仰臥以て齋す所の殘片をかぢらん哉……斯の如くにして集る者之を職員にしては某々の三人、之を生徒にしては纒に十四の頭顱羅列するのみ、朔北の荒原桑枯肅條として一列の隊商長く夕陽に其影を引くに異らず何等の寂觀ぞ』見よ嘗て十四の頭顱を有したる會場は今や遽に増して大顱小顱出沒するに非ずや彼等は果して何のために來りしや見よ委員は立ちて閉會を報じ、センベイを配附し初めしにあらずや且つ見よ幾多の大小頭顱は蟻附蝟集一心不亂にボスボスやり居るに非ずや！』と。而して我が濱田青

陵氏は云ふ『直ちに移して以て我か嶽水會演説部の記事となさむ哉』と、嗚呼！悲しい哉。而も之れ當時演説會の一半の光景に他ならなかつたのである。

扱四月例會に於ては、帝大講師湯淺吉郎氏の『演説につき』と題せる演説ありたる他、野添愛善氏『論語を讀む』と題して孔子の倫理説を開陳したると武藤長平氏の『支那滅亡論』に滔々數千言よく聴衆を牽附けたるなどが纒かに擧げられる。

當年度最終の例會たる五月例會は、十七日午後一時より開かれてゐる。相變らず聴衆の寄り悪く又よき演説にも乏しかつた。唯柏木秀茂氏漸くその辯舌の進歩を認められ、麻生榮三氏の明晰の演説『東亞に於ける英露』と題して錯綜せる歴史的事實をよく會得せしめたる、又藤井義尙氏壯快なる大氣焰を揚げし程度にすぎなかつた。

名士招待講演

此年名士招待講演は、單獨には矢野龍溪氏唯一回にすぎず。部の例會に際して來場を乞ひしもの僅かに赤松連城師、湯淺吉郎の二氏に過ぎない。理事の努力足らざりしか將又事情の許さざるものありしか、何は兎もあれ寂寥の感あるを禁じ得ない所である。

第二中期 (明治三十五年より明治三十九年に至る)

概観 茲に中期と劃せられる所以は、先づ何よりも、演説討論部を構成した人的要素の質の變遷に求めらるべきである。即ち、我部設立の當初に於ては、凡そあらゆる種類の人々が、一應演説に關心を持ち、討論に好奇の眼を向けたのであつた。従つて我が神陵の壇上は、常に多種多様な色彩を帯び、絢爛たる殷賑の光景を呈した。だが既に明治三十五年度に於ては、嶽水會擴張の當時に接して我部設立の精神を體得せしものなく、其の事業漸く定型的に墮して、唯先人の跡を襲ふのみとも云ふべき感なきにあらず。加ふるに當初に於ては、恰かも此の部の外廓團體的な色彩をも有した佛基兩教の青年會、及び其の他の諸會が、漸く自己に眼ざめ自らの發展を計るに急となり、茲に、我演説討論部は、設立當初に於ける、宗教に關心をもてるもの及びその他を缺き、或は減ずるに到り、漸くに一部法料の人士の占有物と化するの趨勢をも招致したのであつた。又一方、その開始當時に於てはさしたる弊害も認められず、概して、その所期する所を遂行するを得たが、演説會後の菓子分配(明治三十四年度開始)のことは其の後却つて聴衆の質的下降を來し、高潔の士は遂にその來り會することを好まざるに到つては、演説場裡今や壇上壇下相争ふにまで到り、勢、壇上の士は、彌次を抑ふるため技巧の末に奔り、勢猛き咆哮を以て之に對せんとし、餘程興味ある内容の語られない限りは、靜かなる質的演説は影を沒し、徒に壯士的演説の蔓るを見たのである。だが、かゝる時に當つて、尙、演説に興味を有ち、此の道に精進せんとした人は、又

それだけに熱心なものがあつた。或ひは吉田山上寒風膚を剪くの中に、辯を鍛へ想を練り壇上の膽を養ふなど、極めて熱心であつたといふ。又一面部の事業遂行の上にも、茲に於てこそ、何等かの新機軸を見出さんと、或は外國語演説會を試みるあり、又擬國會の催さるゝあり、獨善的な中にもそれ相當の努力が續けられたのである。此點に於て、當時は、後年に於て、學生辯論のことが、漸く旺になつた明治四十年代以後の準備時代であつたとも云へるのである。

最後に附け加ふべきは、嶽水會雜誌上此時代の事についての演説會記事の餘り存しないことである。それは、漸く、雜誌部が一般的なる嶽水會機關雜誌の發行といふ立場より次第に離れて、少くとも單獨なる文藝的團體たる傾向の生じ來り、部報のことなどに、餘り紙面を割かざるに至らんとせしにも因るであらう。又、或は演説會の狀況が記するに足らざりしか、或は、演説部理事の怠慢も存したことであらうが、此點に於て此の中期は記録的晦冥の時代とも云へるのである。以下僅かに知るを得し程度に於て論述を進めるであらう。

明治三十六年度 明治三十五年九月——三十六年八月

部長 山内晉卿
理事 武藤長平

(後三倉滋と代る)

湯川又夫

○演説討論部大會 十月十六日午後六時

開會の辭 山内部長
 戰鬪上より見たる黒津の徒涉點 谷井濟一
 我國のベスチムング 横川彌太郎
 宇宙 三倉滋
 日本の現在 京都大學總長 木下廣次
 二部三部諸士の出演を望む 河野重紀
 偶感 講師 鶴崎庚午郎
 憂賭博 藤井義尙
 新女性 吉田信夫

○演説討論部例会 十一月廿三日午後六時 於講堂

開會の辭 三倉滋
 春と秋 有田邦敬

六四
 廣瀬 涉
 三倉 滋

○外國語演説會 十二月六日午後六時

所感 横川彌太郎
 刺戟 藤井八十吉
 殖民論の一節 田中邦造
 マキアベリズム 田房友三郎
 競争 法學士 神戸正雄
 俳人子規 武藤長平
 所感 三倉滋

英語演説 滋岡長彦

英語演説 河村一馬

獨語演説 横川彌太郎

英語演説 廣瀬涉

英語演説 木島茂

栗屋謙

中川芳太郎

獨語演説 加藤豊次郎

若山三郎

閉會午後九時半

○演説討論部大會 三月三十一日夜

開會の辭 理事 川村多實二
 社會主義 遠山翠
 偶感 瀧弘隆海
 教界の腐敗

信仰 野々口政太郎

學生時代を追想して 京大 久原教授

社會主義者に一言す 織田嘉七

前辯士への駁論 武藤長平

散會午後十時半

○演説討論部大會 五月十二日午後一時 雨天體操場

社會政策 前田前之助
 催眠術に就て(講演と實驗) 校醫 鈴木宗泰
 五時半閉會

學年の改まると共に、岡部五郎氏去り山本清丸氏逝きて、我が演説討論部の陣營漸く寂寥を覺ゆる時、尙武藤長平氏の健在するありて、茲に再び氏を理事とし、山内部長の下に部の活動は開かれた。而るに、十二月故あつて、武藤氏理事を退き、代つて三倉滋氏新任す。三倉氏又前年來我部の錚々、よく沈滞寂寥を感じし我部を引具して、新に外國語演説會を開催するなど縦横の活動ありしも、尙ほ一般に固定化した部の大勢は引戻すべくもなく、前年と引續いて、此の一年は又々澄澗たる所を缺きたるまゝに終始せし如くである。

演説討論部會

最初の大會は、例によつて、盛會に始終した。

『十月十六日、今日は演説討論部本年度最初の大會が開かれる、集るもの實に三百餘名、黒影こゝかしこに蠶々としてさしも廣き講堂も立錫の餘地なく、一尺高き壇上生花清香を放てる邊、既に蕭洒一箇の辯士の拍手の聲に送らるゝあるを見る、時正に六時』——之第一回大會開會の光景である。此日、山内部長開會の辭を述べて、『一學期に一回の名士招待の事を明にし(此のことはよく行はれなかつた)、且つ自己の思想が言論文章に發表せらるゝ以前に既に具體的に確定せるものに非ずして、發表の上其の抵抗力の強弱によりて始めて之が確定を見るものなりとて、演説の必用を説くこと滔々』。此日會員の登壇六名、その内、三倉滋氏『宇宙』と題して、氏の哲學的見地より、宇宙の何たるかを説明し、抽象の所論を持して、よく一瀉千里の快辯を自由にせられ、吉田信夫氏『新女性』と題して、音吐朗々現今女子風儀の頹敗を述べ、箱入娘的教育を排して、宜しく解放的なる、精神的教育の切要なるを述べられしなど、漸くに聞かれたるのみにして、此の他、木下京大總長の『日本の現在』と題する講演及び鶴崎講師が希望について語られたるありしのみ。

十一月例會。藤井八十吉氏宛然凜乎たる志士の概を以て、激烈なる言語に刺戟の要を述べ、偉人の傳記を讀むべし、校歌を作つて健兒を奮起せしむべしと叫ばる。評に云ふ『未だ嘗つて氣概ある君の如きを見ず』と。招待名士神戸正雄氏『競争』なる題下に、競争の要を叫ばれ、その霸氣稜々たる辯舌に多大の刺戟を與へられた。武藤長

平氏『俳人子規』と題して、此年九月根岸の病牀に逝いた俳人子規を語られ、その人格をたゞへられ、口調愼沈滔々數千言を重ね會衆に多大の感動をあたへたと云ふ。

明けて三月に至り演説大會が開かれてゐる。川村多實二氏の『社會主義』と又織田嘉七氏の『社會主義者に一言す』と同題を一時に見る。時しも幸徳秋水氏の『社會主義神髓』の世に出でし時にして世に噴々の世論ありしとき、我が神陵壇上に之が紹介をせられたるも、多く調和主義的見解を吐かれる範圍を出でざりし如くである。此の他野々口政太郎氏が謹嚴の態度よく自己が信仰を語られしを記するに足るのみ。尙ほ京大久原教授の懷舊談があつた。

五月の大會は、同月十二日午後一時より開かれたが、校醫鈴木宗泰氏の催眠術についての講演と實演があつた。他前田前之助氏『社會政策』と題する演説ありしのみ。

外國語演説會

三倉新理事の新に企圖せられたる事業として、十二月六日夕より開かれた。物珍らしき聽衆數十名に迎へられて、六つの英語演説三つの獨語演説が行はれ、河村一馬氏木島氏中川芳太郎氏の英語演説、獨語の廣瀬氏若山氏等好評を博せしも、『立板に水ならばしむ間もあらん、立板に豆とや云はん有様にて、長々三十分餘りも演ぜられしには感心せしもの、解せし所一もなし、蓋記者のみならんや』的に終つた、茲に此の會の永續せざりし最大の原因を見出し得るのではないか。蓋し詮方なき所である。

名士招待講演

此年遂に唯一回の招待講演會もなし。唯僅かに京大總長木下廣次氏、法學士神戸正雄氏、京大教授久原氏の夫々例會、大會に御來場ありし他、校醫鈴木氏の講演を見るのみ。創部以來の不振と云ふべきである。

明治三十七年度 明治三十六年九月—三十七年八月

部長 山内晉卿
理事 藤井義尙

玉木二五三九
大石貞夫

○演說部例會 十月十四日

孔子及び其の門下 石川先生

緬清旅行談 野村某

南北朝史の比較 河村某

其の他福間君等數名が演說した。

○演說討論部大會 十月十六日午後六時

外來辯士に湯淺、廣邊の兩氏あり、近來の盛況なりき。

○演說部例會 一月二十三日午後六時

年始の感 太田萬之進

國民の固着力 岩根一

音樂の活用 藤澤穆

官吏的國民と社會主義との關係 關川平三

道徳 秋山襄

佛像に就て 部長 山内教授

閉會の辭 理事 事

閉會午後十時

○池邊義象氏演說 某月某日

演題 『近世海事史評論』

○演說部大會 五月某日 於雨天體操場

記錄せられる演說會は、十月、一月の各例會と十月、五月の大會、他に最終演說會と稱するもの一つ、尙ほ池邊義象氏の演說ありしことを知るのみ。いかにも記録寂寥たる一年であつた。然し口碑傳ふる所によれば演說練習會とも稱すべきものは、月々ありしもの如く、又演說に熱心なる士は吉田山上に立つて咆哮せしこともあるといふ。矢張り技巧の重んぜられて全體的な發展を遂げることの出来なかつた一年と云ふべきである。此年雄辯を謳はれ、彌次馬をして啞然たらしめし士は、秋山襄氏を雄とし、藤井義尙氏又壯快の辯を以て聞こえた。

明治三十八年度 明治三十七年九月—三十八年八月

學者の武器 來賓 湯淺吉郎

吾又何をか云はん 來賓 新渡戸稻造

○最終演說會 五月某日

嶽水會に告ぐ 下斗米秀二郎

別るゝにあたりて告ぐ 秋山襄

部長 山内晉卿
理事 關川平三

下斗米秀二郎
和辻龍太郎

○演説部例会 十月十五日午後六時

- 開會の辭 下斗米理事
- 落第 大久保勝
- 勤儉と奢侈 關川平三
- 對外政策の管見 廣岡健次郎
- 各人の快樂と永久快樂 藤井八重吉

- 留意すべき一新潮 大森吉五郎
- 近重眞澄博士講演
- 藤浪鑑氏講演
- 擬國會
- 議長 大野教授
- 議案 『女子帝國大學設立案』

嶽水會の雜誌に記録する所は、十月の例会唯一つのみである。此年二部下斗米理事、部の事に熱心にして名士招聘に努めらるゝ所あり、近重眞澄博士藤浪鑑氏等の來り講演せられしことが傳えられてゐる。尙ほ又新しき試みとして、始めて擬國會が催されし由にて、大野徳孝教授に議長を願ひ、『女子帝國大學設立案』なる議案を上げて盛會なりきと云ふ。

最後に特記すべきは、當時校内に於て校歌創定の提唱の行はれ、我が演説討論部に於ても亦かゝる主張行はれ、演説會にオルガンを持ち出して、音楽鼓吹をやりしこともありし由にて、蓋し當時は未だ校歌と稱すべきものなく、我三高の生徒は或は第一高等學校の寮歌を誦し、又或は軍歌などを歌ひしものにして、今日の逍遙歌『紅燃ゆる』のなりしは、かゝる主張の起りしに負ふ所である。

當年關川平三氏は快辯を以て聞こえ、大森吉五郎氏『留意すべき一新潮』と題し『我國の戰勝は專制の打破に貢

獻するものにて、時代の思潮に馳りて以て此處に至らしめしものなり』と論じ、時恰かも日露交戰中のことにして時節柄大に趣味ある演説として迎へられた。

明治三十九年度 明治三十八年九月—三十九年八月

- 部長 山内晉卿
- 理事 秋山武太郎
- 内海忠司
- 鈴木正治

○演説討論部例会 十月十四日午後六時 於講堂

- 開會の辭 理事 事
- 賓主互換の話機 來賓 刈谷無隠
- 所感 小林二作
- 詩と國民 丹羽眞鐵
- 挨拶 大久保勝
- 學生の進路? 中田延太郎
- 漢字について 傳 銳

- 經濟學上より見たる勞働問題 内海忠司
- 前學年に於ける三高運動界 阪本信一
- 死すべきの時機 谷川瑛
- 人格修養論 鎌田六三郎
- 逸題 伊藤克寛
- 喝 角岡知良
- 不平論 前田榮三郎

此年も亦た記録に残る部の事業は實に十月例會の唯一つに過ぎない。卅九年四月に對一高との野球戦が開かれ、運動部隆盛の火蓋を切つたが、未だ我演說討論部には、對外出演のこともなく前年度と引續いて平凡裡に此の年度を終始せしもの如くである。

今少しく十月例會の模様を記せんに、『十月十四日、吾が部は幾多新銳の健兒と共に、講堂に於て第一例會を開催し、互に理想を語り抱負を談じ不平煩悶を吐露し、以て快を盡しぬ。當夜集るもの二百六十名。午後六時理事開會の辭を述べ』。

先づ最初に来賓刈谷無隱氏の『賓主互換の話機』と題する講演あつて、會員の演說に移る。すべて登壇出演せしもの十二名。大して記すべきものなく、唯、傳銳氏『漢字につきて』と題して登壇したるは、留學生たる立場に顧みて注目を牽き、角岡知良氏『喝』と題して、日本國民の保守性を斥け、須く進歩的膨脹的なれと説かれし論理の稍明確にして態度音聲の佳なるを以て、當夜中最も難の少き演說とせられたに過ぎない。尙此日ポーツマス講和條約に論及せられしの多かりしことは、時事の反映として別箇に注目せらるべきである。

第三後期 (明治三十九年より明治四十三年に至る)

概観 此の時期はいはゞ過渡時代である。過ぐる中期は日露の風雲去來漸く慌しきに始まり、その戦塵全く收つて、そこに、新しき建設への時代の始めらるゝと共に、茲に誌す後期に遷るのである。戦勝の美酒に酔ひ、憲政日本の躍進に、明日の光榮を思つて、當時青年等が前途の豁然たるを覺え、益々辯論習熟の要を感じ、茲に學生辯論熱の滔々たるを見るに到つた。殊に東都に於ては、夙にその勃興を見、都下學生聯合演說會の如き各校に催さるゝあり、漸くにその競技會的性質を帯びるに到つて、その流行、次第に隆盛を加えつゝあり。又擬國會の如きは既に古くより行はれて、益々隆運に向ひ、よく學生の政治的關心の捌口となつてゐたのである。かゝる關東學生辯論界の風潮に刺戟せられて、關西又頻に動くの萌しあり我が演說討論部に於ても、擬國會の事は明治三十八年度に一度行はれしを見るも、諸般の事情、未だ之を續けるに到らず、明治四十年度に、又之が復活を見、漸くに此部隆盛の緒に就けるを見る。即ち茲に後期と劃する所以は日露戦勝の波に乗つて、新しき時代精神の下に進展を續けるその第一歩が茲に印せられたからである。其の後我部擬國會の事は又中絶したが、既に關西の學生辯論界活況を呈し、我部また積極的にその趨勢に加つて、正に中期の沈滞は茲に破られんとしたのであつた。だが之等活潑なる進出も未だ校内一部演說屋の關心を出でず、校内多數の理解に缺くる所あり、かくは過渡時代として後年卓風會、縦横會の活動に始まりし第二期と區別せられる所以である。

明治四十年代の數年は思想文藝上自然主義時代と稱せらる。又此時代は三十年代に入り來りし社會主義の思想が頂點に向つて驀進を試み、彼の大逆事件(四十三年九月)を惹起した時であつた。當時の青年が自然主義の文藝作品からトルストイやイブセン等の人道主義的な思想に接し、浪漫的ななかにも社會的な何物かを無意識乍らに眺めてゐた時であつた。唯、一般には、青年の政治的關心は次第に高まつて、滔々たる辯論熱の隆盛を見たのであつたが、其の裏には、それと何か對蹠的なものがあつた所に過渡時代としての特色が認められ、又そこにこそ次期への發展が考へられ、延いては遠く大正後年の社會的現實的な傾向と思ひ合して、興趣たゞならざるを覺ゆるのである。

明治四十年度 明治三十九年九月—四十年八月

○秋季大會 — 滿鮮地方巡遊報告會 — 十月十六日
午後五時半 於講堂
開會の辭 内海理事

宇品より旅順迄
旅順より奉天迄
安奉鐵道の喜劇
部長 山内晋卿
理事 内海忠司
川口保次
大久保勝
山城秀次郎
阪本信一
角岡知良

撫順炭坑 松島教授
朝鮮の風俗 加來教授
滿韓の經濟的觀察 前川教授
滿洲に於ける勞働問題及び南滿洲鐵道私見

文部大臣 水谷幸二郎
司法大臣 野口榮三郎
農務大臣 川口保次
嶽水議院書記官長 高木健吉
嶽水議會議長 法科大學助教授 佐藤丑次郎
嶽水議會副議長 本校教授 大野徳孝

閉會の辭 内海理事
閉會午後十一時半

嶽水議會議長 本校教授 大野徳孝
嶽水議會副議長 本校教授 大野徳孝
溫和黨主領 阪本信一
急進黨主領 角岡知良
馱樂俱樂部代表 飯島勝次
鐵血俱樂部代表 北某
天理黨代表 松本某

○擬國會 二月十八日公白 二月二十三日午後一時半より開く 於雨天體操場

内閣總理大臣 山内晋卿
大藏大臣 内海忠司
兼任内務大臣
兼任遞信大臣
外務大臣 小池周三
陸軍大臣 田口松次郎

其の他、丹羽(溫)、郡(急)、正路(急)、大久保(溫)、高木(急)、鎌田(溫)、横堀(溫)、津島(急)、大森(急)、永井(溫)等が活躍した。



議案

(陸軍々備縮少によりその經費を捻出)

第一 大學令中改正法律案(政府提出)(男女共學の案)

○戸田市氏演說會

演題 『我國民の缺點』

第二 徵兵令中改正法律案(政府提出)(專門學校以上卒業生に兵役上の特典を賦與する案)

○狩野直喜氏演說會

演題 『清國談』

第三 航海獎勵港灣計畫遂行のための追加豫算案

此の年は、前年度に比して稍々澁刺たるものありし如く、部の事業又漸く舊の盛時に還りつゝあるかに見られる。

即ち秋季大會は滿鮮地方巡遊報告會とせられて、過ぐる休暇に該地方に旅行して日露の戰跡を經廻られし三教授一先輩、三會員の旅行談を聞いてゐる。此の他演說會の記事を見ず。遺憾乍らその如何なる模様なりしかを明にし得ない。唯擬國會の行はれて、近來稀なる活況を呈し、又戸田市氏狩野直喜氏の招待講演のありたるなど、稍事業の行はれるありたるを見る。尤も此二つの講演は、共に演說部會の席上に於てなされしものゝ如くである。

擬國會

擬國會は二月十八日『嶽水會憲法第七條により二月二十三日第二嶽水議會を開く、二月十八日、各大臣署名』と

いつた公示が張り出され、同時に、議長議案が發表せられしより始まる。溫和急進の兩黨に加ふるに駄樂、天理の諸黨派組織せられて、或は聲明書を、或は各機關新聞を發行して全校をその渦中に惹き入れ、時未だ到らざるに議案を廻つて甲論乙駁の旺なるを見る。かくすること數日を経て、二十三日午後一時半、嶽水議會は開會せられた。

扱、要するに此の擬國會は全く芝居掛り式ではあつたが、興味多き時事の問題を上げて議論を上下する所、討論辯舌練習の上から見ると又興味の點より見るも探るべきものあり、かくは旺に行はれたが、後年に到つて既にかゝる政治問題に興味を失ひ學生思想の移り變ると共に行はれなくなつたのに鑑みると、此年擬國會の我校に行はれたといふことは、尙ほ當時の思潮に多く負ふものながら、我部を構成する士の趣好を知らしむるものと云ひ得やう。

明治四十一年度 明治四十年九月—四十一年八月

部長 山内晉卿

理事 津島憲一

川口保次

飯島勝次

○演説討論部大會 十月十六日夜 於講堂

開會の辭	津島理事
青年の使命	藤林廣胖
川柳界に於ける二大人格者	來賓 湯淺吉郎
雜感	厨川教授
現今の基督教徒	紀太平太郎
加藤弘之著我國體と基督教を讀む	郡茂徳
胃病の日本	別宮秀夫
誠	鎌田六三郎
革命	横堀善四郎
金閣寺建立と文明の東漸	永井榮藏

閉會午後十時半

○辯士派遣 一月二十五日神戸高商主催關西聯合演

説大會へ

日本美術史に於ける浮世繪の地位 永井榮藏

○演説討論部第二期例會 二月十五日午後六時於講堂

開會の辭	津島理事
妻	新谷壽三
グリルパルツェルと其の處女作	橋本教授
歐米雜感	法科大學教授 神戶正雄
教育	田村明一
我が性觀	郡茂徳
ふね	大國壽吉
シーザーに就て(英語演説)	今井二郎
武士道を難す	永井榮藏
今古豪傑概論	吉武眞貫
京都繁榮策	丹羽眞鐵

閉會午後十一時

○山路愛山氏演説會

○宮川經輝氏演説會

此の年に於て特筆せらるべきは、辯士を他校の演説會へ派遣することの始めて行はれしことである。即ち日頃その獨特の演説振りと例の洒落と奇抜なる論説の妙味とを以て有名なる永井榮藏氏が、一月廿五日神戸高商に於て行はれし同校講演部主催の關西聯合演説大會に、『日本美術史に於ける浮世繪の地位』と題して、獨特の雄辯を振はれしことである。是れ、我が部が對外的交渉を持ちし最初のものにして、當時漸く盛になり來れる學生辯論界の潮流に乗りしもの、又翌四十二年度に於いて、我が部主催の下に近縣各學校演説大會の催される機運を導きしものである。

扱て此年には二つの演説討論部會が記録せられてをる。その最初のは十月十六日夜行はれたる大會にして、湯浅厨川兩先生の御出演を得て、相當な盛況を以て、開かれた。湯淺吉郎文學士『川柳界に於ける二大人格者』と題するは、下女と居候に關する古今の川柳をとり上げ、之を巧に論評せられた興味多き講演であつた。厨川教授は自らの高校時代を回想され、讀書の肝要なるを訓へられた。會員演説に於ては横堀善四郎氏『革命』と題して經濟上産業上の革命より、それが遂に政治上社會上の變革を齎すべきものなるを説かれて、聴衆に意外の感と興へしと、永井榮藏氏が『金閣寺の建立と文明の東漸』と題して氏獨特の文明批評を試みられしと、其の他基督教に關する演説の二つも現はれしが僅かに注目せられる。

次いで二月十五日に開かれたる第二期例會に於ては、法科大學教授神戶正雄氏の『歐米雜感』と題する講演ありたる他、橋本教授は『グリルパルツェルと其の處女作』を紹介せられ、會員演説に於ては、新谷壽三氏『妻』と題し

て新女性觀を述べられたる、今井二郎氏の英語演説のありたるなど注目せらるべきものである。
尙此年、山路愛山氏宮川經輝氏の招待講演があつたが、記録を缺き、その詳細を知り得ない。

明治四十二年度 明治四十一年九月—四十二年八月

部長 山内晉卿
理事 華房季麿
大橋重威
岸勇

○第一回例会 十月廿四日午後一時 於講堂

開會の辭 華房理事
教師論 田村明一
奢侈論 松田一雄
我黨の主張 木村省三
流行語『自然主義』を思ふ 新谷壽三
我輩は自然主義者なり 九里虎之助
靈魂の永在に就て 北山勇

俯仰不愧天地

別宮秀夫

彌次馬論

大槻信次

ブラマルバス

成瀬教授

討論『靈魂の永在』

木村、新谷、北山等諸君の主張あつて黄昏のため
打切つて散會、

○第二回演説會 二月十三日午後七時 於講堂

開會の辭 華房理事

予言者とは何ぞ

木村省三

我國工場制の機運

石井寛三

現代の青年は墮落せりや

松田好徳

神陵の學風

久留貞次郎

彌次

二宮守人

家郷病と愛國心

大槻信次

智力の養成

法學博士 仁保龜松

無題

茅野教授

○第三回例会 五月八日午後一時 於講堂

開會の辭

華房理事

澤柳政太郎先生著『學脩法』を讀みて

榎並徳太郎

霸氣と青年

久留貞次郎

野球部理事として校友諸氏に謝す

村上省悟

當時漸くに勃興し來つた學生辯論界發展の氣運は、又我が神陵演説界にも訪れ來つて、我が演説討論部の事業

流行語『自然主義』を思ふ(續)

新谷壽三

理想の生涯

内藤隆道

○近縣各學校演説大會 五月廿三日午後一時 於雨天

體操場

於雨天

開會の辭

華房理事

日本人と美的趣味

本校 藤澤廣胖

疑は人にあり、天に偽りなきものを

本校 藤澤廣胖

性格論(獨語演説)

本校 別宮秀夫

恩寵の生涯

本校 今井二郎

科學的實業論

佛敎大學 梅原眞澄

根本的革新

大阪高商 藤田建雄

吾人のクラフト

同志社 長谷川直吉

思想の人となれ

同志社 白木兵吉

思想の人となれ

同志社長 原田助

も亦大ひに振つた。即ち時機宜しきを得た三回の例會を開催して、其の内第一回に於ては久し振りに討論の行はれるあり、又壇上の去來決して寥々ならず、二部三部の士も活潑に登壇して所信を語り、壇下又之に對してなか／＼の盛況であつたと云ふ。更に當年度に於て注目すべきは、我部主催の下に近府縣各學校演說大會の開かれたことであつて、我部が漸くに積極的に學生辯論界に進出せし最初のものとして特記さるべきである。

演說討論部會

その第一回の例會は十月十四日午後一時より講堂に開かれた。此の日新谷壽三氏『流行語自然主義を思ふ』、九里虎之助氏『我輩は自然主義者也』の演說を見たるは、當時文壇思想界に旺なりし自然主義の漸く我校に浸潤せられたるを見るもの。中にも新谷氏の演說は此の第一回例會に於けるのみならず第三回例會に於てもその續きとして同題を掲げられたるを見る。田村明一氏『教師論』、木村省三氏『我黨の主張』は夫々二部三部の士、或は當時教育者の通弊を指摘痛罵して喝采を呼び、或はクリスチャンとして穩かな話し振りの中にも不屈の意氣を罩めて眞摯の辯聞くべく、尙ほ新谷氏は二部切つての異丈夫であつた。蓋し二部、三部の士の一時にかくも賑かな出演を見たのは稀有のことであつた。大槻信次氏『彌次馬論』と題して、流暢の辯を以て理性的彌次馬、道德的彌次馬の出現を望んで壇下彌次連の自重を説けるは、第二回例會に於て二宮守人氏『彌次』と題して、大彌次、小彌次、解脫彌次と彌次を分論せしと共に、確かに當時に於ける演說會と彌次馬の反面を語るものであつた。又此の日成瀬教授の『ブラマルバス』と題する講演が行はれ、最後に『靈魂の永在』と題して討論の行はれしこと既述の如くである。

る。

第二回例會に於ては一部一年の久留貞次郎氏『神陵の學風』と題して『神陵の光榮より説きおこして、我校に新生命なしと絶叫して吾人の覺悟を求む』と。當時新入生の間に新なる校風の振起が叫ばれ、後年卓風會縱横會などの起りし先驅をなすものとして特記さるべきに屬する。而して此日一部二年松田好徳氏が『現代の青年は墮落せりや』と題して然らずと辯ぜられたるは、此の兩者の間に既に本質的な相違を見出すものとして、時期劃定の上にて意義あるものである。他に此の日法學博士仁保龜松氏『智力の養成』、及び茅野教授の講演があつた。

第三次例會は五月八日に開かれてゐる。野球部理事村上省悟氏の登壇を見たるは、此の春四月野球部東征第四回目の一高との野球戦あり勝つべかりしを、事あつて無勝負にして、歸西したる顛末を報告せられたるものにして、當時何故に此の雪辱の好機を逸せしや、校友一般の不可解とする所であつた。何は兎まれ當時に於ける演說部運動部一般校友との圓滑なる關係を窺はしむるものである。

最後に近府縣各學校演說大會の行はれたることは部史上、此の部發展の一楔機をなすものとして、注目すべきものなること既に述べし如くである。かゝる他校の辯士を招待する演說大會は、何故か次の明治四十三年度には見られなかつたが、翌四十四年度以後は『演說部大會』なる名稱の下に引續いて行はれてゐる。その詳細は次期に於て述べることにして、茲では唯、四十二年五月廿三日に開催されたその景況を少しく述べておく。『廣い演壇一面に敷物を布いたのが目につく、右の方大花瓶に芍薬をさしたのも心持が良い。一時山内部長に代り華房理事

開會の辭を述べる。此の日我校の辯士の出演するもの三人、藤林廣胖氏は『日本人の美的趣味』と題して『よく廻る舌を以て美の意義を論じ、之を分類し日本人は須らく纖弱優美の美を棄て、豪壯雄大の美を採るべしと結ぶ』。別宮秀夫氏『疑は人にあり天に偽なきものを』と題して一時間に互つて演説し、而も聴衆をして飽かしめざりしと云ふ。最後の今井二郎氏『性格論』と題して獨逸語演説を試みらる、聴衆よくその云はんとする所を解せずとも皆醉はされたとは、又當時の聴衆の一面を語るものではなからうか。來賓各校の辯士は總じて四名、他に同志社長、原田助氏の『思想の人となれ』と題する講演あり。名士偉人の名をあげその生立を語り之等偉人をして偉人たらしめしものは、之等の人がすべて思想の人であつたことであるとして、我國當時の思想界を顧みて青年の讀書思索の要を叫ばれた。聴衆に多大の感銘を與へ近來の有益なる演説であつたと云ふ。

名士招待講演

演説部例會、大會に於て見られる他、單獨なる名士招待講演は此年に於ては見られず。而もそこに大なる原因のありしことも聞かず、蓋し左様注目すべきでないと思ふ。

明治四十三年度 明治四十二年九月—四十三年八月

部長 山内晉卿
理事 藤林廣胖

田村明一
前川昌三

○第一回演説會 十月三十日午後六時 於講堂

歴史に載らざる英雄 鈴木保三
社會制裁の必要を論ず 北山勇
道徳上に於ける新舊思想の衝突 岡村法學博士
血 榎並徳太郎
弱きもの汝の名は女なり 久留貞次郎
旅順要塞談 赤澤仲次
外國語演説 高松齡吉
理想像 上畑悌二

○第二回演説會 二月十二日午後一時 於講堂

開會の辭 田村理事
個人の力 丸田建介
自由と協同 馬杉秀
愛 名和克巳
王朝文學にあらはれたる天臺思想 二宮守人
敵は本能寺にあり 春日直之助
吾人の態度 一柳學俊
失題 鈴木保三
法然聖人 久留貞次郎
ハレイ彗星と出現當時の社會現象 小酒井光治

現代を謳歌す

北山 勇

○演説大會 春某日

常識と修養

理學博士 菊池 大麓

逸 題

來賓 市村 光惠

○辯士派遣

大阪高商主催關西學生聯合演説會(藤林廣胖)

○一部二年甲組究辯會 (後卓風會と改稱)

第一次演説會

歴史の精神

杉浦 次男

回 顧

宮原 芳茂

東西文化の融合

馬 杉 秀

二葉亭四迷を思ふ

松田 好徳

基督より見たる富豪

野添 可吉

法 然 聖 人

久留貞次郎

不 明

上畑 梯二

不 明

三宅 抗一

昨日の興趣

中村 耕造

第二次演説會 十月十四日

我 鳴 れ

上畑 梯二

日本に於ける宗教の將來

山下 隆一

ジョンブルとルイスバレン

馬 杉 秀

教育の實際

淺野 安吉

生命につきて

奥 献二

第三次演説會 十月二十八日

朝雲 暮雨

久留貞次郎

偉大なる平凡

三宅 抗一

自由制度の精華

春日直之助

英語 演説

高松 齡吉

英語 暗誦

山口 茂

靜 座 説

川那邊 堪然

第四次演説會 十一月十一日

靜 中 の 動

馬 杉 秀

鈴 音

山 口 茂

時代と英雄

松田 好徳

プリンス・イトー・アンド・ヒズ・キヤラクター

高松 齡吉

余は自然主義者なり

奥 献二

不 明

上畑 梯二

血と感激

久留貞次郎

潮

中村 耕造

自己發展

難波 勝二

現實の壓迫

野添 可吉

韓國をいかにすべき

鹽谷 信次

伊藤公の換氣法

春日直之助

○一部二年卓風會 (究辯會より發展擴張せしもの)

卓風會大會 一月廿二日 於講堂

開 會 の 辭

委員 馬 杉 秀

知而不言不忠也

委員 久留貞次郎

退 步 觀

委員 春日直之助

未だ生れざる一日に似たり 委員 上畑 梯二

第一回例会 一月二十七日

人 間

市田 勝道

吾人の立場

中村 耕造

嘲 笑 觀

岡 田 某

來るべき日を憶ふ

松田 好徳

思 ひ 出

中俣 正男

隣を愛せよ而も汝の牆を撤する勿れ

奥 献二

擬國會再興の議

大場 金治郎

覺醒の意義

淺野安吉

卓風會演說會 五月十四日

第二回例會 二月五日

英雄とは何ぞや

鏡 一 以

犠 牲

山 口 茂

口

奥 獻 二

コンバート

入江眞太郎

武士道の擴充

松井孝長

個人主義難

馬 杉 秀

番外として

酒井喜太郎

衝込むべし

春日直之助

今 日

上畑悌二

明日の野球試合應援の方法と主義

久留貞次郎

決勝奇謀は至誠より生ず

馬 杉 秀

卓風會茶話會 二月二十六日

官民の憲政の遣ひぶり

春日直之助

此の年はいはゞ第一期より第二期への轉回の頂點に立つ年である。第一期後期と劃せらるゝ過渡の時代の持つ古きもの、殘滓は、茲に新しき精神によつて取り換へられんとし、その準備の着々として進められたのが此の年であつた。成程表面的には部の事業は前年度に比して却つて萎縮の傾向をさへ見せてゐる。だがそれは内部に於ける新舊精神新舊勢力の相剋の結果であつた。此の場合、舊精神舊勢力とは、謂はゞ之までのありきたりの考へ方を持つて演說討論の振起を願はんとした一派であり、大體に於いて當時三年部員によつて代表せらるゝものである。従つてそれは當時學生辯論の全國的な向上發展の大勢に對しては、何ら保守的立場をとるものでなく、矢張り進んでその大勢に副はんとしたものであつた。故に我が三高演說討論部をして、積極的な對校外進出の第一

歩を踏まされたのも、彼等と同じ心を有した先人の手によつてであつた。だがそれは既に單に時の流に乗つたに過ぎずして、其の間に積極的な意思が藏せられたのではなかつた。斯うした状態の下に明治四十三年度を迎へて、究辯會(後卓風會と稱す)——次期に於て詳説せん——一派によつて代表せらるゝ新勢力を、兎も角も表面的には包含統一して、當時理事たちによる部の事業が行はれたのである。かゝる支配的地位になつて尙劣勢なる勢力によつて行はれる事業は、勢、形式的ならざるを得ない。此年演說會を開くこと凡て三度、而もそれは毎回相當な盛況を呈してゐるにもかゝはらず、屢々演說會を開く事も得ざりし所に、複雑なる當時の部況を語るものがある

演說討論部會

第一回演說會は十月三十日午後六時より講堂に於て開かれてゐる。『暗雲空を蔽ひて比叡おろし寒かりしかど、熱心なる吾三高の健兒は、勇士の健辯を聽かんとつめかけつめかけ開會の時刻には早や三百を以て算せられ、満場立錫の餘地だになし蓋し未曾有の盛會なり。中央にかゝれる大洋燈は、壇上の大菊花と相對して一しほの風趣を添ふ。山内部長起て先づ、開會の辭をかねて所感を述べられ、拍手湧くが如き裡に降壇せらる。直ちに引き續き、演說にうつる。』此日岡村法學博士『道德上に於ける新舊思想の衝突』と題する講演ありたる他、會員の演說七つ。その内一部二年甲究辯會員のもの『弱きもの、汝の名は女なり』久留貞次郎氏、『想像』上畑悌二氏及び高松齡吉氏の外國語演說あり、その進出振り見るべく、尙他に赤澤仲次氏『旅順要塞談』と題して自ら砲兵大尉とし

て出征せられたる體驗を語られ多大の感興を興へられたる、生ける事實を基とせる説話體演説の常に生々たるに注目せらる。最後に此日田村明一氏の話ある筈なりしも時間の都合にて中止せられてゐるが、此の事は第二回演説會に於いて出演希望者多數に上り、遂に演説時間の制限を行ひて尙ほ當日凡ての演説をなすあたはざりしと共に、當時漸く旺とされる一般的辯論熱の程を示すものであり、而もその功績は大部分究辯會に歸せらるべきものとせられねばならない。

第二回演説會は二月十二日午後一時半より開かれてゐる。此日三部の方より二つの演説を見たが、而もその各々或は名和克巳氏『愛』と題して慈愛友愛戀愛につきて述べ、辯に高低抑揚ありてよく聴衆をチャームし、又小酒井光治氏『ハレイ彗星と出現當時の社會現象』と題したるは、當時恰かも東の空ハレイ彗星の出現を騒れたる時にして、その昔發見當時の社會現象を述べられ、其の内容豊富滑稽趣味ありて面白かりきと云ふなど、此日總じて登壇するもの十名、皆相當の技倆と内容を備へて聞きごたへあるもの少からざりしといふ。當時に於ける辯論の普及發達見るべきものがあつた。而も當年演説部に於て聞く演説會は、此の二の他、四十三年春四五月の候に、名士來賓を招いて演説大會の催しありしことを仄かに聞くのみ。而るに一方究辯會の旺なるあり、聽て卓風會と改まりて益々旺なるあり、而も此の間聞く所によれば、我部理事の卓風會員より無能呼ばはりされし事のありたるなど、校内に勃々たる辯論熱の擡頭を控えて尙伸び悩み居りしが如き當年演説部の狀況がうかがはれるのである。

第二期

(明治四十三年より大正十年に至る)

序

第二期概観 その第一期と區別せられる所は既に述べし如く、或は素樸的と反省的との如くであり、又非近代的と近代的との如くである。即ち演説なるものに對して一層の反省が加へられ、その有用さが實利的具體的な見地より、更に一層反省せられた見地よりして認められたとも云ふべく、一般には演説に對する認識が甚しく高まつて従来の孤立的、獨善的な練習方法の上に、更に集團的、合評的な練習方法が行はれるに至り、内にありては級中心の有志演説會が旺に行はれて演説討論部隆盛の原動力をなすあり、外にあつては遠く校外の各校に代表辯士を送るあり、又弘く他校よりも辯士を招聘して演説部大會の盛大に行はれるなど、漸くに演説の事が、雄辯術として一の競技化せられるに到つて、部の活動が從來とはその態容全く一變して、謂はゞ非近代的より近代的へと躍進を遂げたのである。

だがかゝる躍進は、實にその根底に於いて當時社會・青年の思想的變遷に負ふべきものであつて、殊に此の第二期が次の第三期と區別せられる最大の理由は、實に思想的傾向そのものの變遷に存するのである。端的に云へば『政治より社會へ』の青年の關心對象の變遷が此の兩期を區別する最大の表徴なのであつて、此事は青年思索の

内容が夢想的浪漫的より一步現實に近づいたことを意味する、擬國會が大正三年度以來連年行はれて、その大正十年度以後之を見ざるに至つたことは正に此の間の事情を語るものである。扱て過ぐる第一期は思想的に見て何等纏まれるものを見出さないとはいへば述べた所であるが、その後期たる過渡時代に於いて見られた或る程度の社會思想の困亂は日露戰役の國民的興奮と相俟つて、一般に社會の言論を活潑ならしめ、就中政治的關心の昂騰は青年の未來に對する希望を明るくし、苟しくも將來社會の一角に首唱する程の者として、一の主張抱負のない筈はない、大ひに之を世に舒べて是非を正し、斷じて實行に移すべきである。不言實行といふが如きは呪ふべき舊思想である』といふので大ひに辯論の修練が行はれ、謂はゞ立身出世の要具として、而も比較的內省された信念の下に演説のことが考へられ行はれたのである。

社會的政治的に見て、此期は日露戰勝の後をうけて、幸徳一派の大逆事件、憲政擁護運動、世界大戰等と注目すべき大事件を含み、總て左翼思想の發達を見る迄我が日本が前代にもまして内に外に大躍進を遂げた時であり、文藝哲學思潮的に見て自然主義漸く衰へ所謂後期自然派より人道主義の作品が一層多く讀まれるに至り、一方ニーチェの紹介に始まつた個人主義の理念はやがてオイケン・ベルグソン等の直觀論的的人生觀に轉じ、次で新カント派の理想派哲學の隆盛を致したのが當期の大勢であつた。而して我が三高の青年學生の之等思潮との關係は或は併行的であり或は反撥的であつたが、我演説討論部が、之等校内の動向に對して概して指導的であり、且つ常に校内輿論のよき代表であつたことは此期に於ける一大特色とせらるべきであり、又かゝる状態を許した社

會情勢にこそ當時此部の隆盛を致した原因が存するのである。今はそれらの詳細を省いて、唯、此期を第一期と同じく、前中後の三期に分ち、各々について概言するであらう。即ち前期は明治四十三年より大正三年に至る滿四年間、中期は其の後の四年間であり後期はその殘餘の三年餘である。明治四十三年十一月二十五日折田校長引退せられて酒井校長の來任せられるあり、此の校長交代に際して吾が神陵『自由』の校風の積極的に確立せられたるを見る。蓋し第一期第二期を分つ好箇の目標である。此意味に於て、第二期は第一期に於て涵養せられた『自由』の校風がよくその光輝を發揚した時代とも云ひ得るのであつて、第二期前期はその躍進尤も華かなりし時であり、中期は平穩無事前期の後を承けついで進んだ時であり、後期は漸くに迫れる思想的嵐の息吹のかすか乍らに感ぜられた過渡時代である。以下各期について記述するであらう。

第一前期 (明治四十三年より大正三年に至る)

概観 第二期の活動は卓風會の勃興に始まり、而して茲に云ふ前期は以下水曜・縦横・悠緊・稜々・四明・侃諤・双松・鶴鳴の諸會の活動に終始した明治末年より大正の初頭に至る四年間を云ふ。而して前に卓風會旺なりし明治四十三年度を除き、後に双松會諸氏が部の中心をなせし大正四年度を斥けし所以は、既述の如く明治四十三年度は新舊兩勢力の相尅下にあつて部の態勢今一つ伸び悩みを感じしときであり、而して大正四年度は既に中興建設の業成つて、恰も既に一度進展の限度に達したものを後に傳へて漸く定型化してゆく一步を踏み出したと見られる年であつて、共に目まぐるしき變遷を遂げた當期四年間の形勢とは聊か異なるものを見るが故である。尙詳しくは各年度に於て述べることにする。

此四年間は謂はゞ其後に於ける我部活動發展の基礎を茲に確立せし時であつて、校風宣言の演説の行はれたること、一高との聯合演説會の開催せられたること、擬國會の再び開かれるに至つたこと等がその尤なるものとして挙げられる。即ち、校風宣言の演説は所謂三高の『自由』の校風が漸く具體的現實的に校風として認識せられ、而も之に幾分の反省が加へられてその顯揚を意識するに至りしことのあらはれであり、一高との聯合演説會の開催は我部對外活動の新なる發展を示すものであり、又擬國會の復興は此の第二期を通じて見られる當時青年學生の政治的關心が此期に於て如何に昂まりしかを語るものである。而して之等の情勢氣運は、或は級辯論會の盛況

を致し、又その旺なる流行の中に於て醸成せられたものと見るべく、茲に絢爛たる辯論の黄金時代を現出したのである。かくて當第二期の序幕をなすものは、實に卓風會一派による校風振作、辯論習練の運動であつたと云ふべく、以下水曜・縦横・悠緊・稜々・四明・侃諤・双松・鶴鳴の諸會の我が辯論部史上に占める地位は極めて高く評價さるべきこととなる。

扨て既に述べし如く、吾が三高の校風については由來定まれるものなく、唯、折田校長の無干渉放任の教育方針は學校全體に極めて暢びやかなる感じを與へ各人その好む所を致すに役立ちし状態にありしものであつて、時偶ま明治四十年前後より運動部一段の活躍の遂げられるに際し他校と接觸するに及んで、自然に校風の意識は具體化せられたのであるが、尙ほ極めて漠然たるものに過ぎなかつたのである。然るとき社會にあつては戦捷の影響は財界の好況を伴ひ、やがて自然主義の流行を促して青年學生の中にも或は時流に媚び浮薄の徒少からざるに至つて、我三高に於ても一部デカタンの群を見、遂に所謂硬派をして校風の墮落を嘆せしめたのであつた。かゝるとき、畏くも戊申の聖旨を畏みて、戦捷日本の躍進に燃ゆるが如き希望を以て新しく神陵の庭に降りたてたる純情の若人たちが、或は放逸の校風を憂ひ或は鐵拳の嵐に嫌惡を感じて、美しき自然に圍まれた、憧れの三高を今は過ぎにし夢と感じたことは又考へられる所である。即ち卓風會の組織は實にかゝる機運の結晶として『極端なる自由の裡に養はれたる優柔放逸の生活』『個人主義に影響せられて弛緩したる三高生活』を振作し挽回せんとて校風の振起統一を最高目標として行はれたのであつた。而も當時學生辯論熱勃興の波に乗つて、『新時代の武器

である言論によつて』之を遂行せんとして、先づ辯論習練の目的を以て組織せられたのが當時一部一年甲組の有志よりなる究辯會であつた(明治四十二年六月)。次いで、之が四十三年の春を迎へて堂々校風の振作を以て目的とし、廣く校内一般に呼びかけて卓風會と改組したのである。かくて卓風會々員の主力は殆んどすべて演說部員として終始演壇を賑はし、且つ又四十四年度に至つては之等卓風會員は我が演說部に指導的地位を占めて、神陵辯論界に歴史的な一期を劃したのであつた。その趣に多少の異りは見られるが、水曜・縦横・悠緊・稜々・四明・侃諤・双松・鶴鳴の諸會、又部と一體をなして活躍し、茲に華々しき演說部の校内地位をより高めたのであつた。今は、各會について要目を左に表記するにとどめ、詳しくは各年度の項に譲つて當期概觀の筆を擱くこととする。

組織年月	會 員 範 圍	主要メンバー
究 辯 會	四十二年六月	上畑・久留・馬杉・春日・奥
卓 風 會	四十三年二月	右に同じ
水 曜 會	四十三年春	五十嵐・入江・島本・武田
縦 横 會	四十三年秋	岸井・岸田・棚橋・山名・麻生・行宗・原田
悠 緊 會	元年秋	木村・今井・高平・小中・末川
稜 々 會	二年三月	武内・武田・堂本・松尾・明比・山田
四 明 會	二年五月頃	悠緊・稜々二會の合併せしもの

侃 諤 會	元年秋	四年卒業一部	赤松・汐見・安部・伊藤・勝本・高橋・津島・藤音・原田
双 松 會			
鶴 鳴 會	不詳	五年卒業一部	坂本

明治四十四年度 明治四十三年九月—四十四年八月

部 長	山 内 晉 卿
理 事	上 畑 梯 二
	橘 勉
	中 堀 理

晚 鐘	松 田 好 徳
雜 感	山 内 部 長

人として、全き人として、眞の人として

現代青年の思想と偉人の研究	久留貞次郎
時代思想の研究	原田光三郎
	村上元紀

○校風の演説 九月十一日宣誓式後

久留貞次郎

○新生歓迎演説會 十一月十二日午後六時

開 會 の 辭	上 畑 理 事
空 想 趣 味	山 名 義 鶴
天高きか馬肥えたるか	末 川 博

敢て問ふ善とは何ぞや 麻生 久
吾輩の警告 上林義隆
自ら狭小ならんとするか 新谷壽三

十一時閉會

○第二回演說會 一月八日午後六時 於講堂

開會の辭 上畑理事
道徳の權威 中村光四郎
パトリオット 原田福五郎
國際的經濟競争 前川教授
人生觀上積極的個人主義 植田甲一
英傑の心膽 村上元紀
人生觀 山内部長
一月廿三日 行宗貞隆

十時半閉會

○演說部大會 五月十三日午後一時半

於京都市會議事堂

開會の辭 上畑理事
教育者と被教育者 岸井壽郎
人道の發展 同志社 沖田節治
悲壯にして而も光輝あるデカダンの殉難 新谷壽三

我國に於ける農工商併立主義と國民の自覺

神戸高商 藤原米造

民族の指導者を想ふ

久留貞次郎

故郷は何處

京大 佐藤繁彦

俠とは何ぞ

文學博士 谷本 富

○辯士派遣

京都府教育會主催學生大演說會(十一月五日)へ

『死は彼の勝利なりき』

久留貞次郎

京華日報社主催市内學生演說會(十一月二十三日)へ

演說會(一月三十日)へ

『猪勇か豚智か』

上畑 梯二

『天籟の聲』

久留貞次郎

大阪高商主催關西學生聯合演說會(二月十一日)へ

渡邊 彌幸

○一部一年縱橫會

毎金曜日演說練習會を開き山名・麻生・岸井等諸氏が

活躍した。

同志社大會(十二月三日)へ

上林 義隆

新谷 壽三

村上 元紀

『一片男子の氣』

上畑 梯二

神戸高商演說大會(一月廿三日)へ

久留貞次郎

『信仰の根底』

久留貞次郎

名古屋醫專・八高・名古屋高工・三校共同主催學生大
此年度は注目すべき幾多の事實を持つ。宣誓式後の校風演說・演說會後の菓子分配の廢止・折田校長の引退・演
說部大會の校外進出及び辯士派遣の増加等である。此年は謂はゞ、此の數年來の演說勃興の機運が、校風振起
の運動と結びついて、共に一の發展段階に到達した時であつて、前記の諸事實は皆このことと多大の關聯を有つ
ものである。以下項を分ちて細說する。

校風の問題

先づ第一に、校風の演說が宣誓式後特に新入生に對して行はれたことが傳へられてゐる。之れ後年の所謂校風
宣言演說の略々最初のものと思われる所のものであつて、卓風會創設者の一人にして我部の錚々たる久留貞次郎

氏によつて行はれてゐる。その果して、いづれの催なるやにつきては、未だ之を明にし得ないのであるが、少くとも之は卓風會一派の校風運動の一結果であり、且つ一手段であつたことは容易に想像せられる所であり、而して後年校風宣言演説のことが専ら我演説部に於て擔當せられてゐる事情に徴するも、このことは、我部が既に實質的に校内輿論の積極的指導地位を占むるに至れることを示すものと云ひ得るのである。

十一月二十五日折田校長引退せられて校長更迭のことあり、生徒は一日講堂に會して新舊校長の送迎會を催してゐる。此日、酒井校長は就任の辭に於て、言たま／＼校風のことには及ばれ、一段の緊張を要望せられるあり、茲に於て、自由に育ち、今こそ自由の校風を意識せし我等の先人たちは、新校長の干涉方針を想ひていたく動搖を感ずるあり、或は折田校長の膝下に泣き伏して、その留任せられんことを懇願するあり、又或は新校長に對して我等が自由の校風の尊重すべきを要望して、會は唯ならぬ緊張を呈せしと云ふ。かくて、校風の意識は各人の間に徹底して、茲に自由の校風は一度び積極的な意義をもつに到つたのである。此後『自由』の意識は、様々の具體問題に會して、よく三高全體の指導精神となり三高生活の向上に裨益したのである。

演説會

演説會は此の年三度に互つて行はれ、他に時の一部一年各級の有志を以て組織せられた縦横會及び一部二年の組織する水曜會の演説會が折々催されしことが傳へられてゐる。扱、部自體の演説會については、既に十年以來の慣行たりし演説會後の菓子分配を『演説を冒瀆するものである』として、斷然廢止せられたること、五月の大會

が市の議事堂に進出して行はれたことが注目せられ、且つ、一般に演説熱極めて旺盛であつて、菓子なくして聴衆場に満ち、各會の會合も亦大ひに賑つたといふことである。今少しく其の模様を覗ふに、第一回演説會は新入生歓迎演説會とせられて十一月十二日に開催せられて居る。『上畑理事就任の挨拶と將來の方針を述べて開會を宣するや、拍手の中に第一席』かくて登壇するもの十名。中にも山内先生は『先づ十年餘り引續き部長たり、而して又本年も部長たる光榮を有するを謝すと、之を冒頭に、本月五日、議事堂に催されたる、東西學生演説會に本校より久留君出演して好果を收めしは所謂四方に使用して君命を辱めざるものなり、されど世評によれば東京方に比して京都は見劣りする由、尙一層の奮勵を要す、と夫れより辯は進んで修養に及び精神問題より修身に及び滔々數千言。快辯縱横、或は春風の洋々たる、或は怒濤の澎湃たる、深酷なる音は愈々出でて愈人心を魅し聽者をして舌技の絶妙を思はしめぬ』。久留貞次郎氏は『人として全き人として眞の人として』と題してイブセンの作を借りて飽まで奮闘努力すること人生の意義なれと、熱烈火の如き辯を振はれた。一月二十八日に開かれた第二回例會に於ては、原田福五郎氏『パトリオット』と題して大逆事件の出でたるを慷慨悲痛し、眞正にして且偉大なるパトリオットの例證としてウイリアム・ピット並に維新の志士を挙げられたると、植田甲一氏が『人生觀上積極的個人主義』と題してニーチエの思想を主張せられたるとが夫々の觀點に於て注目せられる。尙ほこの日前川教授は『國際的經濟競争』と題して過剩物資の海外投資について語られ、山内部長は『人生觀』とて『例の輕快にして諧謔に富める辯に』夫々聴衆に多大の教訓をあたへられた。

『眼に青葉山不如歸初鰓。初裕の袂も輕き五月十三日、京都市會議事堂で演説部大會を開いた。何分公開の演説會は四五年ぶりなのでドヂ許り踏んで仕事は抄取らず、隨分轉手古舞をやつた揚句、それでも有難いもので、當日は一時半に開會の辭を述ぶる事が出來た。且つ京都帝國大學、神戸高商、同志社、特に谷本博士が一片の俠氣を以て出演を諾せられたので、さしにも廣い會場も、立錫の餘地なき程の千何百といふ聽衆を得たのは光榮とする所である』。上畑理事開會の辭を述べて『昨秋、東京京都聯合の學生演説會をこの市會議事堂で開かるゝや我京都側は散々の敗北をとつた。是れが忘れ難き深き記憶となつて以來吾人は大ひに覺悟する所があつた』とて、此の大會を開くに至りし一機縁を述べられた。此日、我校よりは一部一年甲岸井壽郎、二年乙新谷壽三、一部三年甲久留貞次郎の三氏夫々得意の辯舌を振るはれた。岸井氏は『青年が唯一の理想とし、規矩として、直進邁往するを得る大識見を心理に根ざさしむる眞の教育』を叫んで大人格教育者の出現を望まれ、新谷氏は『悲壯にして而も光輝あるデカダンの殉難』と題して『自然に敗れて、而もいつまでも自然の壓迫に苦しむ能はぬは意義ある者の常である。彼等は遂に自己の外、世界は何者にもあらずと考へ、かのデカダンの生活に入つた。けれども彼等こそ、前途遙かに一點火光を見る精神に生くる生活や、神祕象徴の文學と現在との間に横たはる溝渠に橋桁となり、すさびにすさべる生涯を送つてその局は悲壯なる死であつた彼等も、不識の間に新文明の媒介となりしものとすれば、その最後は實に光輝ある殉難といふべく、又以て瞑すべきである』とて異色ある演説を試みられ、最後に久留氏は『民族の指導者を想ふ』と題して鑛山坑夫のことより説きをこして遂に大人格ある民族指導者

を待つこと切なる所以を論じて、その理想派的、人道主義的なる主張の中に、かすか乍らも社會改善の要を説かれたるなど、或ひは、當時青年達がイブセンやトルストイ又ニーチエ等を耽讀して、何を感じ、何を思ひつゝあつたかをうかゞはしめるものである。尙此日最後に登壇せられたる谷本博士は『俠とは何ぞ』と題して、近來稀なる大雄辯を揮はれたといふことである。

此年辯士派遣の甚だ多きは、實に關西學生辯論界の發展を示すものであると共に、又我三高演説部の斯界に於ける活躍の程を示すものであり、當時まだ創刊間もなき雑誌『雄辯』は關西の學生雄辯家として我が上畑久留の二氏を紹介してゐるのである。かくて當時に於ては辯論のことは、寧ろ術として流行したのであつて、その内容的思素は未だ比較的輕視せられてゐたものの如く、此意味に於ては當年は演説道尤も華やかなりし時代とも云へるのである。

明治四十五年度 明治四十四年九月—四十五年七月—大正元年八月

部長	山内晉卿
理事	波邊彌幸
	岡谷辰治
	林雄三

○校風演説會 九月學年始宣誓式後

校風の宣言

入江眞太郎

一高先輩 青木得三

○演説會 十月二十六日 於長野縣松本中學校

詳細不明

演説部大會 四月十二日午後一時 於生徒控所

○三高一高聯合演説會 四月七日夜 於一高嚶鳴堂

自大衿高の一念

選舉權問題と複數選舉法 五十嵐明

新しき生活の曙光

狹男 子 窪田篤太郎

生の力

醒めたるもの、群 佛教大學 法山隆文

逸題

太平洋の覇權 大阪高商 山田安三郎

遠來の客を迎ふ

柳暗花明 大高商 土屋四郎

背教者の孤影

我友は何處 同志社 緒方庸雄

榮譽ある孤立

文明の破産 高藏智海

現時文壇に對する吾人の希望

國破れて山河あり 京大 上畑悌二

一高先輩 宮崎龍介

所謂生活難に就て 京大教授 神戶博士

此年部の事業として記録せられる所は極めて寥々たるものであるが、一高との聯合演説會が、主として二年部員(縦横會の人々)によつて、創始せられたことは部史上特筆さるべきことであり、又四十四年十月全校演習旅行

を試みて信州に遊びし時にあたつて、演説部員の數名は一夕松本中學校に演説會を催して、上林義隆氏司會者を勤め、入江眞太郎・武田泰郎等の諸氏夫々雄辯を揮ひしことが傳へらるゝも、俱に記録を缺きて、その詳細を知り得ない。唯前者につきては其の他周囲の事情よりして若干の敘述をなし得る。即ち當時に於ては三高一高の對校試合は唯々野球に於て見られしのみであつて、その兩校對抗意識の熾烈なる、全校の關心は唯々野球にのみ集中せられたと云ふも敢て過言ならざるべく、かゝる時にあたつて、兩校對抗の一翼として文化方面を代表して特に辯論の聯合大會の開催を見しことは、實に當時辯論熱の如何に旺なりしかを語るものであり、又かゝる單に二校のみの聯合演説會の成立を見しことは、後年の辯論部活動の一形式を茲に開けるものと云ふべく、尙、質的にも、此の聯合演説會の創始は其の後の演説部の歴史に甚大なる影響を有するのである。

さは云へ、此年度は、一般に前年度の反動とも云ふべく、唯その沈滞の中にやがて新しき理念の下に興れる縦横會が校風の振起と辯論思想の鍊磨に動き始めた時であつた。再言するに、當時一部三年甲の有志によつて、夙に組織せられ在りし水曜會は、辯論練習に熱心なる努力ありしにも拘らず、既に一度び振起確立せられたる、校風の問題に關しては、之を言論の對象として云爲すべく餘りにも温健であつて、唯すべてが前年度の踏襲であつたといふべく、一方當時一部二年の有志はその一年の時より縦横會と稱する會合を持つて、頻に新思想を語り、人生觀を追求するに努めた。かくして、彼等が最も好みて耽讀せしものは既に述べし如く、トルストイを尤とし、又イブセン、ツルゲネーフ等の作物であつて、そこに從來の正義觀念とは自ら異なるものの醸成せられて、或ひ

は人間派とも云ふべき一の進歩的色彩の加つたことは蓋し首肯される所である。かゝる縦横會の旗幟は彼の鐵拳制裁事件(四十四年十一月)によつて明にせられた。即ち一部硬派によつて加へられた軟派分子に對する私刑は、果然武斷派の專横として縦横會員の蹶起を促し、茲に生徒大會の開催となり、その『人道主義的信念に立脚して、個人の權威を認め新自己を建設して舊自己を破壊せんとする自由の主張は、血痕斑々たるグラウンドの邊り朱唇色褪する學友の慘を見て痛哭する義血俠血の同情心の發露と共に、場内一千の學友の拍手を以て迎へられ頑冥固陋なる守舊派をして事理のある處を悟らしめたのであつた。かくて縦横會の活動はその後諸會の興る温床を作り、夫々部史を飾らんとしたのであつた。

大正二年度 大正元年九月—二年八月

部長 山内晉卿
理事 行宗貞隆

前田威成
緒方洪平

○校風演說會 九月十一日宣誓式後

校風の宣言

行宗貞隆

開會之辭

戸倉忠能

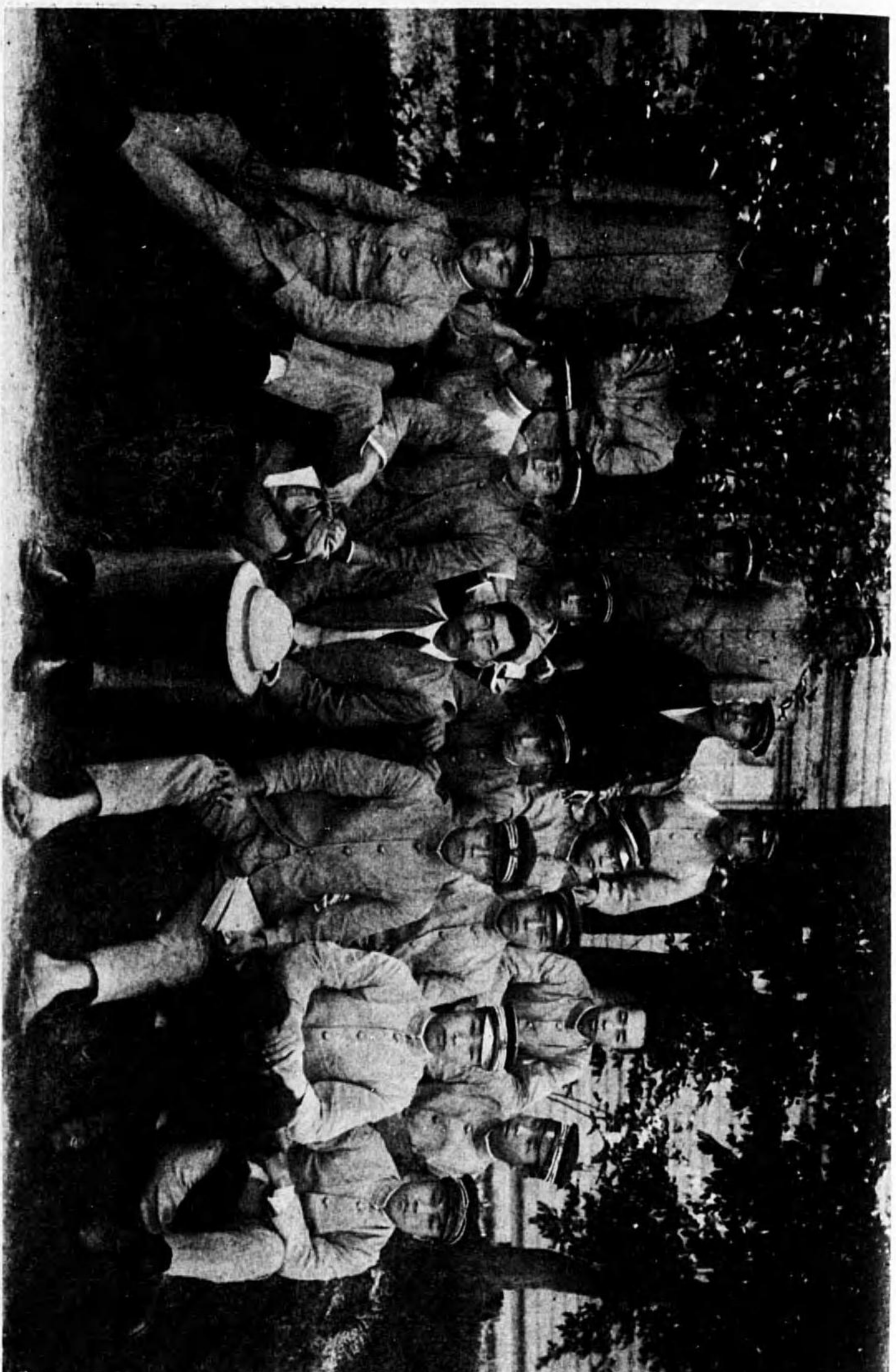
所感

伊藤清

○一年級演說會 十月九日

新時代の要求

原田健



會 曜 水 二



眞鶴別荘月五年二正六

性格之人

戸倉忠能

人道主義

一年級 津島純平

失 題

荒川晉吉

○悠緊會小會 十月十六日

木村藤造

壁

高橋正男

井伊直弼を論ず

小中公毅

○縦横會大會 十月十二日

亞細亞の孤島

吉田三雄

自由とは何ぞや

末川博

ロシアに生れたるトルストイと日本に生れたる乃木

覺醒に就て

村田茂隆

大將

麻生久

偶 感

三年級 山名義鶴

自殺に就て

大西文一

○第一回例會 十一月九日午後一時 於講堂

前田理事

風 塵 語

棚橋小虎

開會の辭

村田茂隆

秋 の 思

手島倉太郎

御出演を希ふ

戸倉忠能

眞意氣の高潮

岸田幸雄

嵯峨野の美

今井梅次郎

強き性格と自由思想家

新田左逸

國滅びて山河あり

木村藤造

怒 號

岸井壽郎

井伊大老論

神明萬里

悲哀と嚴肅

増田外十郎

近藤勇の殺人劍を懐ふ

高平隆雄

時代精神の反面

行宗貞隆

没落の權威

第一前期

反目の調停者 原田光三郎
 革新の内容 岸田幸雄
 平 凡 大西文一
 閉會の辭 行宗理事

○帝大佐藤丑次郎教授講演會 十一月三十日 於講堂
 演題 『政黨を論じ獨逸社會民主黨に及ぶ』

○悠緊會第一回演說會 一月二日

新春の辭 佐倉重夫
 冬枯の野に春意動く 今井梅次郎
 日本の將來 黒田茂
 國士馬場辰猪君を思ふ 木村藤造
 輿論の價值 小中弘毅
 言と論 末川博
 所 感 縱横會 行宗貞隆

○演說部大會 二月十六日午後六時 於三條青年會館

一〇八

開會の辭 行宗理事
 何ぞ本に歸らざる 本校 今井梅次郎
 新人の努力 佛教大學 高橋隆泰
 識者の勉 大阪高商 山田安三郎
 吾等青年の歌へる 本校 麻生久
 自由の路 八高 深井正男
 挨 拶 本校 山内部長
 心に懸る峯の白雲 同志社 淺野惠二
 逆境の政治家 帝大 大木俊輔
 指導者 本校 岸田幸雄
 現代青年の哀愁 本校 岸井壽郎
 誠！ 斷！ 帝大 上畑悌二
 法制教育の改善 京大教授 市村光惠
 法學博士
 ○稜々會大會 武内了温
 發會の辭

祝 詞

縱横會 棚橋小虎

細長主義を取れ 松尾直樹

稜々梅花馥郁開く 宮城信雅

失 題 唐松治郎

呪はれたる侏儒の群 堂本佐太郎

揚げられたる赤旗 内藤憲二

微 笑 武田顯龍

強 者 明比伍一

閃めく寒盲 廣兼來藏

偶 感 加藤謙

吾人の宿意 村田茂隆

社會制裁の眞價 長岡仙丘

初 舞 臺 小原久直

所 感 芥寅吉

大向より 小川昇

(Le qui se passe)

白根俊介

爆 裂 彈 平置奎治

憂ふべき現象 岡 順正

一學生の抱ける吾國國家の外交策 井堂重澄

青 い 酒 館野一夫

偶 感 大原一誠

○粵 堂 會 四月十二日 於洛東知恩院

○稜々會第二回大會 四月二十二日

月末關係につきて 井堂重澄

醒めよ夢より 長岡仙丘

品性の權威 内藤憲二

失 題 芥寅吉

逝く春の悲しみ 小川昇

おぼろ月 武内了温

徳川家光を論ず 村田茂隆

野邊の董	宮城信雅	萌え出する縁	廣兼來藏
偶感	小原久直	吾人の覺悟	明比伍一
火影	堂本佐太郎	○悠緊會稜々會主催全校聯合大會	四月廿五日
自由の享樂	松尾直樹	詳細不明	

明治四十五年七月三十日 天皇陛下崩御あらせられ、闔國の赤子は天に號び地に泣いて此不世出の聖天子と永訣するの悲哀に沈んだ。かくて、明治は大正となつて、諒闇の悲みの中にも新時代の光を浴びて縦横會の諸氏は我が演說部の第一線に立ち進んだのである。

此年、記録される演說會は大概各會によつて開かれたるものであつて、直接部の催にかゝるものは、十一月の例會と五月の演說部大會と、佐藤井次郎博士の講演ありしとの三つに過ぎないが、之等各會は、實に各級別の辯論部であつて部そのものは、唯々それ等各會の包括團體として存在してゐたとも云ひ得べく、全體として見るとき、此年部の活動は實質的には極めて豊富であつたのである。即ち、四十五年秋の候、悠緊會は時の二年級の諸氏によつて設立され、一年級の諸氏又侃譎會を興して、盛んに演說の練習を行ひ、演說部理事はよく之等諸會を斡旋して、部の發展に盡力せられたのである。

九月十三日、乃木大將の死は羣々の世論を捲き起して、それを罵倒した谷本博士の如きは夜なく家に投石を受けるといふ騒ぎに、縦横會の諸氏は相會して之が批判を行つたことが傳へられてゐる。十月十二日の縦横會大

會に於ては、實に此問題が主として語られたのであつて、其の意見は殆んど將軍の自殺を時代遅れであるとしてゐることは蓋し注目すべく、中に、麻生久氏が『將軍の死は時代遅れであらうが、あの時代、あの精神に育てられ、あの思想を所有してゐる者としては、將軍の行爲は人生に對する忠實と眞摯を表してゐるものである』とて、その思想、人生に對する忠實性と眞摯性において、トルストイと共通する所があると述べられたるは當時青年の生活態度の一面を語るものであらう。尙此の日、一年級の津島純平氏が『人道主義』と題して眞面目なる演說をなされしことも特記せらるべきである。

十一月九日に開かれたる第一回例會は幾多の名演說家を數へてゐる。戸倉忠能氏は『嵯峨野の美』と題して、歴史と詩趣の嵯峨野を描いて獨特の文學演說を試み、高平氏は優雅なる快辯に聽衆を恍惚の境に導き、木村藤造氏は『井伊大老』を論じて『風丰堂々、音吐朗々、殆んど完璧に近く』、神明氏は莊重眞摯の辯よく近藤勇の勇氣熱誠を論じて『その辛辣凄愴なる殺人劍はやがて大正時代の政界の武器とせざるべからず』と結ばれ、原田光三郎氏は莊嚴の風丰透徹せる音聲を以て大正青年の至誠事にあたるべきを叫ぶ。岸田氏又『新らしき青年は桃源夢裡に惰眠を貪るを許さず、革新の眼を開いて努力の道を歩まざるべからず』と絢爛花の如く而も汪洋として生氣溢刺たる辯を振はれ、孰れも新時代への努力奮闘を語られたが、最後に大西文一氏が『平凡』と題して「人に偉なりとせらるゝが何ぞや、吾人は限りある世界に名譽を希はんより寧ろ限りなき世界に往かん事を思ふ」と述べられたるは、當時に於ては異色ある思想であると云はねばならない。

十一月三十日、最近に獨逸留學より歸朝せられた京大の佐藤丑次郎教授を招いて、久し振りに招待講演が行はれてゐる。教授は『政黨を論じ獨逸社會民主黨に及ぶ』と題して、要するに、政黨の立憲政治上に於ける意義を説き、獨逸社會民主黨の急激に發達せし次第を巨細に述べて、社會主義の探るべく、又斥くべき點を論ぜられた。此の演説は二月大會に於ける市村博士の講演と共に我校友たちに影響する所極めて多かりしもの如く、或は其の後の政治的關心の昂騰とある關聯を有するものである。

大正二年の春は、全國、憲政への異常なる關心の内に、明けた。即ち元年十二月五日、第二次西園寺内閣は朝軍増師問題に躓きて、閣下に辭表を捧呈し、爾後後繼内閣の銓衡甚だ行惱み、遂に十二月廿一日に至つて、桂太郎は所謂袞龍の袖に匿れ詔勅を濫奏して、その組閣を完成したが、今や大正の聖代に閥族勢力を掃蕩して、眞正立憲政治の確立を期待せし輿論人心は、桂の出所進退を甚だ陋として、茲に憲政擁護會は起され、世の視聽は一に集つて議政壇上の動きにあつたのである。かゝる政治季節の最中に催されたる演説會が國家、政治、輿論にその言論の對象を得たるは蓋し當然のことであつた。我々は、一月二日の悠緊會大會、二月十六日の演説部大會にその實際を見るのであつて、時恰かも言論高調のとき、何れも非常なる盛況を以て開かれてゐる。

事は、聊か私的に屬するも、此の二月下旬原敬等が薩岡山本内閣と妥協して、犬養、尾崎、岡崎等が斷然原敬と袂を分つに到りしとき、縱横會の有志は熱烈な勸告狀を認め之等三人に宛郵送し、護憲のため犬養、尾崎、岡崎三人の提携を力説した所が、これに對して、犬養氏は鄭重なる返事を寄越したことが傳へられてゐる。我部

内外に木堂會や、學堂會が組織せられたのは、斯うした機縁に基くのであつて、中にも學堂會は、四月十二日知恩院に尾崎行雄氏を迎へて、その講演を聞き、且つ甘藷と萩の餅を喰つて薩長閥族の打倒を諷して、意氣軒昂なるものがあつたと云ふ。

此の憲政擁護運動は不測の突發事によつて又新たな校風擁護の運動を惹起した。その發端は、一夜三條青年會館で護憲派の政談演説會のありし後、狂熱昂奮せる民衆は閥の聲を擧げて示威行列に轉じ、遂に騷擾に及んで警官隊とも衝突するに到つたが、この民衆の中に三高生の若干加り居りし故を以て、翌朝刑事は、三高寄宿舎に入り來つて、二三の者を教場より拘引したことに在る。輒ち、學校の神聖と自由とを尊重し確信する校友等は、敢て、警察權の校内侵入を黙過せし學校當局の處置を甚だ非なりとして、當局の彈劾を決議するに至つた。而して、此の事件は生徒大會に於ける酒井校長の挨拶を以て幕を閉ぢたが、學校の神聖と自由とは又再び確認せられる結果となつたのである。

此年度の項を終ふるにあたつて悠緊・稜々の二會について、少しく説明を加へて置く。當時一部二年に於ては、始め悠緊會と稱する辯論鍊磨の會を持つたのであるが、甲丙の諸氏の擅有する所となつて、乙丁の諸氏は之に近づかず、その間彼我の交渉は行はれて、兩者接近のことが計られたが、遂に成らず、乙丁の諸氏が分裂の形式に於て、新に組織獨立したのが稜々會である。此の兩會は始めは斯く反目對立したが、此年度の終りには兩會聯合主催して全校聯合演説會を開き、聽てその後合併して四明會と稱し相協同して演説部の發展に努力してゐるので

ある。扱て、此の會は明に辯論の鍊磨を主眼として作られたるものであつて、此の點縱横會が『思想の發表を主とする』と稱すると聊か趣を異にし、より政治的關心に燃えたつて、翌年度に於て擬國會の開催を敢行せしなど、その育まれた時流の相違もさること乍ら、尙ほ、本質的に多少の差異ありしものの如くである。

大正三年度 大正二年九月—三年八月

部長 安藤 勝一郎
理事 高平 隆雄
高木 輝長

服部 峻治郎

○校風演說會 九月十一日宣誓式後

校風の宣言

小中 弘毅

神

衷心の叫び

浅井 享

校風の宣言

木村 藤造

我觀 神陵

濱田 義通

○新入生歡迎演說會 九月廿日午後一時 於講堂

帝國の現状と吾人の覺悟

森 誠

夕陽將に落ちんとす

矢田 篤

所 感

伊藤 清

個人と社會

安部 浩

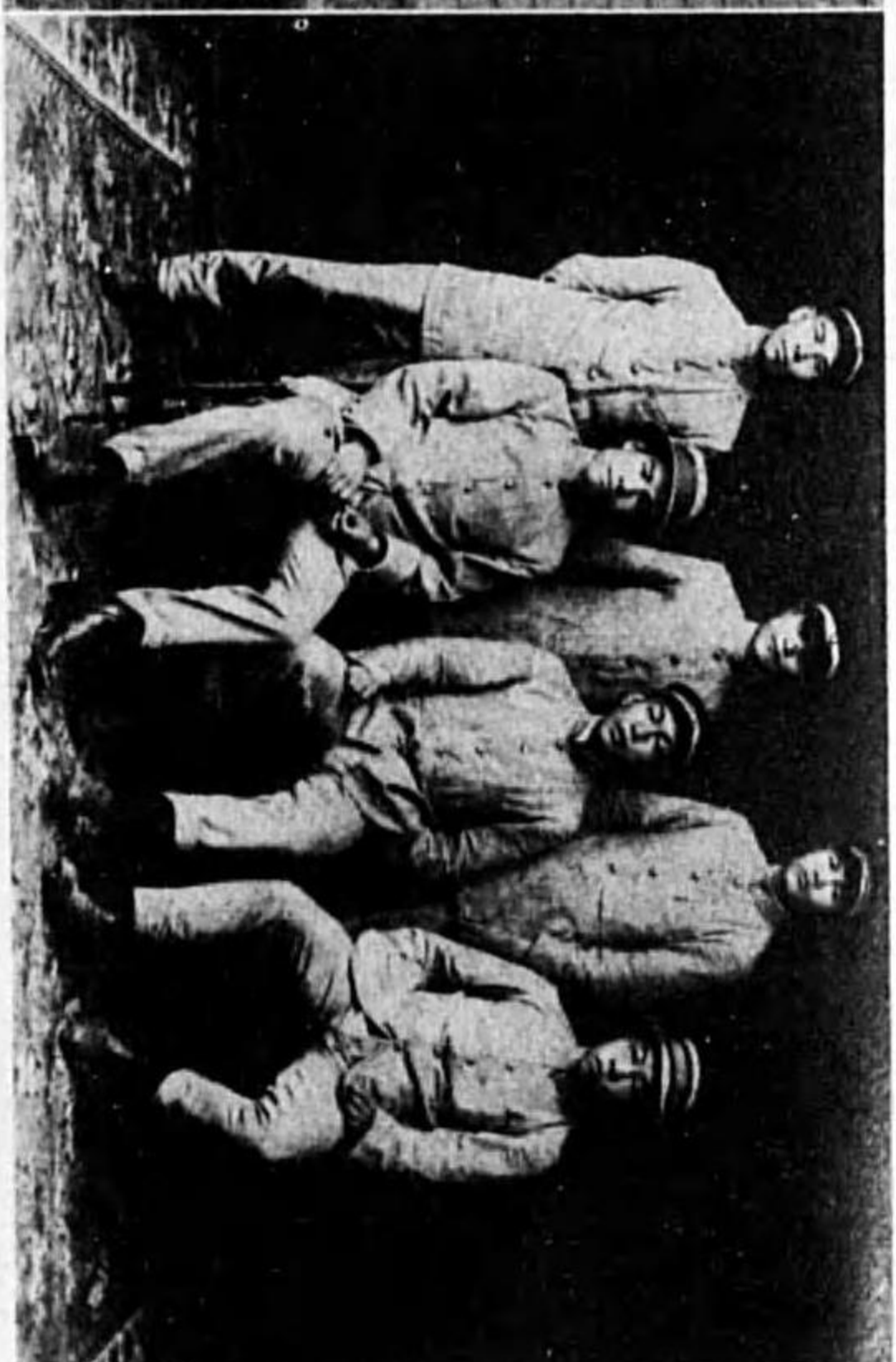
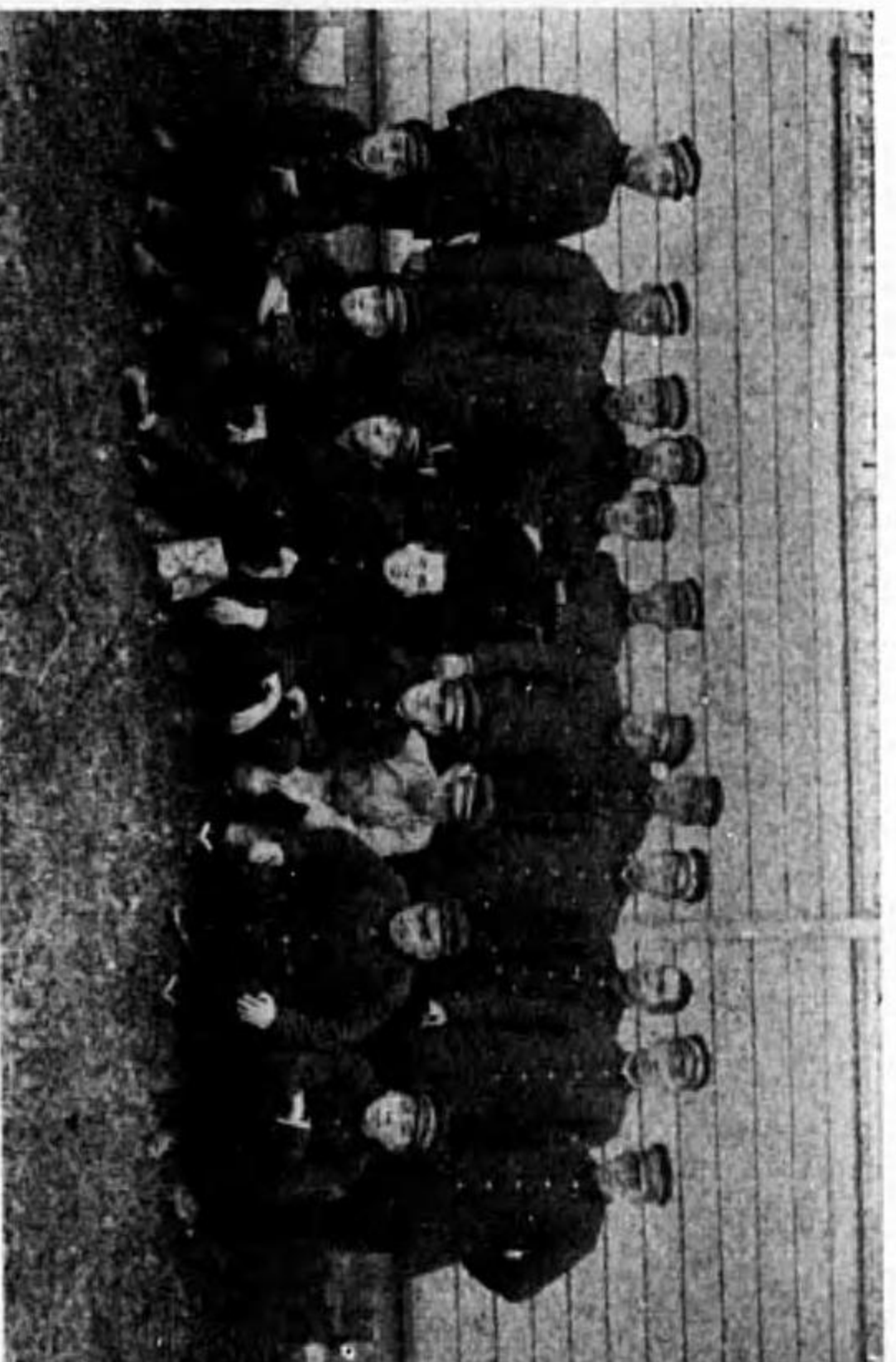
幕 進

菊村 保次

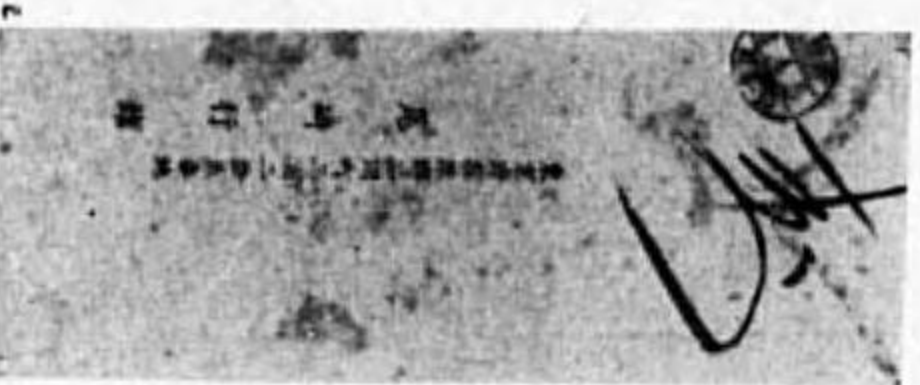
青年と自由

田岡 賀壽彦

宮城 信雅



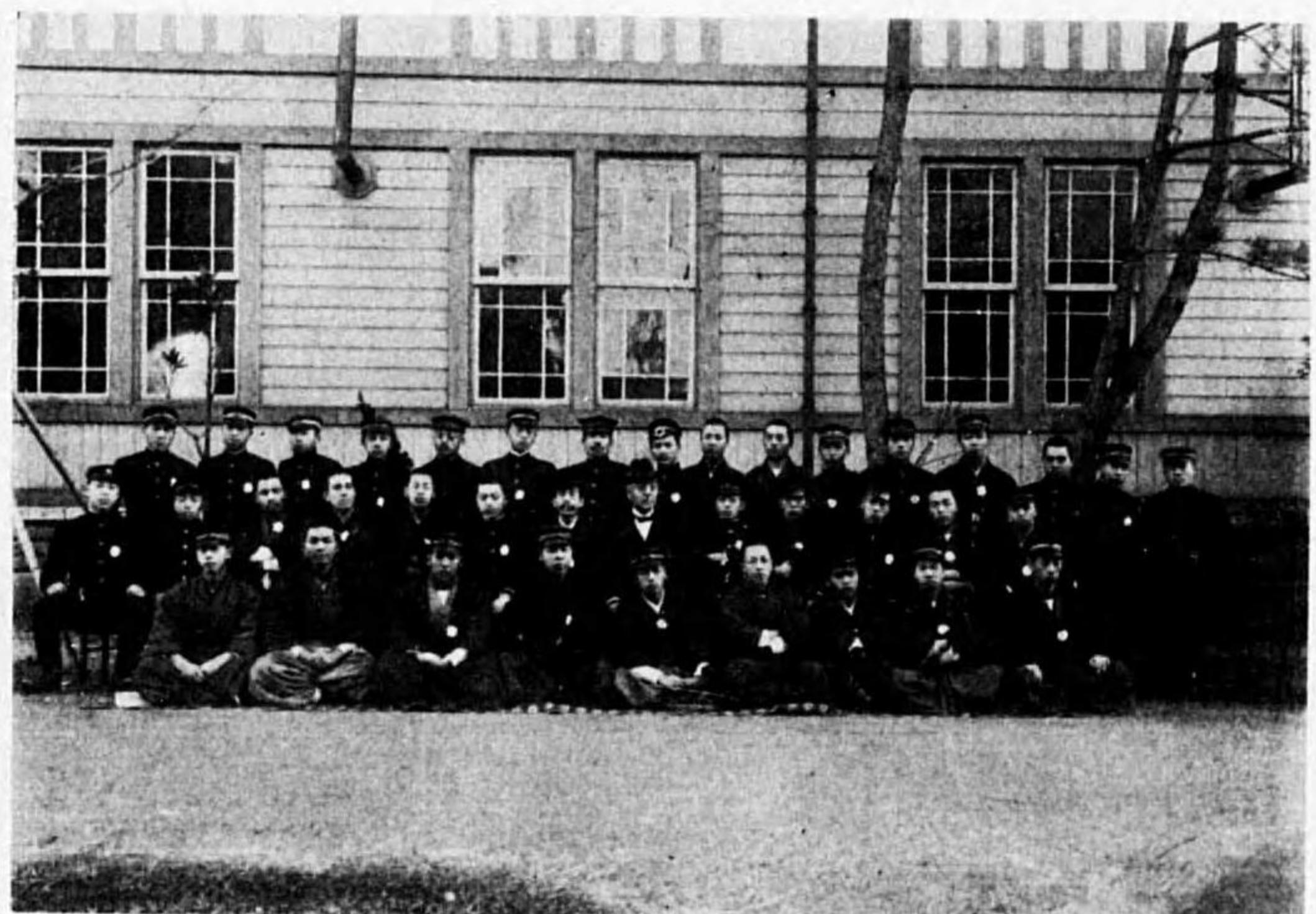
會 松 双 六 部 幹 會 橫 縱 四



木村 敬
望 中。 川 雄
其 實 是 不 有 之 處
日 後 亦 不 有 之 處
其 實 是 不 有 之 處
日 後 亦 不 有 之 處



讀書の民権行跡を見るに權開會堂要



會大部論討説演月二年三正大 七



眞寫別送月五年三正大 八

か た み 本多秀夫

大に悲觀せられんことを望む 末川博

不自由なる自由 武内了温

校風に對する吾人の態度 小中弘毅

所 感 帝大 岸田幸雄

○新舊部長送迎大會 十月十八日午後六時 於講堂

無限の罪人 武内了温

家族本位か個人本位か 伊藤清

自 由 野末孝藏

我 が 叫 中西有三

自 覺 前田和二郎

青 年 稻田鋼

玉子の空言 矢田篤

我國の殖民に就きて 森 誠

古電柱と影と 高橋正男

信 ぜ ん 飯田榮策

校風問題の根本 南大路謙一

閥 族 論 赤松克磨

浪人組を葬れ 汐見三郎

恵れたる人に 松尾直樹

現代道徳論 田岡賀壽彦

人口増加と饑餓戰 末川博

自 由 帝大 吉田三雄

所 感 帝大 岸田幸雄

挨 拶 新部長 安藤教授

挨 拶 舊部長 山内教授

○吉田賢龍教授送別演說會 十月十一日午後零時半 於講堂

演題 『現代の青年』 吉田教授

挨 拶 安藤部長

○辯士派遣

眞我の發露と其の權威(關西學院へ)堂本佐太郎
 眞我の淋しみ(眞宗大學へ) 武内了温
 救國策(大阪高商) 木村藤造

○擬國會 十一月某日

議題 『陸軍五箇師團増設案』

『海外移民法案』

政府

内閣總理大臣 木村藤造
 内務大臣 秋田 牧
 外務大臣 赤松 克磨
 農商務大臣 佐藤 金造
 陸軍大臣 三木郁之助

(以下不明)

與黨

田岡賀壽彦
 末川 博

反對黨

社會黨

○演説討論部大會 二月十六日

開會の辭 高平理事
 ナポレオン斷頭論 伊藤 清
 帝國絶南の一夜 神高商 東 晋一郎
 黄金の力 大高商 土橋 清一
 祕密は其處まで 眞言宗大學 瀬木俊明
 挨 摺 安藤部長
 青年と基督 同志社大學 松尾正秀
 主 戰 論 八高 楠木敏治
 若きハートの叫び 小中弘毅
 時危懐偉人 帝大 行宗貞隆
 國民哲的生活の眞諦 帝大 岸田幸雄
 文藝の現状 京大教授 上田 敏

○三高一高聯合演説會 四月五日午後六時

於學生集會所

開會の辭 本校末川理事
 挨 摺 一高須藤部長
 移 住 者 本校高橋正男
 ヒューマニテイ 一高市毛孝三
 人間教 本校赤松克磨
 曉 鐘 一高野崎 操
 畫 龍 の 眼 本校堂本佐太郎
 孤 憤 一高世良田 進
 挨 摺 本校平田部長代理
 尙末廣博士が『對米所感』と題して講演される筈であつたが急病のため中止となつた。

○聯合演説會 五月九日午後一時から講堂に開く

四明・双松・鶴鳴三會の聯合演説會である

亞細亞なる哉 山田欣三郎
 復 活 武内了温
 先づ思索せよ 武川吉郎
 宗教の權威 富士谷秀超
 自 分 宮城信雅
 闇 の 力 岡本英明
 新緑の山奥に立ちて 宮川長一郎
 ホンチに就きて 伊藤教授
 經濟的史觀 古田良一
 自由の眞髓 末川 博

此年度劈頭部長更迭のことあり、明治三十三年以來十三年の長きに亙つて部のため盡力下されし山内晋卿先生引退せられて、安藤勝一郎先生新任せらる。此の他此の年は謂はば明治から大正への眼まぐるしき部勢の進展が

遂にその達すべき頂點に向つて躍進を遂げたとも云ふべき時にあたつて、此の第二期を特色づける部の態勢は或は茲に建設せられ、又茲に於て固定化せんとしたのであつた。擬國會の開催、對一高聯合演說會の再開等はその後者に屬するものであり、翌四年度に於て、校風宣言演說會が明に我部の擔當とする所となつて新なる意味を持つに至りしはその前者に屬するものにして、共に此の明治から大正への數年間に、主としてその機運の醸成せられたるものが、茲に漸く成果を見るに到つたものである。

校風演說會(宣誓式後行ふもの)

傳へらるゝ所によれば、明治四十四年度に於て行はれしものがその最初であつて、爾後毎年行はれしこと、既述の如くであるが、之等は未だ、その行ふ主體の何れなるかを明にせず、嶽水會雜誌部報欄に於て明に演說部の主催として記載せられたるは翌大正四年度を以て嚆矢となす。今其の間の事情を考察するに、此數年來常に論議の的となり、且つ屢々その改革を企てられし嶽水會は、就中その豫算問題は、大正三年度に至つて層一層論議の焦點となつて、茲にも『自由』を意識し尊重する改革の精神は『既に自由を要求する丈の人は自己を尊重し自己の行爲に對する明白なる理解と權利の主張がなければならぬ、而るに嶽水會は其會員たる三高大多數の人々から忘れられたる會であつた』とて之が改革を主張し、全三高生の關心と蹶起を促した。その結果遂に問題は總務委員による豫算の研究と展開し、且つ、從來の理事選出制度が一有力運動部の勢力に妨げられて例へば殆んど演說に關心を有せざる演說部理事の任せられるといふ陋習の存在を斷乎斥けて、嶽水會各部は自己の部に於て自由に自

己の部の理事をのみ選出することとなつて、大正四年度より之が實行を見たのである。かくて、大正四年度以來、校風宣言演說會は明かに我演說部に於て之を擔當し、我部は毎年新しき神陵人に對して、その校風の存在を指示顯揚して、之が指導に任ずるに至つたのである。

擬國會

擬國會が時の護憲運動に刺戟せられた青年學生の旺なる政治熱のあらはれであつた事は、既に述べた如くであり、此年十一月に開かれた擬國會に於ては、『陸軍五箇師團増設案』を議題として居るのであるが、之は曩に第二次西園寺内閣掛冠の因をなせしものにして彼の護憲運動の發端を開きし問題であつて、我校擬國會に於ては此の増師案を否決し去つて居るのである。以て當時學生の關心状態を知り得やう。

三高一高聯合演說會

大正二年度には諒闇の故を以て行はれなかつた本演說會も、やがて年改つて對校戰のこの議せらるゝに及んで、以後野球試合と進退を共にして其前夜開かれる恆例となり、『陽春四月五日或は祇園の花に酔ひ、或は嵐山の櫻に憬る』今日此頃、場所は京都の東北隅學生集會所、此引しまつた演說會に來會する者が少なくはなからうかとの懸念もあつたが六時頃になると聽衆滿堂の盛況、是れ實に新聞社がよい場所へ記載してくれたことによるものだが……。一は黃塵萬丈目の廻るやうな帝都に鮮に翻る向陵自治の旗風と、一は平安優雅千年の昔を語る舊都に彩られたる自由の綠濃き神陵の氣風とは』茲に文化の武器雄辯の道を以て相見えたからである。先づ末川理

事(臨時)『自治と自由の色彩の融合よりなる此聯合演説會は、我思想界言論界に影響する處蓋し大なるものがあらう』とて聯合演説會の將來を祝福して開會の辭に代へ、次いで一高須藤野球部長、此日は臨時辯論部長として挨拶せられ『全國の高等學校を糾合して辯論大會を開き學生思想界の木鐸たらん時期』の來ることを切望せらる。之より各辯士の演説に入り、我が高橋正男氏は要するに近代人の社會と個人の矛盾を論じ、『新しき郷土へ移るならばコスモポリタンにあらずして須く徹したる辛辣なる思想に立たねばならぬ』とて『眞自我を發見して勇ましく更に豊富なる生活の第二步に到達せねばならぬ』と説き、赤松克麿氏『人間教』と題して、先づ『自身を知れ』と云ふモットを前提として『吾人の人間教とは自我の絶對的信仰である』とて個性の權威を説き、且つ實生活を離れたる天國の思想を罵倒し、轉じて我歴史を語り東洋の束縛を論じて、最後に『眞の國家道德は自我の發展に極要なるものであつて、吾人は頑迷なる凡ての舊道德の偶像を破壊して人間教に服せしめ、國民の深き自覺に基ける第三帝國を建設せざるべからず』と結ぶ。最後に堂本佐太郎氏『畫龍の眼』と題して『我國教育の消極的なるを論じて』『教育者は如何にして學生を忍耐せしむべきか、如何にして拘束すべきかに就ては苦心するが、如何にして個性を發揮せしめ、如何にして自由を與ふべきかには苦心が不足してゐる』と斷じて『吾人は囚はれし學問を超越して活學問をなせよ』とて、人格の必要を説き我國の位置と完備せる社會を畫龍に譬へて、『吾人須らく畫龍の點睛となれ、而して自己を導き、日本を導き更に亞細亞大陸を導かざるべからず』と論局された。之に對して、遠來の一高は市毛孝三氏『ヒューマニテイ』野崎操氏『曉鐘』世良田進氏『孤憤』を壇上に送りて、夫々或は『吾人が政治家

となり學者となる前に先自ら人間とならねばならぬ、先づ自己の根底を求めよ、自我の中心に深く深く追求せよ』と絶叫し、或は『リンコルの』神は報酬なくして働き給ふ故に我も亦報酬なくして働かん』との言葉を引き來り大我中に小我を没却すべきを論じて、宗教的に説き進み犠牲的精神と努力的精神の偉大をときて『吾人は犠牲的精神を以て太陽の出づる迄先づ明の明星として働かうではないか』と結ばる。又或は『理想に向つて力の盡くる限り舵は折れ、權も折れる迄奮進し努力したが、而も願れば此地上の現實をいくらかも距れはしなかつたのだ、之れ現代人の悲哀である。而れども是れにも屈せず拔手をきつて岸の彼方へと進むべきが吾人の希望ではないか』と説き進みて科學萬能の夢より醒めて理想主義神祕主義に進まざるべからずと叫ぶ。概して、彼は宗教的神祕的で、我れは理性的現實的であり、その共に自我を根底として眞の自我に追求せよと叫ぶのは共通するも、彼は大我の内に小我を没却すべき態度を取り、我は自我を極力發展せしめて外界を包括すべき態度を示して、よき對照を示し、此の演説會は、當時稀なる充實を示せるものであつた。平田先生の挨拶あつて閉會、會後一高谷山生徒監本校林生徒監及び兩校部長、兩部員相會して茶話會を開き夜更くるまで論談快笑盡きなかつたと云ふ。

演説會

新入生歡迎演説會、新舊部長送迎大會の盛大、吉田賢龍先生送別演説會の開催及び演説部大會の活況など、記すべき多くの催の他、他校に辯士を派遣することもよく行はれ、又所謂級辯論會、同人會の開催も旺であつた。

大正二年十月十八日午後六時より講堂に新舊部長送迎大會を開く。山内先生の長き御指導に對する感謝と『我

々の指導者に、若い人達に徹底した同情を有せられ而も燃ゆる様な熱血に富んでゐられる安藤新部長』をお迎へする喜びとに溢れて、此の會は開かれたのであつた。此日登壇する者十有六名、他に帝大の吉田岸井の兩先輩も來り登壇せられるあり夫々の所説を展開したが、校風の論と、新しき時代の躍進を期する叫びの多かりしことが注目せられる。最後に安藤先生の御懇篤なる就任の挨拶及び山内先生の辭任の挨拶があつて閉會したのは十一時であつた。

『二年程前千葉縣立中學校長より我校に來任せられて、今又忽にして七高の校長に榮轉せられた吉田先生の爲に我部は十月十一日講堂に送別演說會を開いた。先生は修身科を擔任せられ我校の精神界を指導せられて居つたのである、來り會する者數百』先生は『現代の青年』なる題下に時餘に互つて演述せられ現代青年の自重すべきを説かれた。

『時はこれ政界と人心激昂の沸騰しきつた時。學校は自由の旗風も雄々しき三高の主權と揃ひも揃つた辯論會』かくて演說部大會は非常なる盛會を以て開かれた。此日、伊藤清氏『ナポレオン斷頭論』小中弘毅氏『若きハートの叫び』と題して、現三高を代表して招待辯士と競ふあり、伊藤氏は充分に當時政局の諷刺を籠めつゝナポレオンを論じて『彼様な彗星的英雄は、斷頭臺に上せて始めて天才的光輝を偉大ならしむるものなり』と結ぶ所に拍手あり、小中氏デルファイの神殿より出でてカント・スペンサーよりオイケン・ベルグソンに及びその若きハートの叫びを之等哲人の思想に託して異色ある演說を試みられたる、惟ふに此の二氏は當時我部に於ける二つの相離

れたる傾向を表示せるものと云ふべく、又以て、當時演說壇の如何に多彩なりしかを窺はしめるものである。此日最後に上田敏文學博士の『文藝の現狀』と題する講演あり。近く歸朝された博士は、夙に佛蘭西文學の紹介・評論を以て文壇に令名あり、隨つて其の語らるゝ所廣く世界の文藝に及び、我國文藝の未だ幼稚なる域を脱せざるを歎かれ、早く歐米文藝の現狀の如くあらしめんことを希望せられた。尙博士は、厨川白村氏と共に本校文藝思想界に多大の影響を與へられしことは獄水會雜誌に於ても隨處に窺はれる所である。

第二中期 (大正三年より大正七年に至る)

概観 凡そ新なる興起發展の後に來る時代は勢ひ平調坦々たる推移を續けるものである。謂はゞ、そこには太平無事の夢が續け得られる。従つてそこには何等劃期的な創業あるなく、唯々日々の生活が先人苦闘の賜として引繼がれ引繼がれ行く生活を以て足れりとせられる。茲に云ふ中期は恰かも斯の如き時に相當するのである。即ち明治から大正への激しき變動の數年を経て、創められ、確立せられた事業と精神は一先づ完成せられたものとして、そのまゝに次の世代へと傳へられて、茲に中期と稱せられる靜謐の數年が續けられたのである。かくて、此の中期を通じて行はれたる我が辯論人の指導的精神は校風論上個性尊重を以てその主眼とする『自由』の維持であり、校風自由演説會が、全く我が辯論部に一任せられたのは、我が校風論に於ける此部幾多先人の眞摯と努力の結果であつて、此期部人の努力は少くとも、外形的には、此の尊き賜の維持相傳にとどまつたのである。

明治が大正へと遷つて、新しき時代精神の要求せられると共に、閥族打破、憲政擁護の掛聲喧びすく、茲に所謂護憲運動の全國風靡を來し、之に伴つて、青年學生の政治的關心は異常なる昂騰振りを示したのであつた。かくて我が三高演説討論部に於ても、既に古くに於て行はれたる擬國會が再び開かれるに至つたことは前期に於て述べし所であるが、其後中期を通じて此の擬國會の開催は當時青年學生のデモクラチック・ヒロイズムの表徴となり、此の傾向は世界大戰後に所謂社會思想の漸く浸潤し來れるまで續いたのであつた。

だが、既に校風に關する論議起らず、新しき時代精神への渴仰がなくなるときは、學生生活は、凡そ單調となり、その一反映たる學生辯論も亦た徒らに辯技の末に走りて形式化するの弊なきにしもあらず。嘗ては尙眞摯なる理念よりせられた學生聯合演説會(演説部大會)も、今や競技化の一面をのみ高揚せられて遂に遊戯化するに至り、後擬國會の廢止と畧々時を同うして之が開催を見ざるに到つたのも、亦宜なる哉であるが、斯る中にあつて三高一高聯合演説會がよく存續して兩校思想交換の楔となつて、常に生々の氣を與へ得たことは、此の兩高校の特殊關係に負ふもの乍ら、一般に斷片的なる多數各學校代表辯士との交歡が徒らに外形的華美に流れて、實質的收穫を齎すこと乏しきに引きかへ、單なる二校間に於ては、よく比較研究して相互の刺戟となり向上を促すに役立つこと大なりし事情に基因するのであつて、此意味に於て此の三高一高聯合演説會は我部の新しき活動形式を與へたものとして見らるべきなること、既に述べし如くである。

此期は恰も世界大戰の勃發に始つて、其漸く終熄せんとするに到つて次の後期に繼がる。此時代の我が日本は、未だ、戰前的色彩の極めて濃かなりし時であつて、歐洲に於ける諸國家が戰時早くも非常對策を以て戰前の諸制度を革むることを餘儀なくせられ、後に到つて所謂資本主義體制の上に重大なる影響を齎した情勢も、我國に於て之を觀るは尙後年のことに屬し、社會的思想の浸潤も未だ表面に現はれ得なかつたのである。謂はゞ、明治を脱却した新しき時代精神は、大戰中もそのまゝに存續し得たのであつて茲に此の中期のもつ社會思潮との關聯が明にされるのである。

此の概観の筆を擱くにあたつて、前期に於いてその般盛を極めし級辯論會乃至同人會の衰退を説かねばならぬ。卓風會に始つた之等同人會が辯論の普及練磨と校風の振起とを以てその隆盛を致したことは既に述べし如くであるが、既に少くも校内に於ける辯論の普及一段落を告げ、一般の之に對する關心は稍々惰性的となつて漸く生々の氣を失ひ、且つ双松會諸氏によつて一先づ校風革新の最後の仕上を成し遂げられた後に於ては、その存在の重要な立脚點を失ひしものとも謂ふべく、双松會の存在意義は全く辯論部と同一範圍のものとなり、双松會自體の活動は著しく限局され唯々僅かに辯論の練習會をもつに過ぎざるに至り、其後僅かに大正五年度一部三年の有志を以て組織せられた鶴鳴會の名を見るのみとなつて、後第三期に入るまで再びかゝる級辯論會の名を見ないのである。以下詳細は各年度の項に於て述べることにする。

大正四年度 大正三年九月—四年八月

部長 安藤勝一郎
理事 原田健

石原憲治
錦織末富

辯論部を代表して 汐見三郎

○新人生歡迎演說大會 九月十九日午後一時 於講堂

○校風自由演說會 九月十一日宣誓式後
赤松克磨

校風の宣言

開會の辭

原田健

感激して起つ

高橋尙俊

自然と人工

森田佐一郎

校風の危機

宮川長一郎

清流濁流

大熊眞

所感

宮崎黙耕

奴隸將即位

垂水克巳

神樂岡上の微笑

坂本正道

憧憬の地

西田正一

悲哀に就て

齋藤外男

一義の活躍

飯田榮策

思ふが儘を

伊藤清

閉會の辭

赤松克磨

○長谷川如是閑氏講演會 九月二十六日午後二時

於講堂

演題 『現實の存在と非現實の存在』

○後藤新平氏講演會 十一月七日午後二時

於東製圖教室

○辯士派遣

向上の一路(天理中學)

大島市五郎

荒廢の後(眞言宗大學)

飯田榮策

太陽(佛教專門學校)

安部浩

藝術論(高野山大學)

古田良一

京町堀より(大阪高商)

汐見三郎

力と愛と(關西學院)

原田健

○三高四高聯合演說會 十一月二十一日夕六時

於四高至誠堂

開會の辭

四高河合部長

宗教に歸れ

三高高橋友次

大國民の理想

四高竹田儀一

處靜 荷動 三高坂本正道
 近善の努力 四高井村平治郎
 人類主義 三高津島純平
 戦争と平和 四高中山喜久松
 挨拶 三高橋本教授
 閉會の辭 四高八波教授

○擬國會 一月三十日午後一時 於講堂

立憲帝國黨內閣

內閣總理大臣 法學博士 市村光惠
 內務大臣 原田健
 外務大臣 赤松克麿
 大藏大臣 吉田助
 陸軍大臣 勝本正晃
 海軍大臣 安部浩
 司法大臣 越智守一

文部大臣 古田良一
 農商務大臣 手塚庄三郎
 遞信大臣 關本庄松
 內閣書記官長 和田佐一郎
 警視總監 鹽崎達人
 鐵道院總裁 赤土正覽
 院內總務 濱田義通
 全 院內幹事 山本泰辰
 全 院內幹事 安藤明道
 全 院內幹事 石田申郎

立憲民政黨

總 裁 法學博士 小川郷太郎
 院內總務 汐見三郎
 全 院內總務 高橋正男
 全 院內總務 吉田雄次郎

『海軍擴張案』(政府提出)

○關西聯合演說會 二月二十日午後一時

於帝大學生集會所

晝の部

開會の辭 原田理事
 宇宙生命の示現と宗教 三高 富士谷秀超
 力の文明 佛教專門學校 白旗文幢
 學問の獨立と大學自治

同志社大學 石田季治郎
 來るべき平和戰を憶ふ 大阪高商 須川憲太郎
 蛇の争 關西學院 柳原正義
 天 論 三高 垂水克巳
 雄辯の崩壞矛盾の眞 大谷大學 井上右近
 王者か革命か 京帝大 堂本佐太郎

夜の部

立憲獨立黨

全 院內幹事 垂水克巳
 院內幹事 谷澤暎靜
 全 院內幹事 富士谷秀超

總 裁 法學博士 織田萬
 副總裁 京大 行宗貞隆
 院內總務 津島純平
 全 藤音得忍
 全 藤本亮
 全 師岡靜
 院內幹事 坂本正道
 議 長 法學博士 佐藤丑次郎

議案

『衆議院議員選舉法改正案』(汐見三郎外三十名提出)
 『二年兵役案』(政府提出)

人間と生活と子守歌とそれから制帽

神戸高商 田村貞一

跳躍の眞諦 高野山大學 富永快俊

即事而眞 眞言宗大學 神西惠隆

比叡の山嵐 大阪高醫 吉田正一

感激の生活 三高 赤松克麿

此孤獨を如何せん 佛教大學 源哲勝

現代民衆思想 京大 岸田幸雄

挨拶 安藤部長

青年と時代思潮 法學博士 石坂音四郎

○三高一高聯合演說會 四月四日午後六時

於一高嚶鳴堂

此年は恰かも前期四年の成果が集大成せられて、部容一新よくその整備を致した一年であつた。先づ最初に掲げられる校風自由演說會は獄水會改革に絡まる校風論議の結果、全く我辯論部に於て之を擔當して開催したるものであり、その極めて注目すべきであることは既述の如くであつて、殊に當日汐見三郎氏が『辯論部を代表して』

強者の道程

一高 小山秀三

陶犬瓦鶏の憂

三高 手塚庄三郎

迦葉の破顔

一高 津田秀榮

僭越の悲哀

三高 錦織末富

惱める約百

一高 栗田大祿

内在的自我と文化生活

三高 吉田雄次郎

獨旅

三高先輩 東大法科 岸井壽郎

ヒンデルベルヒとデルカツセ

一高先輩 法學士 鶴見祐輔

次いで兩校部長の挨拶があつて十時半閉會

行ひし演説は、當時獄水會各部門に存したる紛争に就て我が辯論部の立場を明にして、一運動部の専横を攻撃せしものであつて、大正三年度末に於て漸く解決を見んとせし該問題の善後策の一として執られたものであつた。

此の他當年記録される演說會は、新人生歡迎演說大會・對四高聯合演說會・關西聯合演說會・對一高聯合演說會の四つであつて、何れも相當な活況を呈し、又双松會・鶴鳴會などの練習會が毎週、講堂に或は教室に、開かれたことが傳へられてゐる。不幸、それ等の内容的なことについては今之を明にし得ないのであるが、その思想的特色としては、之を變動の方向にその重點を置いて見るときは大體に於て縦横會諸氏が、寧ろ内面的な思索に進んで新しき『個人の權威』の認識に赴き、侃諤會・稜々會の諸氏が護憲運動の影響を尤も大きく感受して寧ろ外的な政治的興味の追求に向つた、その中間的な位置を占めるものであつて、一面に於ては、當時青年のデモクラチツク・ヒロイズムが尤も素直な形に於てあらはれた時であり、且つ、そのことの故に、更に深めらるべき内面的思索への徹底が稍々緩漫となつたとも見られるのであつて、茲に於て、極めて眞摯なる而もそこに兎もすれば空虚となり勝ちなヒロイズムの香が感ぜられるのである。だが全體的に見るときは矢張り抽象的な思索論究も旺なものであつて、對一高聯合演說會に於けるを始め我部辯士の論ずる所、具體的事象は餘り之を見ないのである。尙ほ例外的なもの乍ら、既に當年に於て社會主義の理論が極めて學究的に攻究せられて、或は之を一概に排斥するの非を説き、又或はラディカルな破壊的議論も時にあらはれてゐることは注目を惹く所である。だが一般に社會主義への眞の關心を生じ始めたのは少くとも大正八・九年以後に屬する。

十一月二十一日夕、四高至誠堂に於て開かれた四高との聯合演説會は、修學旅行に際し金澤に一泊といふ好機の興へられたのを利用せしもので、全然臨時の催であり、而も極めて愉快なる結果に終つて居る。又此年二三年見なかつた名士招待講演會の開催が組織的に復興せられて、第一回長谷川如是閑氏の來演を見、『その獨特なる哲學は論旨頗る明徹忘るべからざる印象を聴衆の心深く刻み』、第二回には後藤新平男爵を招待し、又關西聯合演説會を主催して、他校多數辯士の辯論後、石坂博士の講演に接したることなどが傳へられて、旺なる辯士の派遣や遠征と共に、當時の活潑なる部の活動が偲ばれるのである。

最後に、擬國會の状況を、當年の記録からの抜抄に據つて、書いて見やう。

『さきに大正維新に際し最も進歩せる憲法論を唱道して桂總理の違憲を攻撃して完膚なからしめ遂に内閣をして土崩瓦解の已むなきに至らしめたる帝國黨總理市村博士は此度大命を奉じて内閣を組織したり』とは、當時校内に於て、擬國會開催前に發行せられたる新聞の記載する所である。蓋し當時に於ては、擬國會召集の二週間前には、もう閣員諸公、各黨領袖の顔觸れも大體定つて、政黨の宣言綱領の發表、臨時發行される新聞の批評月旦等に、全神は正に本格的な政治季節に入るのであつた。今、當時校内の新聞に掲げられたる月旦より興味ある所を抜書するに

『内相原田君、同氏は思慮慎密にして行政施設の技能卓越せるを以て夙に官界の寵兒として歌はれしが同君の溫藉典雅なる紳士の風采に接するものは皆官界の君子人を以て呼ぶ。然れども此度の内閣組織には閣員の銓衡よ

り黨員の鎮撫に至るまで首相を助けて百方奔走目醒しき活動振りを示し、殊に民黨にありし赤松氏を誘致して閣員に引上げたる等策士の機略を發揮した事は政界の消息通も啞然たるものあり。(後畧)』

『外相赤松君、現内閣は其出現頗る人の意表に出づるものありしが、赤松君の外相は意外中の意外なり。如何となれば同君は内閣成立前日までは反對黨創立委員として奔走しつゝありしものなるに政府黨の勧誘に心機俄かに一轉突如として入閣したればなり。口さがなき京童は同氏の豹變を以て變節呼ばりをなすもの多きも同君は「内に省みて一點の疾しき所なし、多端なる今日の外交問題を解決し邦家をして泰山の安きに置かんとする憂國の至誠區々たる世評に拘泥するを得ざるなり」と揚言して得々たり。變節か忠節か吾れ之を知らず(後畧)』と、

かくて、政治氣分校内に横溢する中に、議會召集の當日は來た。『さて議場に臨みて親しく其の實状を見るに帝國黨に於ては精嚴明敏なる市村首相を始め練達堪能なる原田内相、機鋒銳脱せる赤松外相、才氣渙發なる安部海相、脱俗超凡なる勝本法相、端正莊重なる吉田藏相より謹嚴なる古田文相、剛直なる越智陸相、沈着なる手塚農相、俊敏なる關本遞相皆堂々たる大臣の器なり、而して快男兒赤土鐵道院總裁、剛骨漢鹽崎警視總監、文豪和田内閣書記官長等皆一代の俊髦たるを失はず。又た與黨には安藤君の鋭敏なる、山本君の純粹なる、濱田君の多才なる、皆議政壇上の勇士ならざるはなし、其の多士濟々たるは頗る人意を強うするに足る。而も誓を並べて民黨に鋭鋒を交へたる論議は未曾有の雄辯、内閣の讚辭を呈するに足る。只惜むらくは薩長の陸海軍閥族の使喚を受けしにや餘りに軍國主義に傾きて獨逸の轍を踏まんとするが如き危惧の念をいだかしむ(畧)。次に民黨を見るに

俊敏痛快なる小川總裁を始め幹事には練達敏腕の汐見君、嚴正眞摯なる垂水君、犀利深刻なる吉田君、沈着多策なる高橋君、溫健着實なる田岡君、優尙高雅なる郡君及び闘士谷澤君、長廣舌富士谷君等人材林の如し、其數政府黨の二倍を超え得意の財政政策、選舉法改正案を提げて堂々として政府に肉薄せし態度は甚だ立憲的にして大に我意を得たり(著)。最後に獨立黨を觀察すれば聰明宏量なる織田總裁、博辯宏辭なる行宗副總裁より雄渾森嚴なる坂本翁、機策塗湧なる津島君、圓滿老熟なる長岡君、さては精銳痛切なる藤川君、才氣縱橫なる向井君、曰く誰れ曰く誰れ其人物の多き枚舉に遑あらざるなり。然り而して黨員數は優に最多數を占めたり。聞く所によれば政府黨の買収運動ありたれど一人の脱黨者なかりし。こは如何に操守堅固なるかを推知すべく而して議會當日に於ける一絲亂れざる行動は其の黨派的訓練の行届けるを察すべし。更に其の總裁の大雄辯によりて發表せられたる如く主義政策は帝國黨の如く突飛に走らず民政黨の如く偏頗に傾かずあくまで中正溫健にして着々帝國の進展を計るところ誠に理想的の政黨と云ふべし(著)。斯る狀勢の中に『定刻の振鈴響くや議長開會を宣し、劈頭、首相及び外相の施政方針に關する演説があつた。議事日程に入り、第一案(衆議院議員選舉法改正案)は討議の後、大多數を以て可決せられ、第二案(一年兵役案)は委員附託となり、次いで懸案たる第三案(海軍擴張案)に入つたが民政黨は絶對に反對し、獨立黨は修正案を提出し、甲論乙駁、採決の結果、絶對多數にて否決せられた。依つて首相は詔勅を奏請し議會は萬歳聲裡に解散した。當日、辛辣なる民政黨の論難攻撃に對し、政府善く防戦し獨立黨もこの中間に在つて波瀾を洶涌せしめ、實に活氣縱橫、覺るに憂國の志士を偲はしめた』と爾云ふ。

大正五年度 大正四年九月—五年八月

部長 安藤勝一郎
理事 坂本正道
(中途辭任)

高橋 襄
廣澤 孝吉
手塚庄三郎
(坂本氏に代る)

○辯論部と改稱

○校風宣言演說會 九月十一日宣誓式後

校風の宣言 手塚庄三郎

○新人生歡迎演說會 九月廿五日午後 於講堂

開會の辭 理事
三高と思想と私と 長岡武雄
拙の一字 石田申郎
我戦争と確信 山田欣三郎

此自由を呪ふ 吉田源藏
月の光に 横山重遠
紅血への憧憬 郡 鐵三
我見たる三高と一高 江口胤顯
未定と題す 富田健治
片腹痛し 田中守三
強烈なる意志崇拜 加川航三郎
國家の危機を如何せん 山田卯三郎

自 山 帝大 汐見 三郎
 帝國主義より國民主義へ 富士谷 秀超
 三寸不磨 帝大 岸田 幸雄
 閉會の辭 理 事
 閉會五時

○栗原教授南洋視察談(鶴鳴會主催) 十月二十日午後一時 於講堂

○御大典紀念全國學生演說大會 十一月二十一日 於市會議事堂

畫之部(午後一時開會)
 開會之辭 坂本 理事
 如是我觀 三高 安藤 明道
 生の苦闘 關西學院 中西 末造
 人生と宗教 大谷大學 森 順誓
 女人禁制 高野山大學 大林 觀明

野邊の峯 大阪醫大 福富德次郎
 宗教革新論 三高 富士谷 秀超
 戸を開くものは誰ぞ 佛教大學 源 哲勝
 我求むる者出でよ 八校 藏 内 生
 矛盾せる社會 明治大學 渡邊 鬼子松
 無位無産の人々 京都帝大 汐見 三郎
 夜之部(午後六時開會)
 一寸御手輕に 佛教專門學校 梶山 法順
 更に深かるべきもの 神戸高商 鹽崎 觀三
 我實業を如何せん 大阪高商 香取 敬藏
 驚くべき音樂 名古屋醫專 馬 島 某
 人間生活の解釋 三高 郡 鐵 三
 青山高聳天 臨濟宗大學 岸田 宣純
 焉捨焉取 眞言宗大學 吉川 法城
 富か劍か 同志社大學 川島 次郎

五人の力 四高 多賀谷 三郎
 青年の演說につきて 東京帝大 山名 義鶴
 挨拶 安藤 部長

○擬國會 二月六日 於京大法科大講堂

内閣總理大臣 法學博士 小川 郷太郎
 兼大藏大臣 法學博士 佐藤 丑次郎
 外務大臣 法學博士 青木 紹實
 內務大臣 中西 有三
 陸軍大臣 山本 泰辰
 海軍大臣 井上 隆一
 司法大臣 谷口 茂壽
 文部大臣 吉田 正雄
 遞信大臣 野末 孝藏
 農商務大臣 藤川 貞三郎
 立憲獨立黨

同 濱田 義通
 同 中 鋼 某

立憲自由黨 總 裁 法學博士 岡村 司
 副 總 裁 岸田 幸雄
 總 務 坂本 正道
 同 富士谷 秀超
 同 谷澤 暎靜
 同 廣澤 孝吉
 同 手塚庄三郎
 立憲進歩黨 總 裁 法學博士 神戸 正雄
 總 務 宮川 長一郎
 同 田中 守三
 同 熊谷 某

衆議院議長 法學博士 田島錦治
副議長 山比質

本年は午前十時開議、午前中は質問、午後は選舉法
中改正案、工場法案及び海軍擴張案に就き討議した。
六時閉會後、大學集會所に於て茶話會を開き、諸先生
の御意見を伺つて解散した。

○三高一高聯合演說會 四月四日 於一高嚶鳴堂

開會の辭 一高委員 岡地與四松
土の心 一高 吾妻 榮
大なる個人 三高 吉田 源藏

意味の世界より事實の世界へ

一高 簗田不二夫
如何に生くべきか 三高 安藤 明道
壁を見つめて 一高 横田 正博
後我主我兩主義の變遷 三高 富士谷 秀超

揆 揆 一高 速水部長
揆 揆 三高 安藤部長

○三高一高聯合演說會派遣辯士慰勞會 五月五日午後

二時 於講堂

杜鵑血に泣き風雲轉だ念なり 伊藤 信愛
凱歌の下にて 池田 了實
日 本 魂 江口 胤顯
粗製濫造 河村 泰三
東洋主義 中村 豊一
雜 感 田中 守三
揆揆及聯合演說會の感想

派遣辯士代表 富士谷 秀超

○辯士派遣

我信仰(高野山大學へ) 永富 守之助
愛(大阪高商) 中西 有三



九 大正四年十一月御大典紀念全國學生演說大會



〇一 大正五年四月三高三高一聯合演說會



大正五年五月別寫眞

The Zainokunism (大阪高商語學部)

K. Yamoto

理想に生きて立憲政治を想ふ(同志社大學)

谷口茂壽

余が浪漫主義(同志社大學語學部) 三宅又雄

心行くまで我は歌はん(同右)

藤川貞三郎

大帝國主義(大阪高工)

中村豊一

思想界の溜飲(關西學院)

田中守三

生命意志の示現(大毎神戸支部主催)富士谷秀超

歐洲戰後の吾人の覺悟(名古屋醫專)渡邊彌億

『歐洲の天といひ、支那の空と云ひ、嵐吹きすぎれば黒雲蟠つて何時青空となる事やら分らない、我國は獨り毅然として平和の神の都である、此の秋に當つて曠古の大典は行はせらる、……』と、之、嶽水會雜誌部報欄に見る御大典紀念全國學生演說大會記事の序である。然り、世界は擧げて動亂の渦中にあるとは云へ、此の東洋の島帝國民への影響は尙微弱であり、否、寧ろ此機に於て、我國經濟の素晴らしき躍進が遂げられたのであつて、未だ歐洲諸國に於けるが如き非常的色彩を帯びるに到らず、戰前の歩みそのままに続けられたのであつた。かくて我部に於ても、その行ふ事業は敢て新奇なるなく、従來の關西聯合演說會は、曠古の御大典を記念する意味に於て全國學生演說大會とせられて關東・北陸よりも辯士派遣を得、市會議事堂に於て一層盛大に開催せられ、又擬國會が法科大學より一層の援助を得て、その議場を狹隘なる我校の講堂より大學講堂に移したる、更に辯士派遣の旺になりたるなどの僅かにあげられるのみであつて、校風宣言演說會は既に『吉例』とせられて或ひは生氣を失ひしにあらざるやを思はしめ、又招待講演の一も見られざるなど聊か定型的となりし部況を語るものであらう。

此の他、新人生歡迎演説會の開かれたことは前年の如くであり、對一高聯合演説會は春四月野球部の東征と共に復々一高の嚶鳴堂に開かれて、此の兩年京都の地に於て之を開き得ざりしことは、或は我部内外一般と此の演説會との關係を稀薄ならしめたであらうが、尙ほ我部の重要行事の一たるを失はず、五月五日にはその派遣辯士の慰勞會が行はれてゐるのである。又質的に云つても此演説會は尤も充實した、且つ氣持ちよき會合であつたのである。

大正六年度 大正五年九月—六年八月

部長 安藤勝一郎
理事 安藤明道
坂口祐憲
高橋實

意氣の人 喜多熊藏

噴煙濛々 吉田源藏

所感 徳永益雄

感想 白根秀輔

土の中より 竹内登太郎

○校風宣言演説會 九月十一日宣誓式後

校風の宣言 安藤明道

○新人生歡迎演説會 九月二十二日 於講堂

在學の目的 來間恭

校風につきて 山内元次

居常雜感 横田榮治

自由につきて 岸井榮知雄

次いで汐見・富士谷兩先輩の演説があつた。

○第四回神陵擬國會 二月三日午後一時

内閣及政府委員

總理大臣	前代議士	森田茂
外務大臣		本庄修
内務大臣		竹内登太郎
陸軍大臣		廣瀬經一
海軍大臣		相原愛祐
大藏大臣	京大	末川博
司法大臣		高橋尙俊
文部大臣		安藤明道
逓信大臣		坂口祐憲
農商務大臣		高橋實

内閣書記官長 平貞藏

鐵道院總裁 池田了實

法制局長官 吉弘基彦

警視總監 友成五郎

朝鮮總督 芦澤利明

臺灣總督 宮野省三

關東都督 松野尼慈顯

議長 長 法學博士 神戶正雄

副議長 長 京大 向井章

全院委員長 山田卯三郎

豫算委員長 中村豊一

請願委員長 高室一彦

懲罰委員長 三井康生

立憲神陵黨役員

總裁 前代議士 森田茂

第二中期

總務 石田中郎

全 平田 央

全 田中守三

全 河村泰三

幹事 長 下剛次郎

幹事 佐々木道雄

全 山梨綱平

立憲民主黨役員

總 裁 法學博士 小川郷太郎

總 務 前代議士 渡邊 昭

全 望月小太郎

全 江口胤顯

全 富田健治

全 吉田源藏

幹事 長 小西信愛

一四二

幹事 中村豊一

全 三井康生

○對一高聯合演說會 四月五日午後六時 於京大學生

集會所

開會の辭 安藤理事

固き一粒 三高來間 恭

若き者の誇り 一高鶴見 憲

貴き犠牲者 三高小西信愛

人間第一義の問題 一高河西太郎

人生の藝術化 三高濱田壽一

王者の如くに 一高圓地與四松

カールマルクスを憶ひて

興國の青年 三高先輩 汐見三郎

一高先輩 野山忠幹

一高速水部長

挨拶

挨拶 三高 十時先生 った。

閉會後階下にて茶話會を開いた。因に此日午前中は

兩校辯論部員共に將軍塚に登り又東山一帶の幽境を探

○辯士派遣 第八高等學校へ一名

此年、或は部の状況寂莫なりしに非ずや。前の四年度・五年度が、夫々双松會・鶴鳴會等の外廓團體を有して、兎も角も此部の順調なる進展が見られたのであつたが、今やかゝる團體を缺き、又記録に見ゆる所、聯合學生演說大會を失ひ、一人の名士の來演をも見ず、辯士の派遣も亦少く、眞實如何なる事情によりしや、之を知らないが、轉々感慨なきを得ないのである。

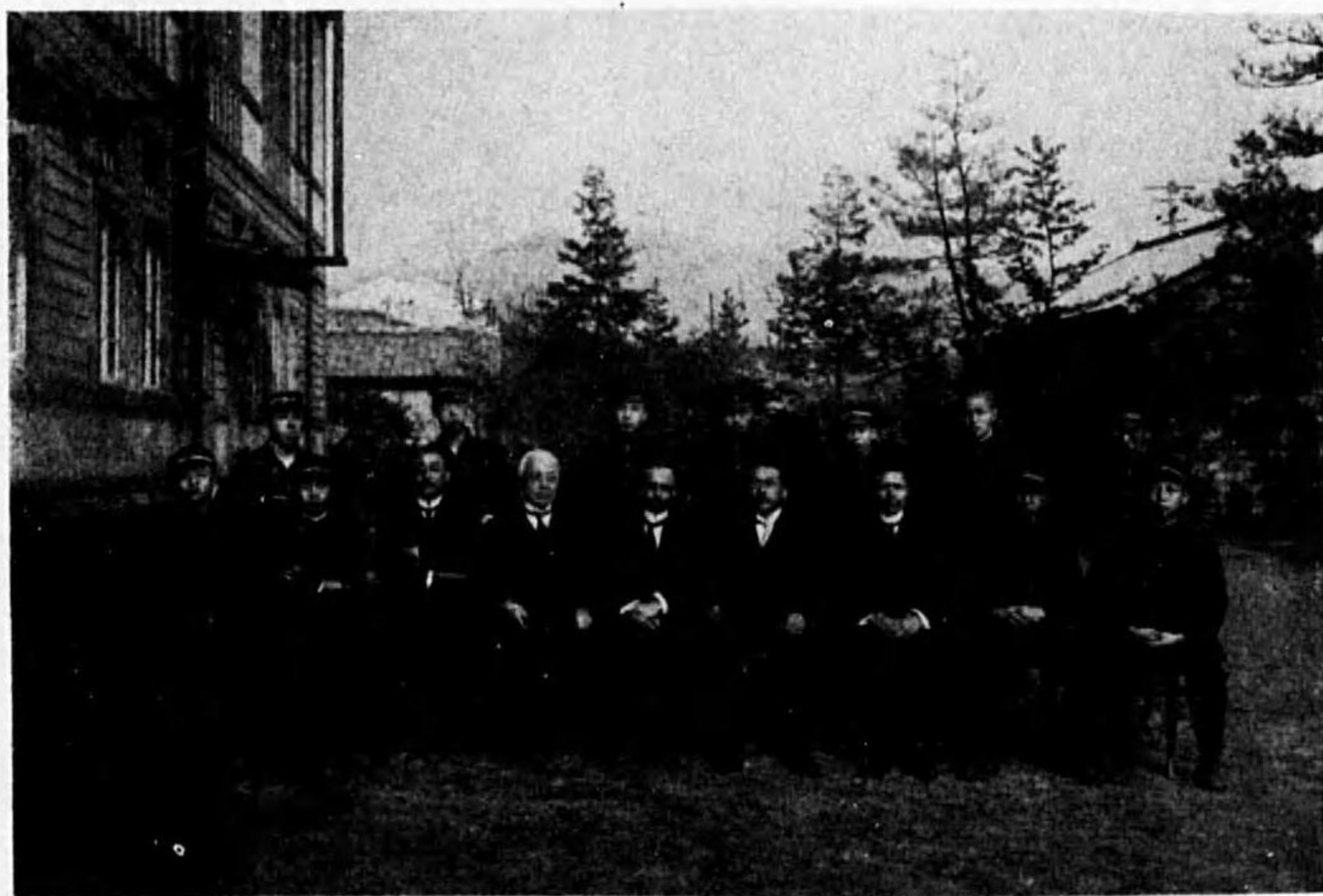
校風宣言の演説は例の如く宣誓式後に行はれ、續いて九月二十二日新入生歡迎演說會の開催を見る、登壇するもの總じて九名(新入生は其内五名)、中にも校風乃至生活の問題を説くもの多く、二、二、甲、山内元次氏は自由主義、小供主義を主張して、固陋主義、老人主義を罵倒し、而も自由主義大いに自覺を要すと叫んで『二部に此人あり』とせられたる、一、二、丁、吉田源藏氏が自由を高唱し熱ある生活を説き多大の共鳴を呼び、最後に一、三、丁、岸井榮知雄氏が人意活動體の自由意識の自由を前提して自由復活を極論し干渉的教育の無價値なるを痛罵せられたるは、何か知ら當時の状況を語るものがある如くである。

二月三日午後早々、第四回神陵擬國會が開かれてゐる。相變らず多數の人士を動員して、極めて盛況に行はれたこと例の如く、各國務大臣の施政方針演說、之に對する質問、次で、税制整理案(戰時利得税問題)學制案(豫

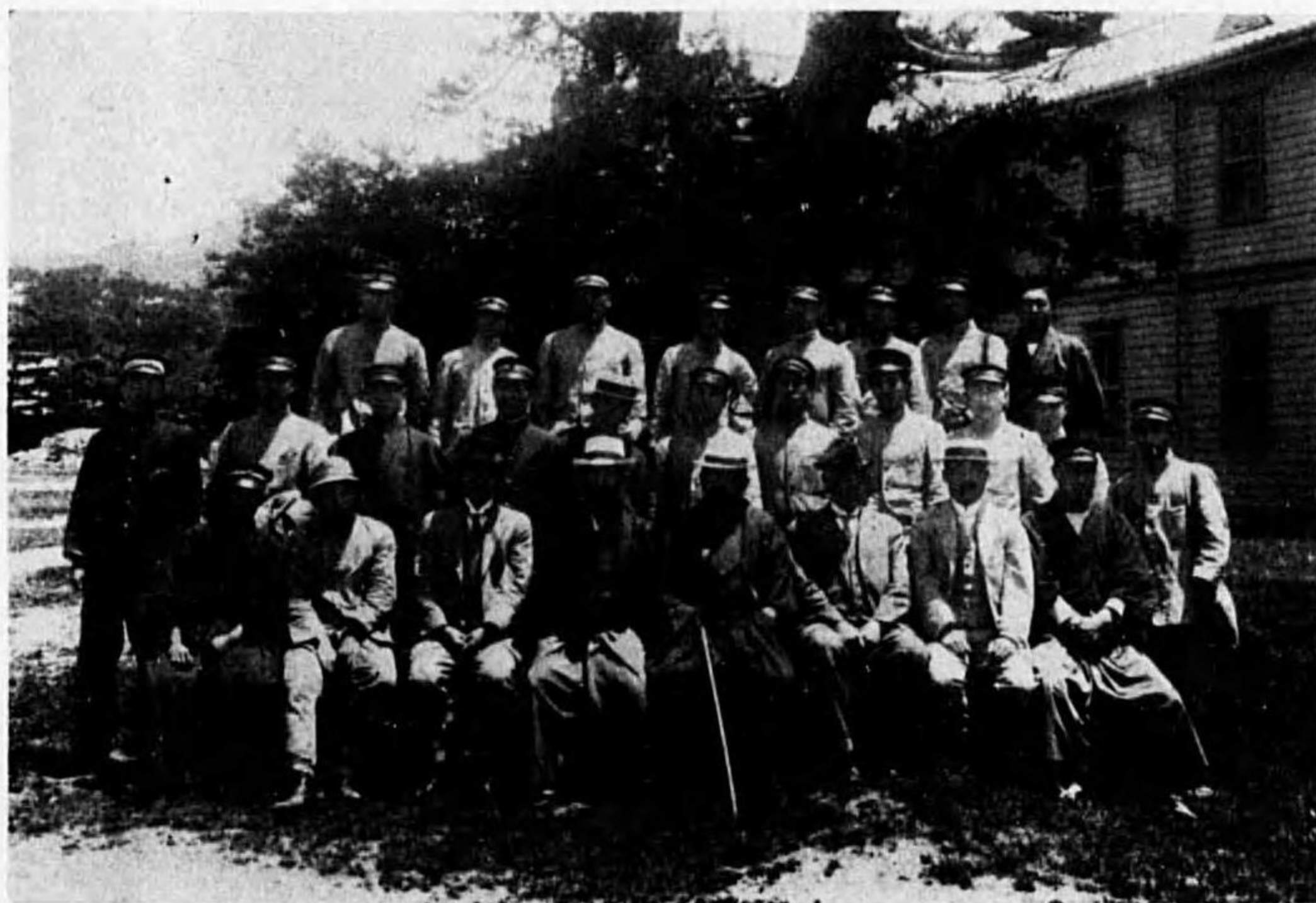
備教育の短縮・ローマ字採用案)について討議せられ、結局、政府不信任案の提出、議會解散に終りしこと、又例年の如くである。

春四月五日夕、對一高聯合演說會が、久し振りに京都で開かれた。即ち會場は京大學生集會所階上。丁度野球決戦の前夜、此の對校演說會は『以て兩軍の舌戦とも見るべく、聴衆は緊張し、辯士は互に意氣を説き、人生觀を論じ場内悽愴の氣に滿つ』。先づ三高來問恭氏は『固き一粒となつて地に埋れる事が一時に死し永遠に生きるの道なり』と説き、次で一高鶴見憲氏は『人生意氣を尊ぶ、青年には潑刺たる力、元氣意氣ありと『若き者の誇り』を高唱せられ、本校小西信愛氏は『貴き犠牲者』と題して農村の危機を訴へその大使命を力説せられた。一高河西太郎氏は自己自身を知ること人生の第一義の問題なり、而も自己自身を知ることが生死の解脱によつてのみ得べしとその信念を語られ、我が濱田壽一氏『人生の藝術化』と題するは『人生は意氣なり感激なり。人生の藝術化は人生の感激化なり。而も宗教は大なる感激なり』とて宗教を讚仰し意氣を張調せられる所、一高鶴見氏の所説と一脈相通するものを認む。又彼れ園地興四松氏は『王者の如くに』と題して『人生を否定して眞に人生の肯定を知り苦より脱却して眞に安樂を得べし』とてかくてこそ『王者の如くに勇しく、力強く』人生を進めよと力説せられた。最後に三高汐見先輩、一高野山先輩の演說あつて速水一高教授、十時三高教授の挨拶型の如く、盛會裡に閉會した。會後階下に茶話會を開き、互に胸襟を開いて打解け合つたと云ふ。蓋し當年度掉尾を飾るものであつた。

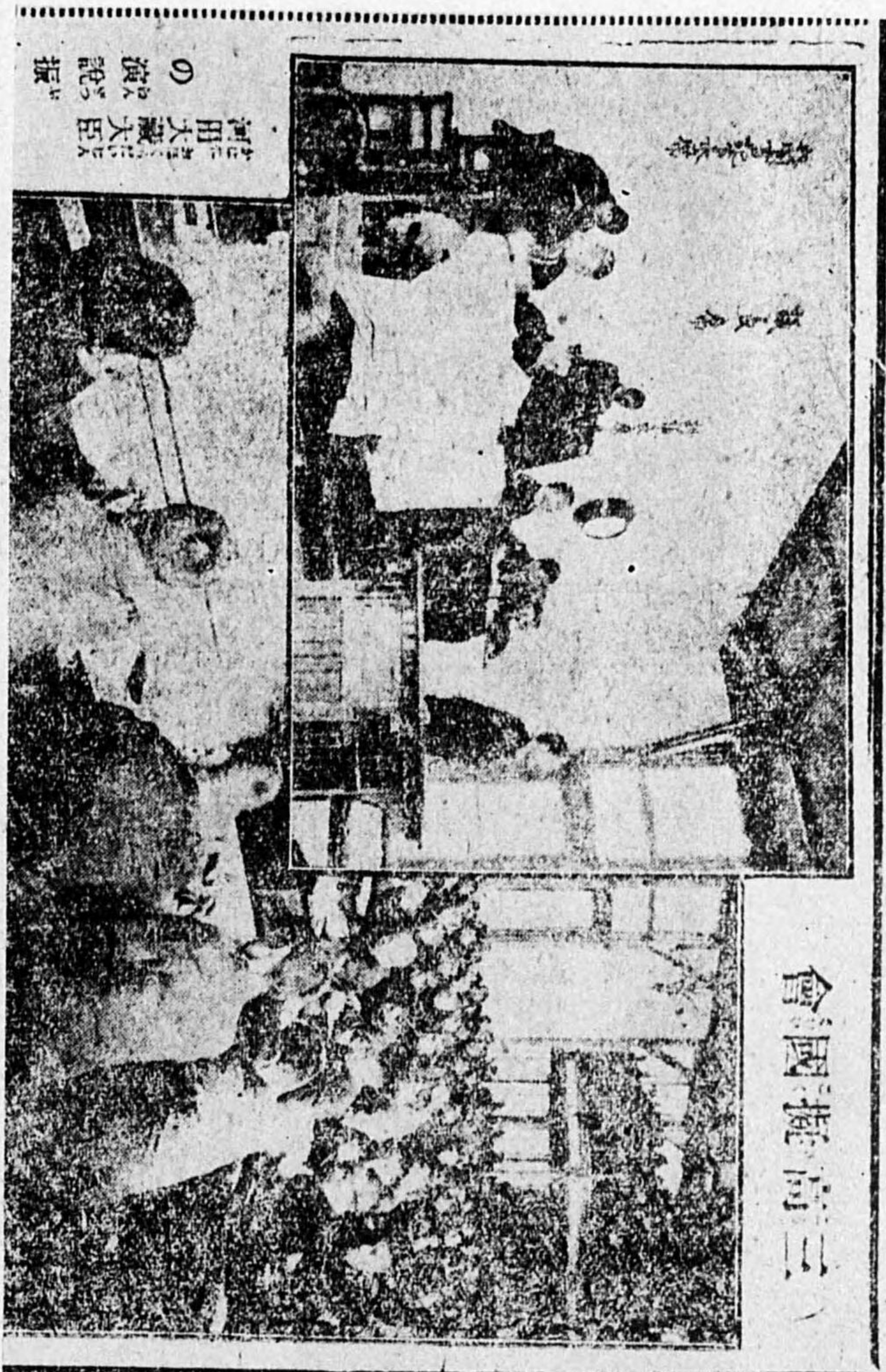
大正七年度 大正六年九月―七年八月



大正六年四月三高三高聯合演說會 二一



大正六年六月送別寫眞 三一



會國擬月二

況狀の會國擬月二年七正大

目一

演説の
河田大藏大臣

- 部長 安藤勝一郎
- 理事 小西信愛
- 小口太郎
- 有山登
- 逓信大臣 三井康生
- 鐵道院總裁 小端辰雄
- 警視總監 佐々波外七
- 法制局長官 赤松喬
- 内閣書記官長 加川航三郎
- 朝鮮總督 內藤眞
- 臺灣總督 大川定一
- 關東都督 西野陸奥太郎
- 最大多數黨立憲神農黨(嚴正中立)
- 總裁 法學博士 神戶正雄
- 總務 藤井崇治
- 部 長 安藤勝一郎
- 理 事 小西信愛
- 小 口 太郎
- 有 山 登
- 逓 信 大臣 三井康生
- 鐵 道 院 總裁 小端辰雄
- 警 視 總 監 佐々波外七
- 法 制 局 長 官 赤松喬
- 内 閣 書 記 官 長 加川航三郎
- 朝 鮮 總 督 內藤眞
- 臺 灣 總 督 大川定一
- 關 東 都 督 西野陸奥太郎
- 校風宣言演說會 九月十一日宣誓式後
- 校風の宣言 景山宣景
- 西田幾太郎博士講演會 十二月一日 於講堂
- 神農擬國會 二月廿四日 於京大法科大講堂
- 内閣總理大臣 法學博士 雄本朗造
- 兼内務大臣
- 大藏大臣 帝大教授 河田嗣郎
- 兼農商務大臣
- 外務大臣 山田卯三郎
- 陸軍大臣 安松治郎右衛門
- 海軍大臣 富田健治
- 司法大臣 小西信愛
- 文部大臣 福田千里
- 第二期

第二中期

全	水谷長三郎
全	北條實乘
全	周東英雄
全	高野嶋之助
幹事	平岩準一
幹事	西原誠直
全	宮本平太郎
多數黨立憲獨立黨(政府反對)	
總裁	法學博士 岡村 司
副總裁	帝大生 汐見三郎
總務	江口胤顯
全	吉田源藏
全	平田耕藏
全	渡邊彌億
幹事	小川福太郎

一四六

幹事	來間 恭
全	細迫兼光
全	松原喜之次
同	景山宣景
全	田村 基
少數黨立憲真正會(政府黨)	
總裁	法學博士 小川郷太郎
副總裁	三高教授 十時 彌
總務	帝大生 富士谷秀超
全	安藤明道
全	平田 央
幹事	重盛二三
幹事	小口太郎
全	有山 登
議	長 法學博士 織田 萬(神)

○三高一高聯合演說會 四月五日午後五時 於京大學

眞の成功	三高 内 藤 眞
噴火山上の舞踊	三高 景山 宣景
草原の牧歌	三高 小口 太郎
生の白熱	一高 岡崎嘉平太
餘 燼	一高 小田垣光之輔

生集會所

次第其他不詳

○創立滿五拾週年記念本校出身者大講演會(嶽水會主)

第二二期

催)五月二日 於新徳館

晝の部(午後一時)

司會者	教授 林 和太郎
開會の辭	教授 安藤勝一郎
飛行家の危險度	大學教授 濱部源次郎
人生の改造	文學博士 姉崎 正治
日本人の外國語	醫學博士 淺井健吉
外交談	無任所公使 日置 益
夜の部(午後五時半)	
司會者	教授 高橋鉦太郎
苦言	醫學博士 伊藤隼三
感想	法學博士 毛戸勝元
濠洲に於ける冒險談	實業家 中村平三郎
所感	工學博士 大井清一

明治文化史と獨逸國民の統一

文學博士 阪口 昂 ○巡廻講演旅行

逸 題 法學博士 添田 壽一

七月暑中休に入つて山田卯三郎・小西信愛・三井康生

逸 題 濱口 雄幸

等が之を滋賀地方に試みた。

閉會の辭 教授 由比 質

此一年も亦前年度の踏襲に終つたと云ひ得る。而もその多からざる事業についても記録充分ならず、よくその實際を知り得ないことは重ねて遺憾とせられねばならない。即ち相變らず盛なるは神陵擬國會であつて、今や法科大學教授の錚々の援助を得、併せ配するに十時、由比兩教授の出演及び我部先輩・現役部員の協力によつて、此年二月二十四日『時恰かも東都に於て帝國議會召集中にして政治問題朝野人士の間に喧しき時に際し、多大の興味と希望とを以て第五回神陵議會は迎へられた。かくて當年擬國會に於ては、八々艦隊完成の海軍擴張案が通過せられたる他、日露・日支の問題が現實の時局に照し合せて眞實そのまゝに論ぜられ、工場法中改正法律案・治安警察法中改正法律案を提出して社會政策的主張の行はれしが注目せられる所である。

大正七年五月一日は本校創立滿五十年の紀念日にして、並びに御大典紀念館即ち新徳館尙賢館の開館式の行はれたる佳き日であつた。此の日嶽水會は夜、生徒祝賀會を催し、翌二日午後一時より記念本校出身者大講演會を開催し、又三日には陸上運動大會を舉行して祝意を表したのであつた。その講演會の催も、敢て辯論部の單獨主催に係るものにはあらざるも尙且つ部史上記録さるべきなることは勿論である。蓋し、學校當局が直接訓育上の

目的を以て行ふものにあらざる以上、之を部史記録より除外すべき理由なきが故である。敢て茲に特記する所以である。

七月夏休みに入つて、講演旅行を始めて滋賀地方に試みたことが傳へられてゐる。講演旅行の詳細については次期に於て述べることにする。

尙ほ末筆になつたが、此年十二月、西田幾太郎博士の來演を得たことは蓋し特筆せらるべき所であつて、その詳細は不幸之を知り得ないが、『善の研究』の名著によつて夙に我國哲學界に新生面を開拓せられたる博士の講演が、如何ばかりの感動を以て迎へられたるかは想像に難くない所である。

第三後期 (大正七年より大正十一年に至る)

概観 此の期は局部的象徴的に見れば金子校長の時代であり、大局的に一般思潮との關聯に於て眺めるならば、我國デモクラシーの思想が従来の議政壇上を離れて、社會民衆そのものへと移りゆく過渡の時代に當る。かくて、當期に於て行はれたる部の事業は安定性・永續性を缺くに到り、全く過渡時代としての特色を備へ、而かも未だ次期建設への過程に入らず破壊時代であつた所に、その第三期初頭と區別せられる理由を持つ。今その思想的推移の詳細は少時措き、茲では唯々概括的な觀察に止め置くこととする。

先に、酒井校長との折衝によつて確立せられたる謂は、『個人の權威を認め舊自己を打破して新自己を建設する』の自由は、其の後三高の指導精神として各人の自覺を深め、或は深く自我を探求し、且つその積極的な發展を促して、好もしき結果を齎したのであつたが、斯る一面の成功はやがて自由に對する痛切なる願望の飽滿を來し、謂はゞ茲に自由あつて自由なきが如き状態を呈し、その根底に於ける自己自身に對する自覺を缺きし結果、徒に外面的行動の自由のみ要求し、或ひは自由は放縱と墮したとさへ稱せられる状態にまで陥らんとしてゐたのであつた。かゝる時偶々酒井校長は健康勝れ給はず、大正七年十二月二十八日を以て薨去せられ、全神農悲みの中に黄泉の旅に立たれたのであつた。かくて金子校長の來任を見て、此の放縱化の風益々甚しく、吾が部によつて行はれた宣誓式後の校風自由演説の記事が、嶽水會雜誌部報欄に、此の數年見られないのは、或ひはか

ゝる無自覺・無意識時代の一端を語るものでなからうか。

『政治より社會へ』の推移は唯々社會思潮との關聯に於てのみ理解される。大正六年十一月に於けるレーニン農政府の樹立、翌年十月に起つた獨逸國內の社會民主的革命は、蓋し人類解放運動の歴史に巨大な足跡を遺した者であり、此の影響は直ちに東洋の一角にも傳つて、從來の社會協動的な考へ方は一歩進んで過激思想の輸入翻譯となつて現はれた。茲に於て社會そのものに對する認識は急速に高まつて、從來の議會政治は最早社會と遊離した存在とも考へられるに至つたのである。

斯うした極端なる思想の交錯は、漸くに行はれたる西田哲學の影響を受けて思索生活の叫ばれたとも結びついて、大正十年度に至り遂に擬國會の開催を見ざるに至つたのである。其の他部の事業は全般に互つて安定性を失ひ、終に此の期に於て擬國會・全國學生聯合演説會が清算され、一方に於て巡廻講演旅行・二校聯合演説會及び招待講演等の新しき擡頭を見たのであつた。だが之等新しき事業もその安定性・永續性を持つに至つたのは、金子校長辭任以後のことに屬する。

扨て、金子新校長の方針はやがて校友一般との間に意志の疎隔を生ぜしめ、茲に、全校友は相一致して當局に對することとなり、再び自由の擁護が叫ばれ、其の結果、大正十年十一月に至つて生徒會議の成立を見てゐる。之は既に一高に存せし自治制度に倣つて『自由』の維持擁護のために組織せられたものであり、後所謂七教授免官問題の起りしときには指導的役割を演じてよくその主張を貫徹したるは、他の同種事件と比較して極めて興味あ

る所であり、且つ、當時應援團の編成漸く組織的となつて、而も全校よく一致し得たことと關聯して、攻究さるべき多くのものを含むのである。尙詳細は後に譲つて以下各年度について考察を進めることとするも、此の過渡時代は何故か記録に於て缺くる所あり、吾人の論述、或は至らざる所多々存するを惧るゝものである。

大正八年度 大正七年九月―八年八月

部長 安藤 勝一郎
理事 來 間 恭
(中途辭任)

藤 田 一 郎
井 上 愛 民

小川 福太郎
(來問氏と代る)

○巡廻講演旅行 神戸・龍野・伊丹・宮津方面へ九月四

日出發九日歸洛

参加者 栗原教授・山田卯三郎(京大)・三井康生(京大)・來問恭・景山宣景・小川福太郎

○校風宣言演說會 九月十一日宣誓式後

校風の宣言

小川福太郎

○第六回神陵擬國會 二月十六日 於三高新徳館

内閣總理大臣 法學博士 田 島 錦 治

外務大臣	法學博士	末廣重雄
大藏大臣	法學博士	神戶正雄
兼農商務大臣		
内務大臣		景山宣景
文部大臣		久保芳雄
陸軍大臣		鶴原浩二
遞信大臣		野呂俊員
司法大臣		松原喜之次
海軍大臣		鈴木 剛
鐵道院總裁		廣 瀬 剛
法制局長官		松山一忠
警視總監		田島義夫
立憲自由黨(政府與黨)		
總 裁	法學博士	田島錦治
總 務		小川福太郎
同		細迫兼光
第二期		

幹事長	田村 基
顧問	京大 中西有三
同	同 富田健治
同	同 山田卯三郎
同	同 津田元一
立憲社會黨(在野黨)	
總 裁	法學博士 市村光恵
副 總 裁	京大 阪本正道
總 務	平岩準一
同	横田榮治
幹事長	宮本平太郎
顧問	京大 富士谷秀超
同	同 安藤明道
同	同 田中守三
同	同 田万清臣
一五三	